山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集

植木場一遺跡

発掘調査報告書

1998

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

植木場一遺跡

発掘調査報告書

平成10年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

第1次調査区全景（上空西より）

ＳＤ205堀跡土層断面（北東から）

SE2291出土遺物

「諧」刻書石製品

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成８・９年度に発掘調査した、植木場一遺跡の調査成果をまとめたものです。

植木場一遺跡は、米沢盆地の北東部を占める南陽市にあります。南陽市は果樹の栽培がさかんで、ぶどう・りんご・さくらんぼなど多くの種類の果物が作られています。市街地にある赤湯温泉は、中世末に始まり、歴代の米沢藩主の御留湯として栄えました。また南陽市は古墳が密集する地域でもあり、昭和55年に国指定史跡となった稲荷森古墳は、米沢盆地一円の支配首長を葬った前方後円墳とされます。

この度一般県道南陽川西線道路改良工事に伴い、工事に先立って植木場一遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の石器や、５世紀中葉と考えられる円墳１基、平安時代の溝跡・土壙・竪穴住居跡・井戸跡、明治時代の大火の廃材を埋設した土壙等、数多くの遺構を検出し、土師器・須恵器・陶磁器等の遺物を得ました。中でも、墨書土器が集中して出土している井戸跡は類例が少なく、何らかの祭祀に関連すると考えられます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、一般県道南陽川西線道路改良工事に係る「植木場一遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　植木場一遺跡（ＤＮＹＵＩ）　遺跡番号　平成２年度登録
所　在　地　　山形県南陽市大字宮崎字植木場一・町屋敷一・二・地蔵堂他
調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査期間　　平成８年４月１日～平成９年３月31日（第１次調査）
現地調査　　平成８年９月２日～平成８年11月29日
調査担当者

調査第二課長	野尻　侃
主任調査研究員	尾形　與典
調査研究員	小関　真司（調査主任）
嘱託職員	渡辺　薫

調査期間　　平成９年４月１日～平成10年３月31日（第２次調査）
現地調査　　平成９年５月７日～平成９年７月10日
調査担当者

調査第二課長	野尻　侃
主任調査研究員	尾形　與典
調査研究員	高橋　敏（調査主任）
調査研究員	高桑　登

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県米沢建設事務所、南陽市教育委員会、東南置賜教育事務所等関係機関に協力いただいた。また出土遺物等について、田辺昭三氏(京都造型芸術大学)、平川　南氏(国立歴史民俗博物館)、吉野一郎氏(南陽市教育委員会)、手塚　孝氏(米沢市教育委員会)から御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は、調査概要・環境を渡辺　薫、１次遺構を小関真司、１次遺物・２次遺構・２次遺物・まとめと考察を高橋　敏、近世遺物を高桑　登が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、菅原哲文、豊野潤子が担当し、全体については野尻　侃が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測　　㈱日本テクニカルセンター
理化学試料分析　　株式会社パリノ・サーヴェイ
出土石器実測　　株式会社シン技術コンサル

7　出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＴ……竪穴住居跡	ＳＢ……掘立柱建物跡	ＳＰ……柱穴	ＳＦ……土塁
ＳＡ……柵列・杭列	ＳＥ……井戸跡	ＳＤ……溝跡	ＳＧ……河川跡
ＳＨ……墳墓	ＳＫ……土壙	ＥＢ……柱穴掘方	ＥＬ……カマド
ＲＰ……土器	ＲＱ……石器・石製品	ＲＷ……木製品	

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記の通りである。

（1）　遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）　グリッドの南北軸は、Ｎ－5°－Ｅを測る。

（3）　遺構実測図は1/40・1/50・1/60・1/80・1/100・1/300・1/400縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

（4）　遺物実測図・拓影図は、土器については1/3を標準として採録し、それ以外の場合は個々に表示した。

（5）　遺物図版については1/3の縮尺であるが、一部については任意の縮尺である。

（6）　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

（7）　遺物について、本文中で取り上げる場合には、「第○図△番」を「○－△」と略記した。

（8）　土器実測図・拓影図の断面では、黒ベタが須恵器、無表示のものは土師器及び中世以降の土器を表している。また、土器内面の網点は黒色処理を表している。

（9）　拓影図は、左側から外面・断面・内側を表している。

(10)　出土遺物観察表中の(　)内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

(11)　遺構覆土の色調の記載については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

(12)　参考文献は本文最末にまとめた。本文中に引用の際は(文献○)のように記した。

目　次

I　調査の経緯
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の概要 …… 1
II　遺跡の立地と環境
1　地理的環境 …… 3
2　歴史的環境 …… 3
III　第1次調査
1　検出された遺構
1）　遺構の分布 …… 9
2）　1区の遺構 …… 10
3）　2区の遺構 …… 14
4）　3区の遺構 …… 20
2　出土した遺物
1）　縄文時代 …… 27
2）　古墳時代 …… 27
3）　平安時代 …… 27
4）　近世以降 …… 29
IV　第2次調査
1　調査の経過 …… 47
2　検出された遺構
1）　遺構の分布と層序 …… 47
2）　検出された遺構
古墳時代 …… 51
平安時代 …… 52
近世以降 …… 55
3　出土した遺物
1）　古墳時代 …… 75
2）　平安時代 …… 75
3）　近　世 …… 78
4）　石　器 …… 79
5）　石製品・その他 …… 80
V　まとめ …… 107
SX2293・SE2291出土須恵器坏の分類と組成 …… 108

植木場一遺跡出土文字資料について……112
報告書抄録……122
付　編

表

表1　1次調査出土遺物観察表(1)……43
表2　1次調査出土遺物観察表(2)……44
表3　1次調査出土遺物観察表(3)……45
表4　1次調査出土遺物観察表(4)……46
表5　2次調査出土遺物観察表(1)……101
表6　2次調査出土遺物観察表(2)……102
表7　2次調査出土遺物観察表(3)……103
表8　2次調査出土遺物観察表(4)……104
表9　2次調査出土遺物観察表(5)……105
表10　2次調査出土遺物観察表(6)……106

グラフ

グラフ1　指数分布……111

挿　図

第1図　遺跡位置図……2
第2図　調査概要図……4

1次調査

第3図　1区遺構配置図・基本層序図…6
第4図　2・3区遺構配置図・基本層序図…8
第5図　遺構実測図(1)……11
第6図　遺構実測図(2)……13
第7図　遺構実測図(3)……15
第8図　遺構実測図(4)……16
第9図　遺構実測図(5)……17
第10図　遺構実測図(6)……18
第11図　遺構実測図(7)……19
第12図　遺構実測図(8)……21
第13図　遺構実測図(9)……23
第14図　遺構実測図(10)……24
第15図　遺構実測図(11)……25
第16図　遺構実測図(12)……26

第17図　遺物実測図(1)……31
第18図　遺物実測図(2)……32
第19図　遺物実測図(3)……33
第20図　遺物実測図(4)……34
第21図　遺物実測図(5)……35
第22図　遺物実測図(6)……36
第23図　遺物実測図(7)……37
第24図　遺物実測図(8)……38
第25図　遺物実測図(9)……39
第26図　遺物実測図(10)……40
第27図　遺物実測図(11)……41
第28図　遺物実測図(12)……42

2次調査

第29図　基本層序図……48
第30図　遺構配置図……50
第31図　遺構実測図(1)……56
第32図　遺構実測図(2)……57
第33図　遺構実測図(3)……58
第34図　遺構実測図(4)……59
第35図　遺構実測図(5)……60
第36図　遺構実測図(6)……62
第37図　遺構実測図(7)……63
第38図　遺構実測図(8)……64
第39図　遺構実測図(9)……65
第40図　遺構実測図(10)……66
第41図　遺構実測図(11)……67
第42図　遺構実測図(12)……68
第43図　遺構実測図(13)……69
第44図　遺構実測図(14)……70
第45図　遺構実測図(15)……71
第46図　遺構実測図(16)……72
第47図　遺構実測図(17)……74
第48図　遺物実測図(1)……81
第49図　遺物実測図(2)……82
第50図　遺物実測図(3)……83
第51図　遺物実測図(4)……84
第52図　遺物実測図(5)……85
第53図　遺物実測図(6)……86
第54図　遺物実測図(7)……87
第55図　遺物実測図(8)……88
第56図　遺物実測図(9)……89
第57図　遺物実測図(10)……90
第58図　遺物実測図(11)……91
第59図　遺物実測図(12)……92
第60図　遺物実測図(13)……93
第61図　遺物実測図(14)……94
第62図　遺物実測図(15)……95
第63図　遺物実測図(16)……96
第64図　遺物実測図(17)……97
第65図　遺物実測図(18)……98
第66図　遺物実測図(19)……99
第67図　遺物実測図(20)……100

第68図　SX2293・SE2291須恵器坏分類図……112
第69図　SX2293・SE2291土器組成図……113
第70図　植木場一遺跡墨書集成……117
第71図　植木場一遺跡文字資料出土分布図……119

図　版

巻頭図版１　第１次調査区全景
ＳＤ205堀跡土層断面
巻頭図版２　ＳＥ2291井戸跡出土遺物
「詛」刻書石製品

１次調査

図版１　１区全景　２・３区全景
図版２　調査状況
図版３　１区基本層序
図版４　遺構精査状況
図版５　遺構精査状況
図版６　遺構精査状況
図版７　遺構精査状況
図版８　遺構精査状況
図版９　遺構精査状況
図版10　遺構精査状況
図版11　３区遺構検出・完掘状況
図版12　遺構精査状況
図版13　遺構精査状況
図版14　遺構精査状況
図版15　出土遺物(１)
図版16　出土遺物(２)
図版17　出土遺物(３)
図版18　出土遺物(４)
図版19　出土遺物(５)
図版20　出土遺物(６)
図版21　出土遺物(７)
図版22　出土遺物(８)
図版23　出土遺物(９)

２次調査

図版24　遺構検出状況　調査区空中写真
図版25　調査状況
図版26　遺構精査状況
図版27　遺構精査状況
図版28　遺構精査状況
図版29　遺構精査状況
図版30　遺構精査状況
図版31　遺構精査状況
図版32　遺構精査状況
図版33　遺構精査状況
図版34　遺構精査状況
図版35　出土遺物(１)
図版36　出土遺物(２)
図版37　出土遺物(３)
図版38　出土遺物(４)
図版39　出土遺物(５)
図版40　出土遺物(６)
図版41　出土遺物(７)
図版42　出土遺物(８)
図版43　出土遺物(９)
図版44　出土遺物(10)
図版45　出土遺物(11)
図版46　出土遺物(12)
図版47　出土遺物(13)
図版48　出土遺物(14)
図版49　出土遺物(15)
図版50　出土遺物(16)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

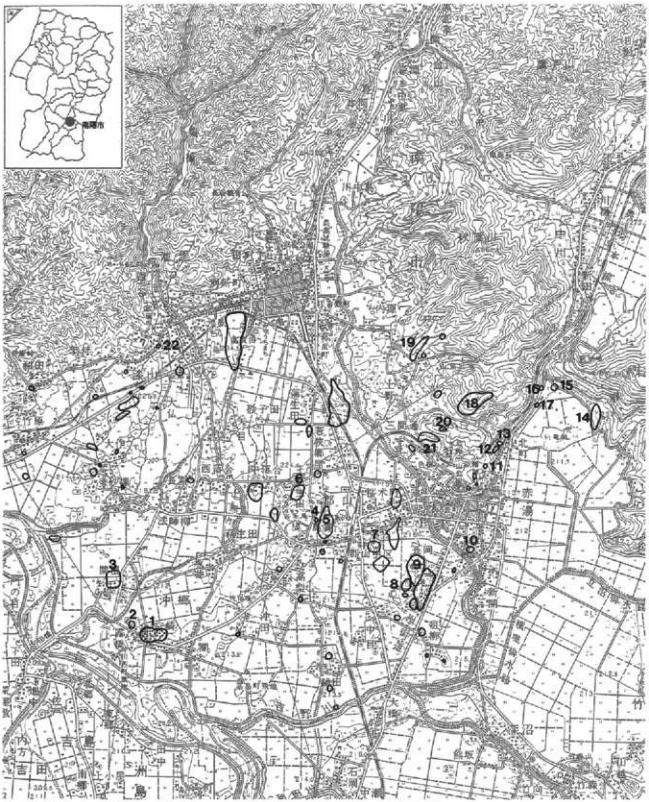
植木場一遺跡は、南陽市南部の宮崎地区、川西町に抜ける小松街道沿いにある遺跡である。この地は地元の人々に「御殿」と呼ばれており、米沢藩主である上杉家の鷹狩り時の休み所として「御殿跡」と伝えられている。この宮崎地区に一般県道南陽川西線道路改良工事が計画され、平成２年度に山形県教育委員会が実施した遺跡群細分布調査の結果、奈良・平安時代の遺跡として植木場一遺跡が登録された。また、山形県中世城館跡調査では伝「御殿跡」といわれる地域が「宮崎館跡」として新規登録されている。

山形県教育委員会文化財課では関係機関との調整を図る目的で、平成５・７年度に試掘調査を実施し、事業区内における遺構・遺物の分布状況を確認した。その内容から、植木場一遺跡は縄文・奈良・平安・中・近世などが複合した遺跡であることが分かった。この調査結果を受けて文化財課と米沢建設事務所の間で協議を重ね、工事に先立って記録保存のための緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって実施することになったものである。

2　調査の概要

今回の発掘調査は植木場一遺跡の推定範囲約70,000㎡のうち道路計画予定地域の2,700㎡を実施した。当初、発掘調査対象面積は3,000㎡であったが、調査を進めていくなかで一部家屋移転が遅れる区域が判明したため、米沢建設事務所と再度協議を行った結果、その部分(面積約300㎡)については平成９年度実施の発掘調査地区と合わせて調査を行うことが決定した。
発掘調査は平成８年９月２日から11月28日までの実質60日間行った。調査区の中央を市道宮崎・屋敷線が通っているため、宮崎・屋敷線を挟んで東の調査区を１区、西を２・３区と便宜上呼称した。２・３区については水路を基点として東を２区、西を３区としている(第２図)。

調査はまず、道路の計画図に基づいて調査区を設定し、次いで遺構・遺物の検出面までの深さなどを再確認するためのトレンチを入れた。その結果をもとに重機械を用いて表土除去を行った。その後、調査を効率的に進めるため５ｍ×５ｍを一区画とするグリッドを道路予定のセンター杭を基準にして設定し、出土した遺物や遺構を正確に記録するための基準杭とした。次に、ジョレンで丁寧に土を削り(面整理)、土色や土質の違いに注意しながら遺構の検出を行い、石灰などでマーキング(遺構検出)した。確認した遺構は土層の堆積状況などを確認するためのベルトを設定し、移植篦等を使って注意深く掘り下げ(遺構精査)、合わせて遺物の検出、取り上げを行った。発見された遺構、遺物については写真や図面などに記録した。遺物の取り上げは、グリッド単位毎にし、遺構内出土の遺物は遺構毎に番号を付した。１区東側の堀跡(ＳＤ205)については土量の多さと一部上層を除いて出土遺物がほとんど皆無なことからやむを得ず重機による掘り下げを実施した。これらの成果を地元の人々に広く知っていただくため、調査説明会を11月21日に開催し、悪天候ながら多くの参加者を得た。調査終了後は安全対策のため重機による埋め戻し・整地を行い、11月29日に現地の調査を終了した。



第１図　遺跡位置図(国土地理院５万分の１地形図「南陽」を使用)

II　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

遺跡が所在する南陽市は山形県南部、米沢盆地の北部に位置する。白鷹丘陵より吉野川が流れ出た平野部には吉野川、織機川などにより形成された扇状地が幾つも複合して宮内扇状地が形成されている。これらの河川が枝分かれして南流し最上川に注いでいたため、土砂が堆積されて自然堤防状の微高地が放射状に分布する。遺跡の多くはこの微高地上に立地している。また、南陽市の東側に位置する白竜湖大谷地周辺にも多くの遺跡が存在している。植木場一遺跡は南陽市の沖郷地区に所在し、最上川とその支流の上無川の中間の微高地に立地する遺跡である。前述の扇状地から見れば扇端部にあたり、遺跡の南方700ｍを最上川が流れている。遺跡の範囲は東西400ｍ以上、南北180ｍに広がり、面積が約70,000㎡と推定される。地目は宅地、畑地、果樹園となっており、標高は約211ｍを測る。遺跡の周辺には河川跡と考えられる用水池が連続してみられるが、今回の植木場一遺跡の調査からも河川跡が検出され、古墳時代の土師器、平安時代の須恵器などが出土した。また調査区の東端からは地山が落ち込んでいる様相が観察され、東側は湿地もしくは沼地となっていたことが確認された。

2　歴史的環境

南陽市内の遺跡の発見・確認の大半は、昭和55年以来南陽市教育委員会が市史編纂事業の中で実施してきた分布調査によるところが大きく、その数は約130遺跡を数える。またそれらの幾つかは南陽市教育委員会、山形県教育委員会などにより発掘調査がなされている。

縄文時代の遺跡では昭和35年、昭和59年と二度にわたり大野平遺跡が発掘調査され、竪穴住居跡などが検出された。また昭和62年には月ノ木Ｂ遺跡が緊急発掘調査されている。いずれも沈線文土器、貝殻沈線文土器などの縄文時代早期の良好な資料が得られている。

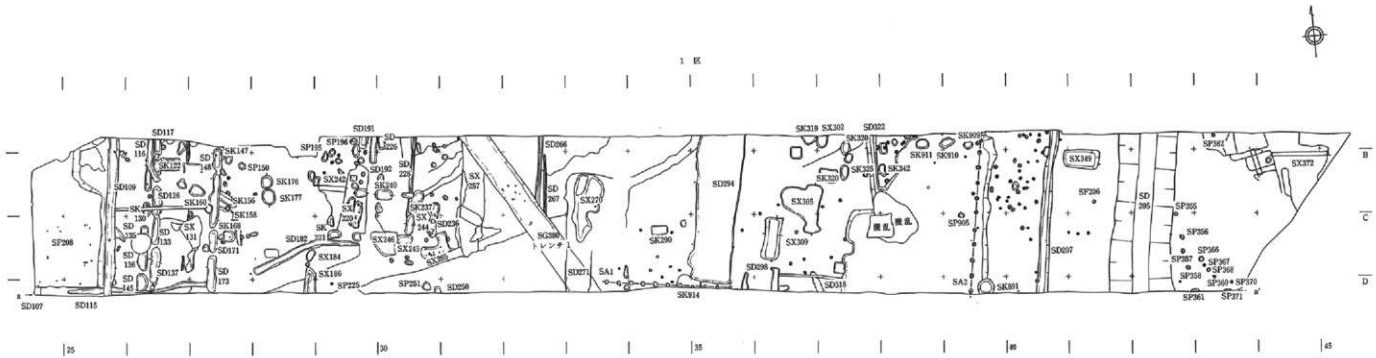
弥生時代の遺跡は数が少なく未確認の遺跡もあると考えられる。萩生田遺跡からは稲の穂を刈り取るのに使われる石庖丁が出土した。

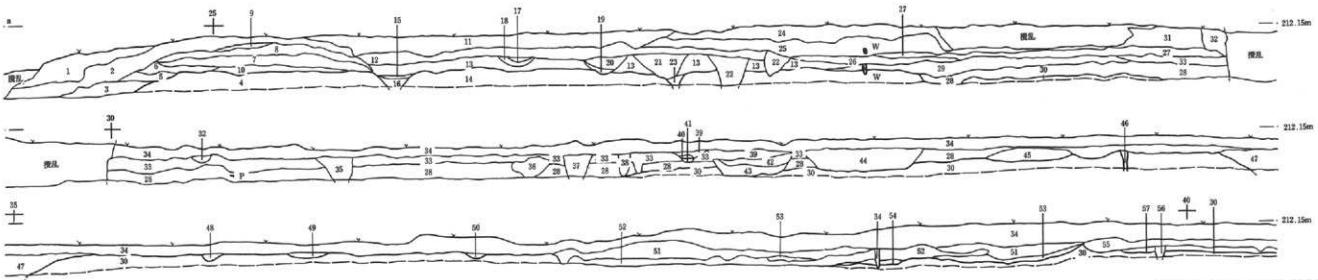
古墳時代の遺跡としては主軸長96ｍの前方後円墳である稲荷森古墳が広く知られている。その他にも南陽市北縁の丘陵には蒲生田古墳群、二色根古墳群などが密集する。平野部には諏訪前遺跡や沢田遺跡等の集落が営まれている。沢田遺跡は昭和59年に山形県教育委員会により発掘調査され、古墳時代の住居跡や奈良・平安時代の建物跡が検出された。

奈良・平安時代の遺跡は宮内扇状地に多く立地する。特に沖郷地区には「郡山」という地名から、古代置賜郡衙(郡役所)があったのではないかと推定されている。一時期、置賜の中心地であったことが、条里制が推定されていることからもうかがえる。梨郷地区の平野山古窯では須恵器が生産され、周辺の集落へ供給されていたであろう。

中・近世の遺跡としては当遺跡の北方に露橋館跡や関根館跡が所在する。この地域には「屋敷」や「館」という地名が多く残っていることからもその存在がうかがえる。当遺跡内には上杉家鷹狩り時の「御殿跡」と伝えられる地域があり、『上杉家御年譜』には歴代藩主が「御湯療」中、狩りや遊覧などで宮崎に立ち寄ったことが記されている。また黒井堰絵図や明治８年の字限図からは館跡の名残である堀や、土塁が依存した状況が見てとれる。

第2図　調査地遠景

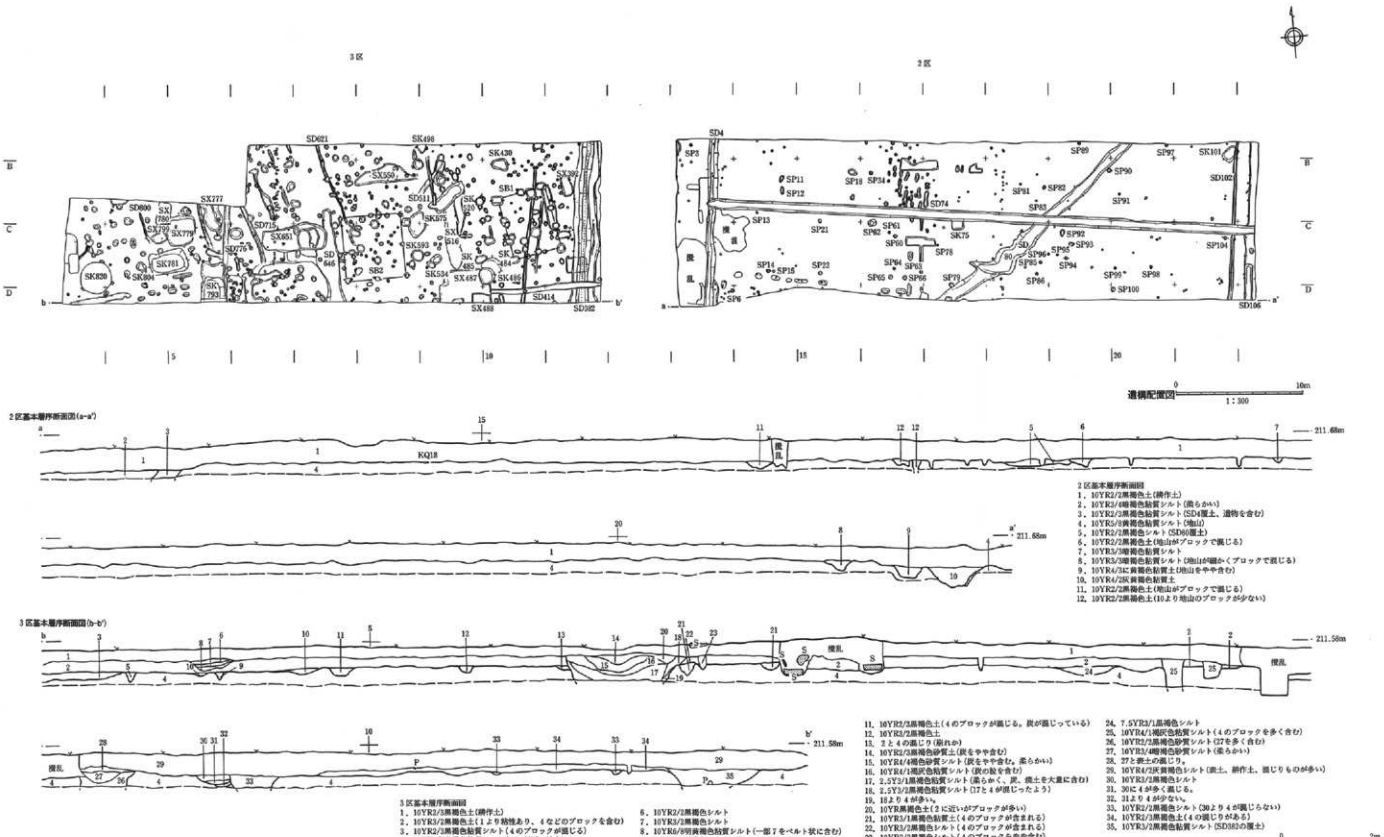




1区基本層序断面図(a-a')
1. 10YR7/4にぶい黄橙色土(混らかい。堰め土。新しいゴミ入る)
2. 10YR3/2黒褐色土(一部にビニールなど入る。堰め土)
3. 10Y3/2オリーブ黒色砂質シルト(酸化すると黄色化するSD107の堆積土)
4. 10YR5/8黄褐色砂質シルト(鉄分が多いと思われるこの付近の(地山)
5. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
6. 10YR4/4褐色シルト(ほとりしまっている。有機物(植物か)を多く含む。)
7. 10YR2/2黒褐色土(有機物を多く含む)
8. 10YR2/3黒褐色土(有機物を多く含む。褐色土のブロックをやや含む)
9. 10YR2/2黒褐色砂質シルト
10. 10YR3/3黒褐色砂質シルト(柔らかい)
11. 10YR4/6褐色土(酸々なブロックを含む堰め土)
12. 10YR4/3にぶい黄褐色土(有機物、少礫をやや含む)
13. 10YR4/3にぶい黄褐色土(12よりややさらさらしている)
14. 10YR4/6褐色粘質土(この部分の地山、4に近い)
15. 10YR3/3暗褐色粘質シルト(柔らかい。SD109覆土)
16. 10YR3/3暗褐色粘質シルト(やや4、14のブロックを含む。SD109覆土)
17. 10YR2/3黒褐色シルト
18. 10YR5/8黄褐色砂質シルト(17もブロックで含む)
19. 10YR5/8黄褐色砂質シルト
20. 10YR2/2黒褐色土(褐色土ブロックを多く含む)
21. 10YR2/2黒褐色土(褐色土ブロックを含む)
22. 20に近いが褐色土ブロックが多い。炭も含む。
23. 10YR2/1黒褐色粘質土
24. 堰め土、ゴミ等
25. 10YR4/1褐灰色砂質土(少礫含む)
26. 10YR4/2灰黄褐色シルト
27. 10YR3/2黒褐色土
28. 10YR1.7/1黒色粘土(SG380の覆土と思われる。遺物を多く含む)
29. 5Y3/1オリーブ黒色粘土(SG380覆土)
30. 10YR5/6黄褐色粘質シルト
31. 10YR3/2黒褐色シルト(少礫を含む)
32. 10YR4/2灰黄褐色シルト
33. 10YR3/4暗褐色砂質土
34. 10YR3/3暗褐色シルト(少礫。有機物等を含む堪作土)
35. 10YR2/1黒色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色シルトのブロックが混じる堰め土
36. 10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色のシルトのブロック混合堰め土
37. 10YR4/3にぶい黄褐色シルトを中心とした混じり土。堰め土
38. 10YR5/6黄褐色シルトと10YR3/2の黒褐色シルトのブロック混合。堰め土
39. 10YR3/3暗褐色シルト
40. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(白色微砂混入)
41. 10YR2/2黒褐色シルト
42. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(他のブロック混合)
43. 10YR2/2黒褐色シルト(炭、微砂を含む)
44. 10YR4/3にぶい黄褐色土(礫を多量に含む。堰め土もしくは整地した跡か。SD271覆土)
45. 10YR3/3暗褐色シルト(しまっている。遺物を含む)
46. 10YR4/1褐灰色シルト(地山のブロック、炭をややさむ)
47. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(礫、炭をやや含む)
48. 10YR3/4暗褐色シルトおよび地山土等の混ざり土
49. 10YR3/4暗褐色シルト(炭、地山土をやや混じる)
50. 10YR4/3にぶい黄褐色土(地山土の混じりが多い)
51. 10YR4/4褐色シルト(黒土、地山土、白色微砂などが多く混じる。堪作土か)
52. 50に似ているが7.5YR4/6褐色シルトや51を所々に含む。
53. 10YR3/3暗褐色粘質シルト
54. 10YR2/3黒褐色砂質シルト
55. 10YR2/3暗褐色シルト(炭がやや混じる)
56. 10YR2/3黒褐色シルト(炭を多く含む)
57. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
58. 10YR2/3暗褐色シルト(炭がやや混じる)
59. 10YR3/3暗褐色シルト(58よりも炭が多く混じる)
60. 10YR3/2黒褐色シルト(ブロックを含む堰め土)
61. 10YR2/2黒褐色砂質シルト(焼土、炭、遺物を多量に含む)
62. 10YR3/4暗褐色シルト
63. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(炭、少礫をやや含む)
64. 10YR3/2暗褐色シルト
65. 10YR2/2黒褐色粘質シルト(地山土がブロックで混じる)
66. 10YR4/2灰黄褐色シルト
67. 10YR7/1黒褐色粘質シルト(しまっている)

基本層序断面図 1:80 2m

第3図　1区遺構配置図・基本層序断面図



第4図　2区・3区　遺構配置図・基本層序断面図

Ⅲ　第1次調査

1　検出された遺構

1）遺構の分布

今回の調査は県道の改良工事に伴うものであったので、調査区はほぼ東西に幅約15m、長さ約200mの細長い形になっている。調査面積は2,700㎡となる。調査区は市道と水路によって区切られているので、便宜上東端から市道までを1区、市道から水路までを2区、水路から西端までを3区とした。登録した遺構数は下記の通りである。

	1区	2区	3区	計
SP	185	89	391	665
SD	51	11	24	86
SX	31	1	24	56
SK	24	2	25	51
SG	1			1
SF	2			2
SA		1		1
	294	104	464	862

1区は宮崎館の本丸と推定されている部分で、館に伴う遺構の検出が期待された。東端に近いところからSD205溝跡と、隣接してSF206土塁基底部が調査区を南北に横切っている。SD205は館の堀と考えられる。この溝の覆土上層に焼け跡を片づけたような炭、陶磁器片を多く含む層が存在している。これに対応する西側堀(SD107)は現在の市道下にあたるものとみられ、土塁と考えられる盛り土(SF208)が検出されている。この間の部分に南北に流れる溝跡が幾つか検出されている。中にはSD294のような幅が2mになるような遺構も含まれる。また西側に短い溝跡の連なりが、溝同様南北に続いており、地業跡かと思われる。また軟弱な地盤を固めるための盛り土跡なども見受けられる。これらの遺構は現在の区画にあった方向に向いている。

これらの遺構の検出面の下に、北東から南西に向かってほぼまっすぐSG380河川跡が検出された。2区の溝跡SD80などと同方向であり、この地域の自然な流路と考えられる。現在の区画には合致しない。遺物が多数出土している。

2区はもっとも遺構検出数の少ない調査区で、葡萄棚の基礎による撹乱も多い。現在の区画に合致する溝3条(SD4・102・106)と、SG380と同方向を向き現在も伏流水の残るSD80が検出された。中央部には畝跡と考えられる溝跡群が見つかっている。時期は不明であるが、区画に合致した方角である。

3区はもっとも遺構数の多い調査区で全検出数の半数を越える。時期的に、現在の区画に合致しない9世紀後半の土器が供伴する遺構と、区画に合致する近世以降の遺構に大別できる。また西端部包含層より塩釜式併行と考えられる土師器が出土しており、この時代に属する遺構の存在する可能性もある。掘立柱建物跡は2棟(SB1・2)検出されている。竪穴住居跡は可能性を指摘できる遺構(SK781)は存在するがはっきりしない。SD382は近世陶磁器が多く出土

しているが、その最深部に杭列が検出された。ＳＤ205同様焼け跡を片づけたと思われる土壙ＳＫ793、樽を埋めていた跡のＳＫ201等の近世遺構も存在している。

2）１区の遺構

ＳＤ205溝跡・ＳＦ206土塁跡・ＳＤ207溝跡

ＳＤ205は１区東端、42～43-Ｂ～Ｄグリッド付近に南北に通る溝跡。検出面における幅は400～500cm、最深部の深さは約200cmを測る。南側に行くにつれて深くなっており、北から南に流れていた溝である。17層壁面付近からヒメビシの果実他の植物遺体が数多く出土しており、この部分が池沼的環境、すなわちある程度の水深のある環境だったと考えられる。この場所は山形県中世城館址調査報告書においては堀のあった場所とされており、水堀があったと推定できる。

溝底に近い31、32層より出土した陶器片は在地の胎土の可能性が高いと分析されているが、３区より出土している須恵器と比べてみると焼きの様相などにかなり違いを感じる。珠洲焼あるいは在地の珠洲系統須恵器系中世陶器とも考えられる。これらの点よりこの堀の築造年代は15世紀～16世紀程度と推測される。

また土層観察によればこの堀は東側から何層かに分けて埋め土が入れられており(20・22・25等)、その後に西側すなわち館跡内部からかなりの量の埋め土が入っている。(19・21)この土はＳＦ206土塁を形成していた土である可能性が高い。これらは明らかに人工的な埋め立ての跡であり、この地が館としての機能を失ったことを物語っている。１国１城令に基づく破却の際か、その後この地が耕作地となった際か定かではない。

しかし埋め立て後も小規模な溝が残っていたと考えられる。そして江戸末もしくは明治期の大火の焼け跡を始末したものをここに埋め込んでいる。(18)そのような残骸をそう長距離運ぶとは考えられないので、火事の時期、このあたりに何らかの建物等があり、そこで陶磁器が生活に使われていたのではないかと推定できる。しかし面的に残っていなければならない焼土面が見られず、その後の耕地整理で削平されてしまったとも考えられる。ＳＦ206基底部付近には不完全な版築と思えるような断面が観察された。ＳＦ206基底部は東側がＳＤ205西側がＳＤ207で区切られる範囲と考えられる。

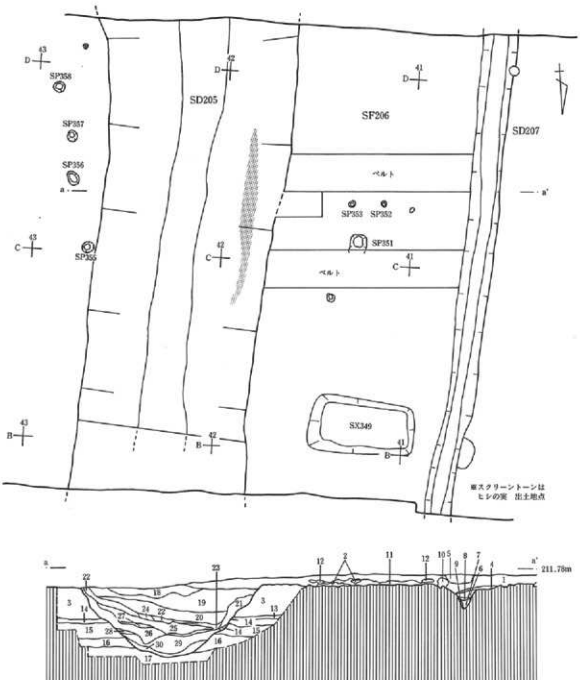
ＳＦ208土塁跡・ＳＤ109溝跡

ＳＦ206に対応する西側の土塁と推定されるのがＳＦ208である。断面検出位置における基底部は幅約550cm南北にのびているが北側は住宅建築などにより撹乱され、盛り土断面は残っていない。また北側は酸化鉄を多く含む砂質地層が広がっている。この土塁基底部の範囲は東側がＳＤ109、西側はＳＤ205に対応する堀があったと推定されるが、主体は市道下にあるものと思われ、近年側溝改修も行われたため検出には至っていない。しかし断面の側溝近くから急激に地質が変わり泥炭的になる一線があり、ここが堀の始まりではないかとも考えられる。

(ＳＤ107)

ＳＡ１柱穴列

１区中央部34～36-Ｄグリッドにほぼ東西に伸びる柱穴列である。ＥＰ274他10基の柱穴によっ



SD205　SF206　SD207

1．10YR2/3暗褐色シルト（耕作土）
2．10YR2/3黒褐色シルト（やや炭がある）
3．10YR5/8黄褐色粘質シルト
4．10YR3/3暗褐色シルト（５が混じる）
5．10YR3/4暗褐色シルト（SD207覆土）
6．10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルト（しまっている）
7．10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルト（５が混じり、粒は細かい）
8．10YR5/8黄褐色シルト
9．10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルト（７に近いが３が多く混じる）
10．10YR3/3暗褐色粘質シルト
11．黄褐色と暗褐色の土がブロックや層になって混じる（不完全な版築か）
12．10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルト（９より３の土が多い混じり土）
13．10YR6/2灰黄褐色粘質シルト（黒土なども混じる）
14．7.5YR6/8明褐色粘質シルト
15．10YR3/1黒褐色粘質土
16．10BG5/1青灰色粘質土（表面は黄色に変色、粘性が強い）
17．10G5/1緑灰色粘質シルト
18．10YR2/2黒褐色粘質シルト（極土、炭、遺物を多く含む
堆め立て後、残った溝か）
19．10YR5/3にぶい黄褐色シルト（黒土などもブロックで多量に含む人工的
埋土。西側から落とされたと思われ、SF206の一部とも考えられる）
20．10YR6/8明黄褐色シルト（ブロックが多量に混じった埋土。東側より）
21．10YR3/2黒褐色シルト（ブロックを含む埋土。西側より混じる
SF206の一部か）
22．10YR2/3黒褐色粘質シルト（ブロックあり、東からの埋土）
23．10YR4/1褐灰色砂質土
24．10YR4/1褐灰色シルト（混じり土）
25．10YR2/1黒褐色シルト（ブロックが多い。東からの埋土）
26．27に近いがよりブロックがはっきりしている。
27．10YR3/2黒褐色粘質シルト
28．10YR4/1褐灰色粘質土
29．10GY5/1緑灰色粘質土（溝の底の堆積物か）
30．5Y3/1オリーブ黒色粘質土（溝の最低部の沈殿か）

遺構平面図・断面図　0　1：100　5m

第５図　遺構実測図（１）

て構成され、中心から中心までの距離は約100cmである。調査区の南端にあるためさらに南側に続くのかどうかははっきりしない。中世の溝と考えられるSD294が切れた位置に存在しており、館内の区画であったかもしれない。

SA2柱穴列

1区東より40-B～Dにほぼ南北に伸びる柱穴列である。EP892他10基の柱穴によって構成され、中心から中心までの距離はおよそ120cm平均である。東西方向につながる柱穴がないので、区画する柱穴列と考えられる。この柱穴列から西側に地山を掘り込んで埋め土を入れたような撹乱層が10m弱続いている。

地業跡

SD109の東側にほぼ平行な向きに並ぶ3列の溝跡群。調査区を南北に横断する。SD109に近い方からSD145他5条の溝による一列、そこから東へ80～100cm間隔をあけて、SD137他4条の溝による1列、そこからさらに約480cmの間隔をあけてSD173他3条の溝による1列が続く。これらの溝は断面に検出された物も含めて同一の層から30～50cm程度掘り込まれ一気に埋め戻されている。柱穴と思われる部分はなく遺物もほとんど出土していない。SD109あるいはSF208と同一方向に続くことから、時期的にも同じ頃と考えられる。このあたりは地盤強化のためか盛り土跡と考えられる部分が多く、この遺構もたとえば馬小屋などの建築のための地業であったとも考えられる。この場合西端の列は軒の部分と考えられよう。

SD294溝跡

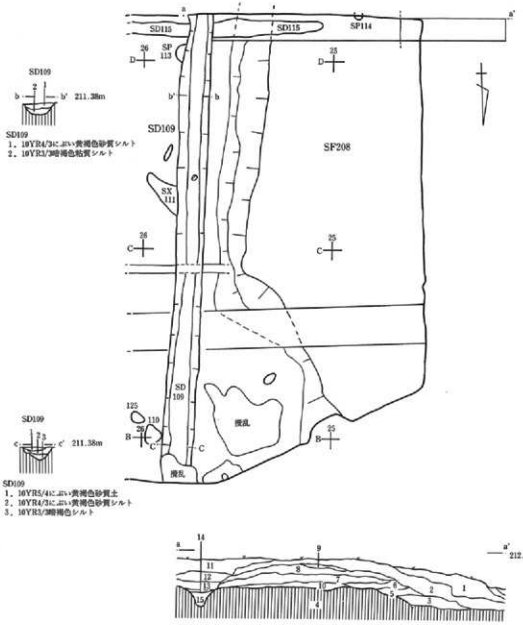
1区のほぼ中央部を南北にのび、南はSA1の直前で切れている溝跡。幅は約350cm、深さは検出面から30～40cmを測る。東側端に幅15～20cmの側溝のような溝が平行している部分がある。かわらけが1点(RP50・1600年前後か)、米沢の戸長里窯産と考えられる鉢(RP103)、擂り鉢(RP100・101)が出土している。戸長里窯は極めて限定された時期の窯とされており、この遺構の時期は、安土桃山時代の伊達、もしくは蒲生の支配時期に当たると考えられる。SA1とも同時期であろうと思われる。戸長里窯産の遺物の出土地としては現在のところ北限になろう。鉢については火を受けた痕跡がある。

SX242及び周辺

1区地業跡のさらに東側北よりに検出された遺構。形状が不定型で明瞭でないため、トレンチを入れて断面の状況を観察した。その結果深さは浅く面的に広がっており軟弱地面を強化するための盛り土と考えられる。その盛り土面に遺構が掘り込まれている。後述する河川跡の存在によりこの付近の地盤はけして頑強な物ではなかったと推定され、このような盛り土や地業が必要とされたのではあるまいか。SX242周辺の土壌にも地業跡の溝と思われる遺構が多く存在する。あるいはこれらを結んで建物跡が推定できるかもしれないが、それぞれの遺構の覆土状況などが一律でなく、今回はこのままとした。これらの遺構もこの地を館とした時期、あるいはそれ以降の物と推定される。

SK168土壙・SP169ピット

1区地業跡近くから検出された遺構。1区の須恵器等はその大部分が河川跡の出土であるが、



SF208　SD109
1．10YR7/4にぶい黄橙色土(柔らかい。埋め土。新しいゴミ入る)
2．10YR3/2黒褐色土(一部ビニールなど入る。埋め土)
3．10Y　3/2オリーブ黒色砂質シルト(酸化すると黄色化するSD207覆土)
4．10YR5/3黄褐色砂質シルト(鉄分が多いと思われるこの付近の地山)
5．10YR4/3にぶい黄褐色シルト
6．10YR4/4褐色シルト(5よりしまっている。有機物(植物か)を多く含む。)
7．10YR2/1黒褐色土(有機物を含む)
8．10YR2/3黒褐色土(有機物を含む。褐色土のブロックをやや含む)
9．10YR2/2黒褐色シルト
10．10YR3/1黒褐色砂質シルト(柔らかい)
11．10YR4/6褐色土(塊々なブロックを含む埋め土)
12．10YR4/3にぶい黄褐色土(有機物、少礫をやや含む)
13．10YR4/3にぶい黄褐色土(12よりややさらさらしている)
14．10YR3/3暗褐色粘質シルト(柔らかい。SD109覆土)
15．14に近い(やや4のブロックを含む。SD109覆土)

遺構平面図・断面図　0　1：100　5m

第６図　遺構実測図(２)

それとは別に須恵器の坏がＳＫ168から出土している。ＳＫ168は長径110cm、短径90cm、深さ35cmを測る。ＳＰ169はＳＫ168に重複しており径60cm、深さ35cmを測る。

ＳＫ176・ＳＫ177土壙

1区29-Ｃグリッド付近に検出された土壙。ＳＫ176は長径150cm、短径130cm、深さ15cmを測る。ＳＫ177は長径170cm、短径160cm、深さ20cmを測る。ＳＫ177からは高台のついた土師器の坏が出土している。

ＳＫ168・177の遺物は時期的に平安時代9世紀後半のほぼ同時期と考えられ、後述するＳＧ380の遺物とも重複する部分が多い。このことから河川跡ＧＳ380に土器を投棄した人々の集落は、河川に対して北西よりに広がっていたものと推定できる。

ＳＧ380河川跡

1区のほぼ中央部を北東から南西に下る形で検出された河川跡。検出面における川幅は約15m程である。深さは150cm以上あったと考えられる。遺物が多く出土しており、9世紀後半を主体とした須恵器、土師器と、摩耗が激しい土師器片がある。ただし、34-Ｄグリッド付近の包含層から古墳時代4～5世紀に属すると考えられる土師器の大壷(ＲＰ1)が出土した。供伴する遺構が検出されず河川跡に係る遺物と考えられる。一方主体をなす平安時代の須恵器、土師器は4本のトレンチ全てから出土した。最下層の黒色粘土質には含まれておらず、その上の黒褐色粘質土内に多量に含まれていた。これらのことからこの河川が強く流れていた頃ではなく、次第に泥がよどみ始め流れが緩やかになってきた頃に近接した集落の人々がこの河川に土器を投棄した物と考えられる。また古墳時代の遺物は3区からも出土しており、遺構としての確認はできていないが、この近くに古墳時代の集落が存在した可能性をうかがわせるものである。

3）2区の遺構

ＳＤ102・106溝跡

2区の最も東端に現在の区画とほぼ平行に検出された溝跡。幅約50cm深さ約30cmを測る。当初市道下の堰跡の一部と思われたが精査の結果別の溝と判明した。ＳＤ106の壁面に近い位置に平行に細い杭を打った跡が無数に検出された。遺物は出土していない。

ＳＤ80溝跡

2区のほぼ中間部を北東から南西に下る溝跡。幅約100cm深さ10～25cmを測る。ＳＧ380と同様現区画と関係なくこの土地の自然な流れの向きにできている。土師器の甕が出土している。

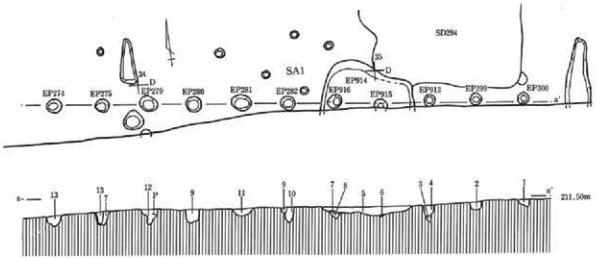
ＳＫ101土壙

2区北東端付近に検出された土壙。2区遺構内唯一現区画と一致しない溝跡ＳＤ80に平行する。遺物は出土していない。

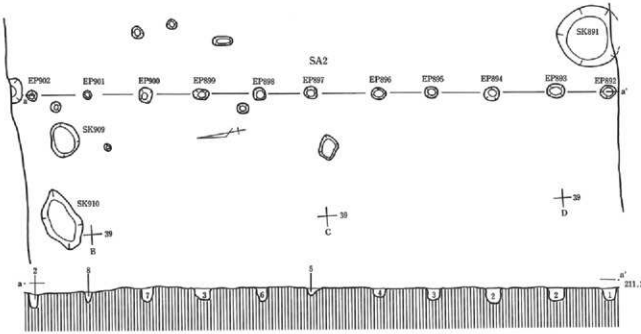
ＳＤ4溝跡

2区西端を現区画すなわち2、3区の間を隔てる水路に平行にはしる溝跡。検出面での幅約80cm、深さ約40cmを測る。近世陶器が出土しており、擂り鉢などは17世紀末～18世紀と考えられる。

以上の点から2区の遺構はＳＤ80・ＳＫ101等のグループとＳＤ106・4等のグループの少なく



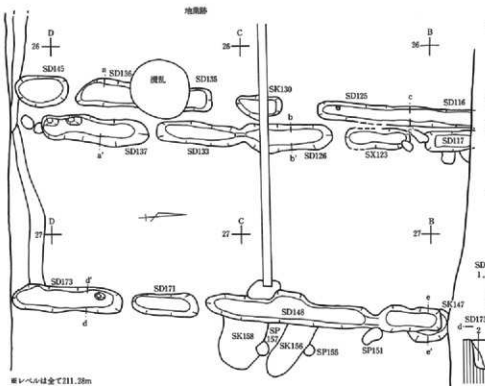
SA1
1．10YR3/2黒褐色粘質シルト(炭をやや含む)
2．10YR3/1黒褐色シルト
3．10YR3/2黒褐色シルト
4．10YR4/2灰黄褐色シルト
5．10YR3/3暗褐色土(炭をやや含む。)
6．10YR5/4によい黄褐色シルト
7．10YR6/4によい黄橙色シルト
8．10YR3/2黒褐色土
9．10YR3/3暗褐色土
10．10に地山土が混じる。
11．10YR2/2黒褐色土(地山土が混じる。)
12．10YR3/4暗褐色砂質シルト
13．10YR3/2黒褐色土(有機物を含む)



SA2
1．10YR4/4褐色粘質シルト10YR4/1褐灰色シルトが混じる。
2．10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
3．10YR4/3によい黄褐色粘質シルト
4．10YR7/3によい黄橙色粘質シルト
5．10YR5/1褐灰色粘質シルト
6．10YR5/2灰黄褐色粘質シルト
7．10YR7/3によい黄橙色粘質シルト(炭が混じる)
8．10YR4/1褐灰色粘質シルト

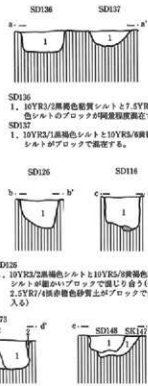
遺構平面図・実測図　0　1：80　2m

第７図　遺構実測図(３)



SD116
1．10YR3/2黒褐色シルトに地山土のブロックが混じる埋土

SD173
1．10YR3/2黒褐色シルト(7.5YR5/8明褐色シルトがブロックで混じる)
2．10YR5/2灰黄褐色砂質土

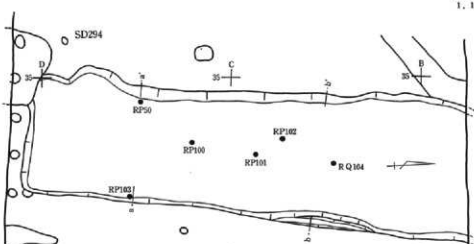


SD126
1．10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR5/8明褐色シルトのブロックが同量程度混在する埋土
SD137
1．10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色砂質シルトがブロックで混在する。

SD125
1．10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色粘質シルトが細かいブロックで混じり合う(少量2.5YR7/4浅赤橙色砂質土がブロックで少量入る)

SD148
1．10YR3/1黒褐色シルトと7.5YR5/6明褐色砂質土(地山)がブロックで混じる。

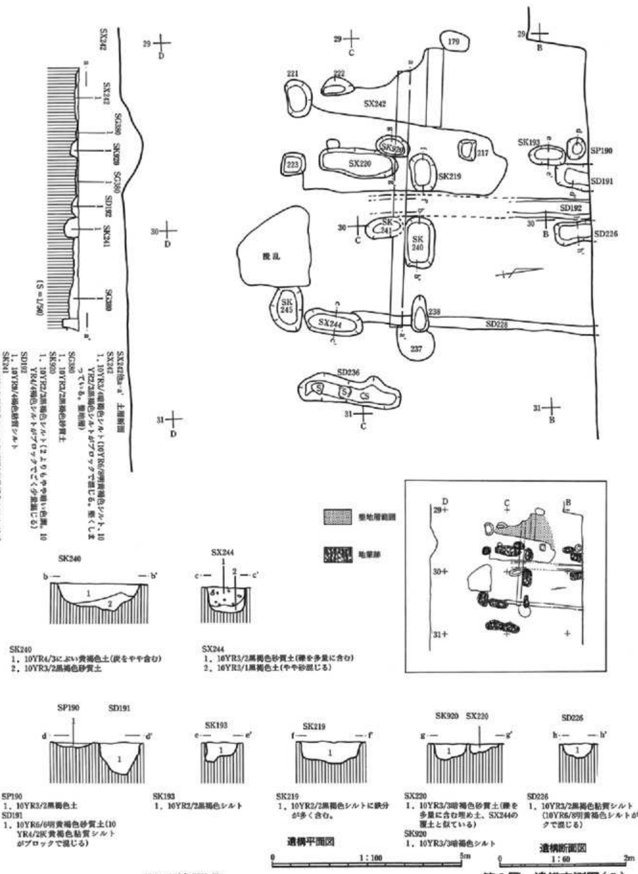
SK147
1．10YR2/2黒褐色シルト



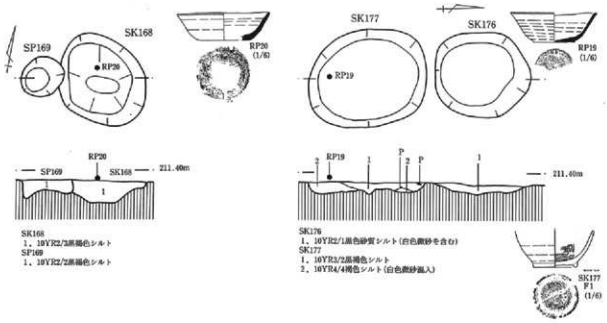
SD294
1．10YR3/3暗褐色砂質シルト(堅くしまっている)
2．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(炭、礫、焼土を含む)
3．10YR3/3暗褐色砂質シルト
4．10YR4/3(5C黄褐色砂質シルト(炭、礫を多量に含む。7.5YR5/8明褐色シルトを少し含む)
5．10YR2/3黒褐色土
6．10YR5/2灰黄褐色砂質土
7．10YR3/2黒褐色土(有機物を含む)
8．10YR7/6明黄褐色粘質シルト

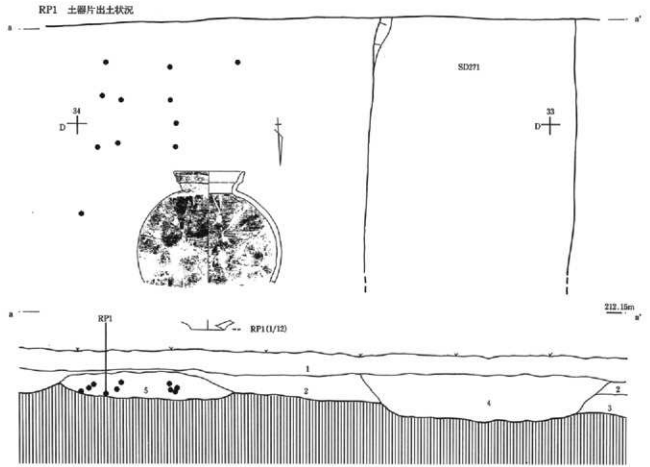
遺構平面図 0 1：100 5m
遺構断面図 0 1：60 2m

第８図　遺構実測図(４)


SX242他a-a' 土層断面
SX242
1．10YR3/4暗褐色シルト(10YR6/8明黄褐色シルト、10YR2/3黒褐色シルトがブロックで混じる。堅くしまっている。整地層)
SG380
1．10YR3/2黒褐色砂質土
SK920
1．10YR2/3黒褐色シルト(2よりもやや明るい色調。10YR4/4褐色シルトがブロックでごく少量混じる)
SD192
1．10YR3/4暗褐色粘質シルト
SK241
1．10YR3/2黒褐色シルト(10YR5/6黄褐色シルトがブロックで多く混じる。炭粒微少)
(S＝1/50)
整地層範囲
地業跡
SK240
1．10YR4/3にぶい黄褐色土(炭をやや含む)
2．10YR3/2黒褐色砂質土
SX244
1．10YR3/2黒褐色砂質土(礫を多量に含む)
2．10YR3/1黒褐色土(やや砂混じる)
SP190
1．10YR3/2黒褐色土
SD191
1．10YR6/6明黄褐色砂質土(10YR4/2灰黄褐色粘質シルトがブロックで混じる)
SK193
1．10YR2/2黒褐色シルト
SK219
1．10YR2/2黒褐色シルトに鉄分が多く含む。
SX220
1．10YR3/3暗褐色砂質土(礫を多量に含む埋め土、SX244の覆土と似ている)
SK920
1．10YR3/3暗褐色シルト
SD226
1．10YR3/2黒褐色粘質シルト(10YR6/8明黄褐色シルトがブロックで混じる)
遺構平面図
1：100
遺構断面図
1：60
※レベルは全て211.38m

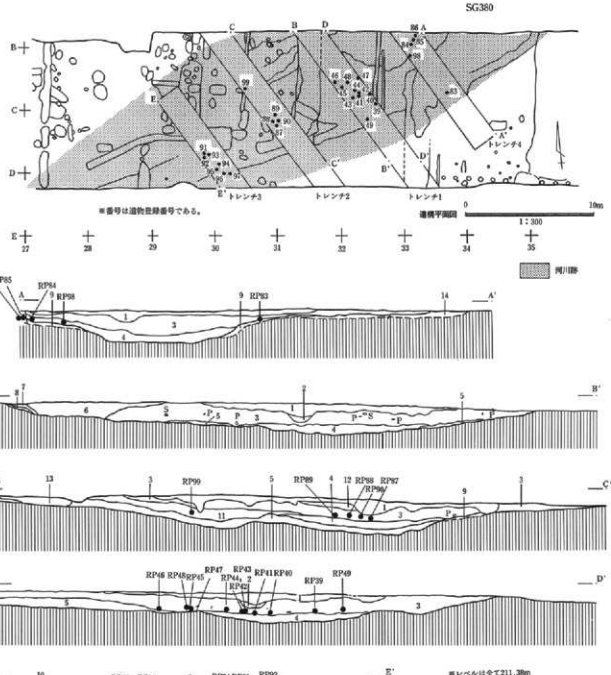
第９図　遺構実測図（５）





遺構平面図・断面図　0　1:40　1m

第10図　遺構実測図(6)



SG380
1，10YR3/2黒褐色砂質土
2，10YR3/3暗褐色粘質シルト
3，10YR2/2黒褐色粘質土(遺物を多量に含む包含層)
4，10YR2/1黒色粘質土
5，7.5YR5/8明褐色粘質土(7.5YR4/1褐灰色粘質土が混じる)
6，10YR3/4暗褐色砂質土(SX257の覆土)
7，10YR2/2黒褐色土
8，10YR6/3にぶい黄橙色粘質シルト
9，5YR5/8明赤褐色粘質シルト(地山)
10，10YR3/3暗褐色砂質土(礫を多く含む)
11，10YR2/1黒色粘質土(4に近いが暗色の混じり土が多い)
12，10YR2/1黒褐色土
13，10YR3/2黒褐色土(炭、やや混じる)
14，10YR8/8黄橙色粘質シルト(地山)

第11図　遺構実測図(７)

とも2時期以上に区分できる。

4） 3区の遺構

3区の遺構についてもその向きの在りようから、現区画とあっているSD382・SK793等のグループと、それ以外の大多数の遺構のグループ、すなわち磁北より心持ち西よりに軸線を持つ一群に分けられる。遺物もまた大きく異なって出土している。

SB1掘立柱建物跡

3区11-Cグリッドより検出された。長軸方向はN-13°-W、規模は桁行3間×梁行2間を測る。柱間は約6尺でほぼ等間隔である。柱穴堀方からの遺物出土はなかった。

SB2掘立柱建物跡

3区9-Dグリッドより検出された。長軸方向はほぼ磁北を向く。規模は桁行2間×梁行2間を測る。柱間は約4尺でほぼ等間隔である。柱穴堀方からの遺物出土はなかった。

SK484土壙

3区11-Dグリッドより検出された。SB1のそばになる。長径150cm×短径120cm、深さ20cmを測る。墨書の入った坏、土師器の甕などが出土している。

SK575土壙

3区9-Cグリッドより検出された。SB2のそばになる。長径200cm×短径140cm、深さ30cmを測る。土師器の甕、須恵器片などが出土している。

SK520土壙

3区10-Cグリッドより検出された。SB1のそばになる。ほぼ円形で経60cm、深さ50cmを測る。高台がついて内外面ともに黒色加工された、土師器の坏が出土している。

SK779土壙

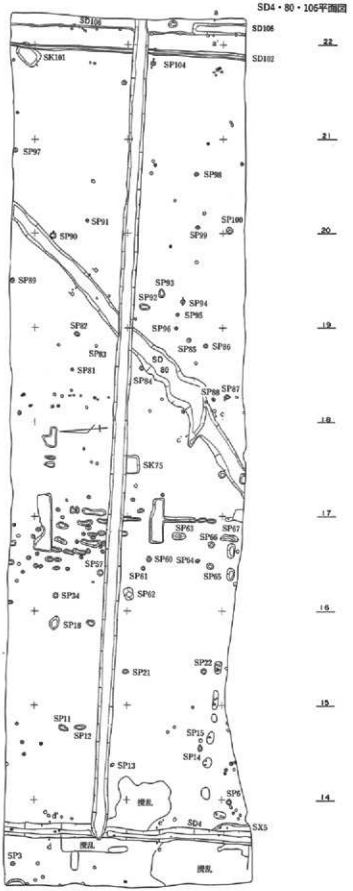
3区5-Dグリッドより検出された。不正方形の平面形であり、長径240cm×短径230cm、深さ12cmを測る。豚舎の至近で攪乱が重複している。内面黒色土師器の坏等が出土している。

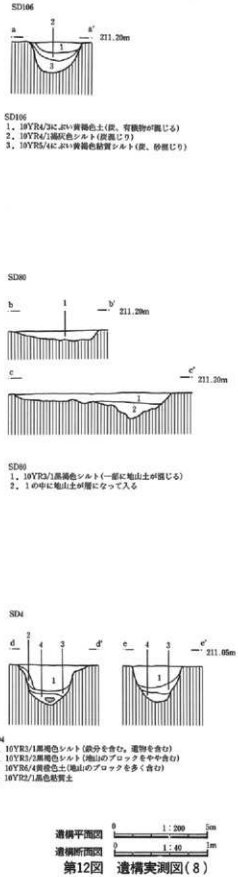
SK781土壙

3区5-Dグリッドより検出された。長方形の平面形であり、長径290cm×短径170cm、深さ30cmを測る。中央部に一段深い部分があり、その部分は64cmの深さとなる。須恵器片が出土している。竪穴住居である可能性も考えられるが、柱穴が未検出で規模も小さいなど、問題がある。

SD382溝跡

3区東端部に水路と平行に検出された溝跡。SD4とも平行である。検出面での幅は120～160cm、いったん落ち込んでから部分的に段が付き再度落ち込んでいる。深さは約45cm程である。最深部に沿うように1列に打ち込まれた杭列が検出された。サンプリングした材はカシノキと二葉松であったが、それらの材を先端のみ削って、溝底にさらに溝を切り打ち込んでいる。溝の少なくとも上層はかなり後まで水が流れていたと思われ、近世陶磁器が数多くこの溝の上層～中層から出土した。瀬戸あるいは在地(平清水など)窯と考えられ、18世紀後半～19世紀の物と考えられる。この杭列そのものの建設時期は、杭列周辺層に遺物が出土せず不明である。その役割も区画を示すためと考えられるが、3区部分を囲む区画なのかあるいは1区部分の館跡の


SD4・80・105平面図
SD106
SD102
SD105
SK101
SP104
SP97
SP98
SP91
SP100
SP90
SP99
SP89
SP93
SP92
SP94
SP95
SP82
SP96
SP85
SP86
SP83
SD 80
SP81
SP84
SP88
SP87
SK75
SP63
SP67
SP66
SP60
SP64
SP61
SP65
SP34
SP62
SP18
SP21
SP22
SP11
SP12
SP15
SP14
SP13
SP5
撹乱
SD4
SX5
SD3
撹乱
撹乱
22
21
20
19
18
17
16
15
14

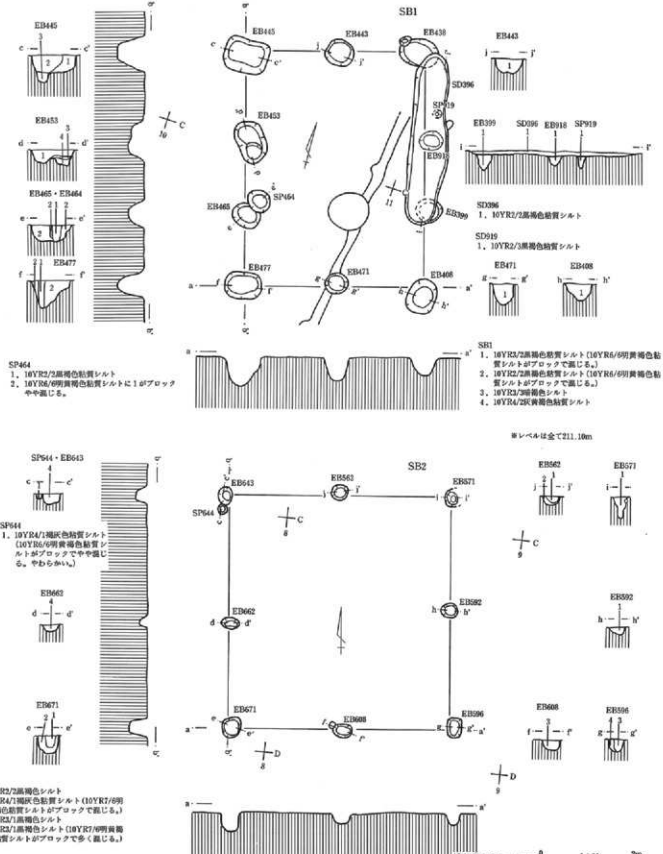

SD106
a
a'
2
1
3
211.20m
SD105
1．10YR4/3にぶい黄褐色土(炭、骨鎮物が混じる)
2．10YR4/1褐灰色シルト(炭混じり)
3．10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト(炭、砂混じり)
SD80
b
b'
1
211.20m
c
c'
211.20m
1
2
SD80
1．10YR3/1黒褐色シルト(一部に地山土が混じる)
2．1の中に地山土が層になって入る
SD4
d
d'
e
e'
2
4
3
211.05m
1
SD4
1．10YR2/1黒褐色シルト(鉄分を含む。遺物を含む)
2．10YR3/2黒褐色シルト(地山のブロックをやや含む)
3．10YR6/4黄橙色土(地山のブロックを多く含む)
4．10YR2/1黒色粘質土
遺構平面図
遺構断面図
0
1：200
5m
1：40
1m

第12図　遺構実測図(８)

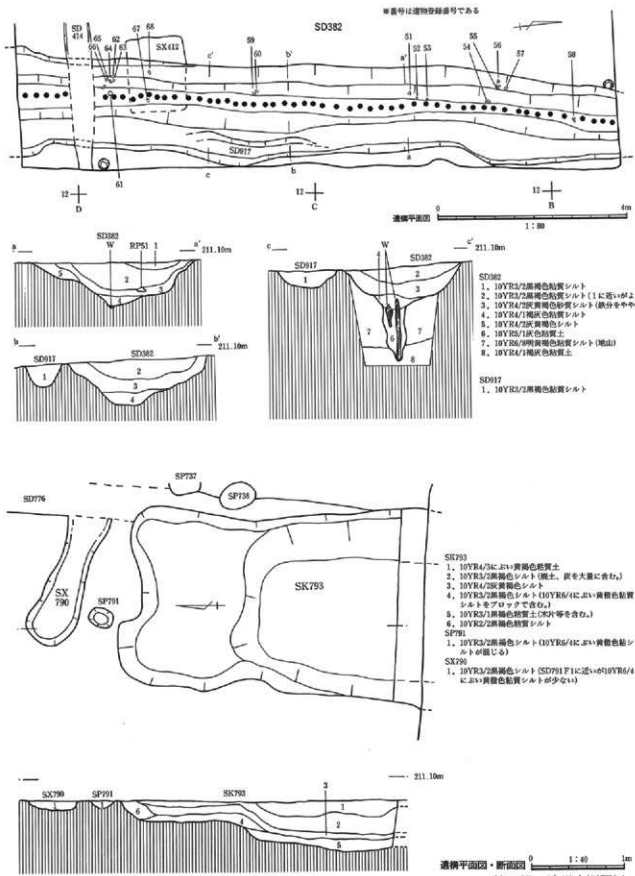
防御線の一部を成していたものなのか判定するに至らない。少なくとも江戸時代に整堀と思われる溝が存在していたことは上杉家所蔵の絵図にも載っている。

SK793土壙

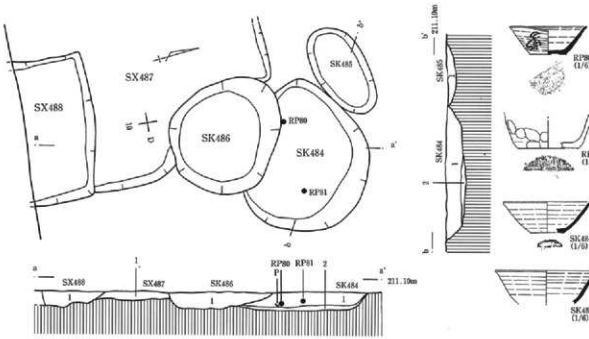
3区西よりの南はずれより検出された土壙。面整理の段階より地面がふかふかしており、水分を多く含む遺構であった。検出部分の東西約200cm、南北約280cm、深さ55cmを測る。下層5層に木片などが含まれ、水のたまった窪地であったことがうかがえる。上層2層に焼土、炭化物が大量に含まれ、陶磁器片も数多く出土した。植木鉢片等は明らかに外面が火を受けている。時期は近世より近代と思える遺物が多く、明治期の宮崎大火の残骸を埋め立てたのではないかと考えられる。


SB1
EB445
EB443
EB438
SD396
SP919
EB453
EB911
SP464
EB468
EB399
EB477
EB471
EB408
SD396
1．10YR2/2黒褐色粘質シルト
SD919
1．10YR2/3黒褐色粘質シルト
SP464
1．10YR2/2黒褐色粘質シルト
2．10YR6/6明黄褐色粘質シルトに1がブロック
やや混じる。
SB1
1．10YR2/2黒褐色粘質シルト(10YR6/6明黄褐色粘
質シルトがブロックで混じる。)
2．10YR2/2黒褐色粘質シルト(10YR6/6明黄褐色粘
質シルトがブロックで混じる。)
3．10YR3/3暗褐色シルト
4．10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
※レベルは全て211.10m
SB2
EB643
EB562
EB571
SP644
EB662
ED062
EB592
EB671
EB608
EB596
SP644・EB643
SP644
1．10YR4/1褐灰色粘質シルト
(10YR6/6明黄褐色粘質シ
ルトがブロックでやや混じ
る。やわらかい。)
EB662
EB671
B2
1．10YR2/2黒褐色シルト
2．10YR4/1褐灰色粘質シルト(10YR7/6明
黄褐色粘質シルトがブロックで混じる。)
1．10YR3/1黒褐色シルト
1．10YR2/2黒褐色シルト(10YR7/6明黄褐
色粘質シルトがブロックで歩く混じる。)
遺構平面図・断面図
1:80
2m

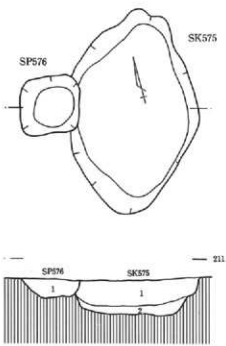
第13図　遺構実測図(９)



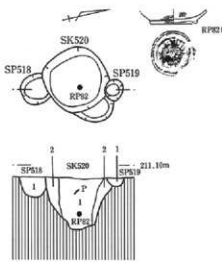
第14図　遺構実測図(10)



SK484
1．10YR3/1黒褐色シルト
2．10YR6/4にぶい黄橙色土のブロックが１に混じる
SK485
1．SK485F1に似ているが柔らかく、炭をやや含む。
SK486
1．10YR2/2黒褐色シルトに地山ブロックが多く含まれる埋土
SK487
1．1に似ているが柔らかく地山土を含む
SK488
1．10YR3/2黒褐色シルト



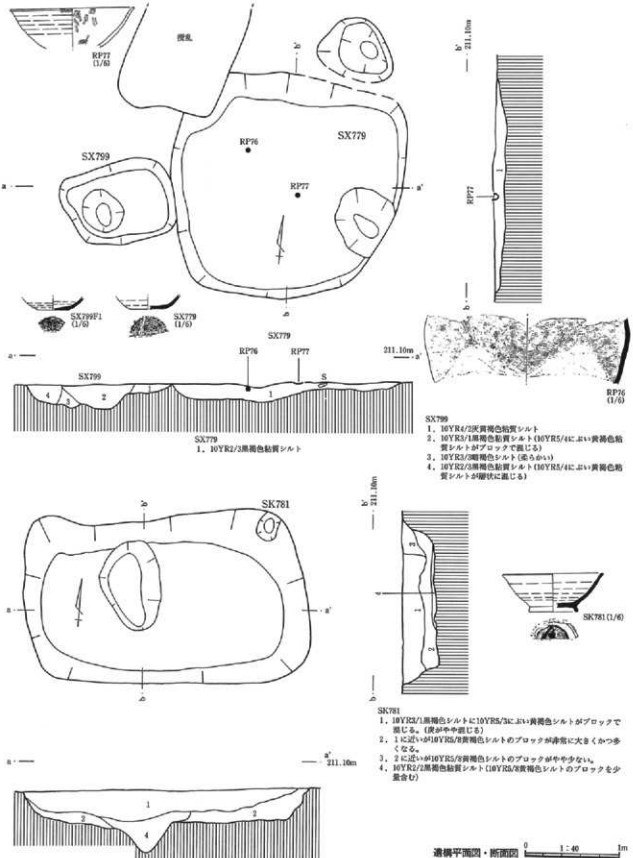
SK575
1．10YR2/2黒褐色シルト(遺物が入る)
2．10YR2/2黒褐色シルト(10YR4/4褐色粘質シルトがブロックで混じる。
SK576
1．10YR3/2黒褐色シルト(10YR6/8明黄褐色シルトをやや含む)



SP518
1．10YR3/1黒褐色シルト
SP519
1．SP518F1に近く中中柔らかい。
SK520
1．10YR3/2黒褐色土に10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックをやや含む。
2．1より、10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックが多い。

遺構平面図・断面図　0　1:40　1m

第15図　遺構実測図(11)



遺構平面図・断面図 0 1:40 1m

第16図　遺構実測図(12)

2　出土した遺物

1）縄文時代

縄文時代の遺物としては石器が11点出土している。調査区内全体から少量の出土であり、遺構からの出土も流れ込みと判断される。器種は石鏃・尖頭器・局部磨製石斧・石匙・石篦・石錐・削器・磨石がある。17-1は石鏃で先端が僅かに欠損している。17-2は大型の木の葉状を呈すると考えられる尖頭器で基部が欠損している。17-3は局部磨製石斧の刃部で、基部は欠損している。これら3点は器形及び調整技法などから縄文時代草創期の可能性を持つものであるが、遺構からの出土ではなく、また土器を伴っていないため時期を確定することは困難である。17-4は石鏃、17-5は器種不明、17-6は削器、17-7は石錐、17-8は石匙、17-9・10は石篦である。時期は前述した3点よりやや降る時期、あえて言えば縄文時代前期の可能性を持つが土器を伴っていないため時期の確定は困難である。17-11は磨石と考えられるものである。

土器については、縄文土器と考え得る遺物も極少量存在するが、いずれもが細片でありまた磨滅が著しく時期を特定することができなかった。

2）古墳時代

古墳時代の遺物は1区ＳＧ380を中心に極少量であるが出土している。出土遺物は土師器壷・甕・須恵器樽型瓶破片などである。以下個別に概要を述べる。

18-1(RP1)は土師器大壷である。ＳＧ380東岸、34-Dグリッドで出土した。遺構からではなく包含層からの出土である。口径218㎜、胴径450㎜、底径115㎜を測る。胎土は緻密で、焼成も堅緻である。口縁部から体部中央までと底部のみ復元することが出来た。器高を推定すればおよそ480㎜程と考えられる。二重口縁を持ち、体部は球形になると考えられる。体部外面は丁寧なヘラミガキが施され、内面はハケナデである。辻秀人氏の土器編年(1995)によれば、二重口縁や体部形状及び表面調整の特徴などにより、Ⅱ-2期に当てられ、塩釜式では第2期とすることができる。18-2は土師器甕の口縁部である。口縁部は短く外反する。内外面とも赤彩の痕跡を残す。18-3は土師器壷口縁部である。直立するが、中央に稜を持ち最大径となる。18-4は土師器壷口縁部である。折り返しによる二重口縁となるが、18-1に比してやや粗雑であり、後続するものと考えられる。18-2～4はいずれもＳＧ380からの出土である。

18-5は須恵器樽型瓶の閉塞部(体部側面)と考えられる。径は116㎜と推定される。閉塞部のみの出土であり、全形は知り得ない。胎土には粗砂が混入するが、焼成は堅緻である。外面はやや くぼみ、外周端部を突帯状につまみ出す。さらに幅約2㎜、長さ約5㎜程を一単位とする長方形の刻印が螺旋或いは多重円形に巡ると推測される。京都造形芸術大学田辺昭三教授によれば、大阪陶邑窯跡でも古い時期に当たり、ＴＫ216(ＯＮ46)に並行するとのことであった。山形県内での樽型瓶出土の報告例は現在のところ無く、初出の可能性がある。

3）平安時代

平安時代の遺物としては、土師器・黒色土器・須恵器がある。主体となるのは須恵器で、坏・甕類が中心をなしている。赤焼土器と考えられるものは若干存在するが、その位置付けに対しては諸説があり、山形県内はもとより東北地方においても未だ確定していないのが現状である。

ここでは、赤焼土器については土師器の一類型として取り扱うことにする。以下、種別毎に概観する。

土師器・黒色土器

土師器は調査区内全域で出土し、器種は坏・甕類である。主体と成すのは煮沸・貯蔵形態の甕である。破片での出土にとどまり、全形を知りうる遺物はない。内外面ハケメ調整が施され、最大径を持つ口縁部にヨコナデがあるもの(22-6・7)がやや多い。一部にハケメ調整後体部下半に手持ちヘラケズリを施す一群(18-6・23-4～6・9)や体部中央付近に最大径を有す球胴型で、口縁部がやや外反しハケメ調整が施される一群(22-5・8)等がある。また、頸部に沈線状の段を有する一群(22-9～11)があり、やや古い様相と看取される。底部形態は木葉痕、網代痕等が見られ、回転糸切は見られない。坏は無高台(21-6)と高台付(25-7)に分かれるが、いずれもいわゆる赤焼土器の範疇に入るものであるが主体とはならない。

黒色土器には高台付坏があり、貼付高台(21-8・9)と削り出し高台(21-7)に分かれ、内面はヘラミガキされる。21-9は灰釉陶器模倣であり黒笹90号窯式に類似し、9世紀後半と考えられる。塊は少量見られ、22-2は非ロクロで底部に網代痕が残りやや古い時期と考えられる。21-10は両面黒色土器で内外面ともヘラミガキが施される。貼付高台で底部には菊花状の指圧痕を残す。

須恵器

出土遺物の中で主体を成し調査区内の全域で出土しているが、中でもＳＧ380からの出土が際だっている。坏類の底部切り離しは、回転糸切が回転ヘラ切りを凌駕する。器種は坏・高台付坏・蓋・塊・稜塊・高台付皿・甕・壷等がある。

底部回転ヘラ切りの坏には、口径に比して底径がやや大きく体部が緩やかに立ち上がり丸底風になり口縁端部がやや外反するもの(19-6)、大振りで体部が内弯気味に立ち上がるもの(19-7、24-3)、口径に比して底径がやや大きく体部が直線的に立ち上がり器形が逆台形状を呈するもの(19-8・9)、口径に比して底径がやや小さく体部が直線的に立ち上がり器高が高いもの(19-10)等がある。主体をなす底部回転糸切の坏には、口径に比して底径がやや大きく体部が緩やかに立ち上がりながら直線的に伸び器高がやや低いもの(19-11・12、16)、口径に比して底径がやや小さく体部と底部の境界が明瞭で体部がやや内弯気味に伸びるもの(19-18・19、20-1、24-8)、口径に比して底径がやや小さく体部と底部の境界が明瞭で体部が直線的に伸びるもの(24-11・12)、口径に比して底径が小さく体部が直線的に伸び器高が高いもの(20-27、24-7・10)等が見られ、いずれも口縁端部形状や法量等により細分化が可能である。

高台付坏には、小振りで口径に比して底径がやや大きく体部が直線的に伸び器高がやや低いもの(23-13)、大振りで口径に比して底径が小さく体部が直線的に伸び器高が高いもの(19-4・23-12)がある。また破片資料からは大振りで口径と底径の差が少ないもの等も見られる。一部に高台貼付時の調整により切り離し痕跡が不明なものも存在するが、ほとんどが回転糸切である。高台形状や貼付位置、口縁端部形状や法量等により細分化が可能である。

蓋は、いずれも破片での出土で全形を知りうるものはない。また、極少量の出土にとどまる。切り離しが回転糸切無調整で擬宝珠状の摘みを持ち、平坦な天井部から明瞭な変換部を経て直

線的に口縁部まで伸びるもの(23-10)、ドーム状を呈すると考えられるもの(23-11)がある。

埦は1点(24-14)図化した。底部は欠損しているが、大振りで口縁部がやや外反する。高台が付く可能性がある。

稜埦は1点(24-4)の出土である。口縁部は欠損しているが体部下半に変換部を確認することが出来、稜埦の一類型と判断された。稜がはっきりしないこと、底部切り離しが回転糸切で平底であること等から、やや新しい時期とすることが出来る。

高台付皿は1点(20-10)図化した。高台端部が欠損しているが、器高が低く口径に比して底部が大きく体部が直線的に外傾して伸び口縁端部が外反している。美濃窯虎渓山1号窯式段皿にプロフィールが似る。

甕は破片での出土のため全形を知りうるものはない。25-1・2は体部破片のみであるが大型品である。SG380で出土した21-1は口径232㎜を測る。頸部基部に「生」の字が筆描きされている。

壷は長頸壷と短頸壷に大別される。破片での出土のため全形を知りうるものは少ない。長頸壷には、長い頸部が直立の後やや外反するもの(20-13)、頸部基部に一条の隆帯を持つもの(24-16)等が見られる。体部外面下半に回転ヘラケズリ痕跡を明瞭に残すものがみられる。底部は無高台と高台付が存在し、高台付には回転糸切のものがあり、他の切り離し技法は不明である。短頸壷には、口径156㎜、底径98㎜、器高340㎜と推定されるもの(20-14)がある。ロクロ成形の後、外面は縦位のヘラケズリが、内面はハケメが施されている。

その他の須恵器では、双耳坏の摘み部分が2点出土している。

4）近世以降

25-8～9はSD4溝跡出土の擂鉢である。内外面に錆釉が施される。25-10は口縁部に鉄釉が施される。

26-1～3はSD205溝跡出土である。2は外面に煤が付着している。3は胎土が赤と白の縞胎となる。白濁した釉の下に、胎土の縞模様が確認できる。外面には鎬が入る。

26-4はSD207溝跡出土である。土師質の火鉢と考えられる。

26-5～8はSD294溝跡出土である。5・6は米沢市戸長里窯製品である。6は内外面に不透明な黄色釉が施される。漆接ぎの痕跡が認められる。7は石製の火鉢である。内面は被熱している。8はかわらけである。底部は厚く、体部下半で屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。底部は回転糸切である。

26-9～13、27-1～20、28-11・12、14～18はSD382溝跡出土である。26-9は小壷である。内面と底部外面は無釉となる。底部は回転糸切である。13は用途不明の陶製品である。鍔状に張り出した部分の上面と、上部の碗状の部分の外面に緑色釉が施される。他の部分は全面に透明釉が施される。下半部に4カ所穿孔が確認できる。向かい合う穴は同じ高さにあけられるが、隣りあう穴のあけられる高さは異なっている。27-1・2は擂鉢である。1は全面に錆釉が施され、口縁部に緑色釉が施される。3～7は法量、器形がほぼ同一の小坏である。灰釉が施される。底部外面は露胎である。高台は削り出し高台で、底部外面中央部が膨らむ。口縁部は内弯する。4

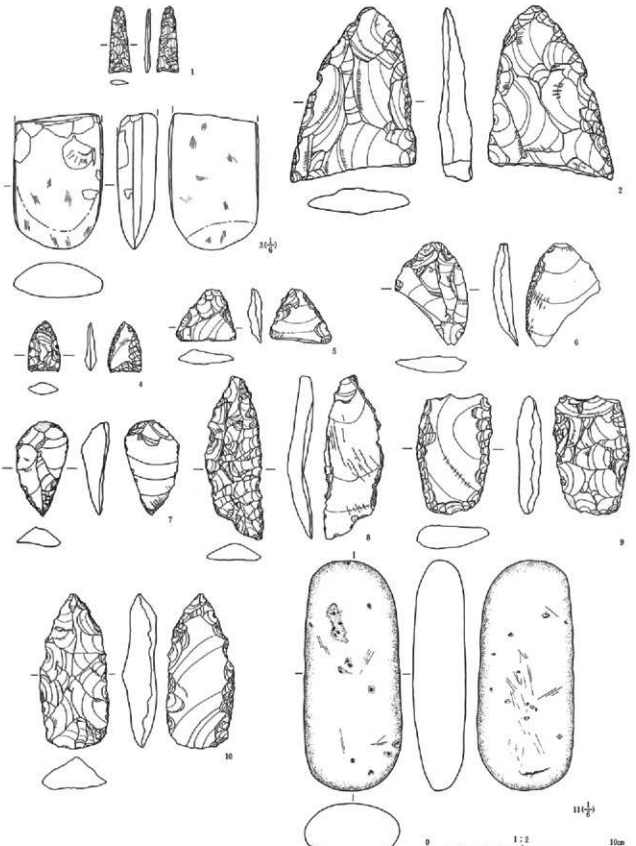
は底部外面が平らになり、口縁部は直線的に立ち上がる。釉調も他の4点と異なり、やや白みを帯びる。10・11は輪花皿である。口唇部に鉄釉が施される。11は被熱し釉が白濁する。15は淡緑色釉が施され、見込みは蛇の目釉剝ぎである。体部外面下半は露胎となる。16は合子蓋である。口縁部内面は露胎となり、煤状の付着物が認められる。17は上絵付けで色絵が施される。20は染付碗である。染付の色調は暗く、黒みを帯びる。21は芙蓉手の皿である。2次調査SD2296出土66-18と接合した。28-11・12は石硯である。11には漆接ぎの痕跡が認められる。28-14～18は杭である。

27-22・23、28-1～4はSD793溝跡出土である。23は鉢である。海鼠釉が施される。内面下半は露胎となる。被熱している。2は染付鉢である。大きく外反して立ち上がり、口縁部が屈曲する。口唇部に鉄釉が施される。

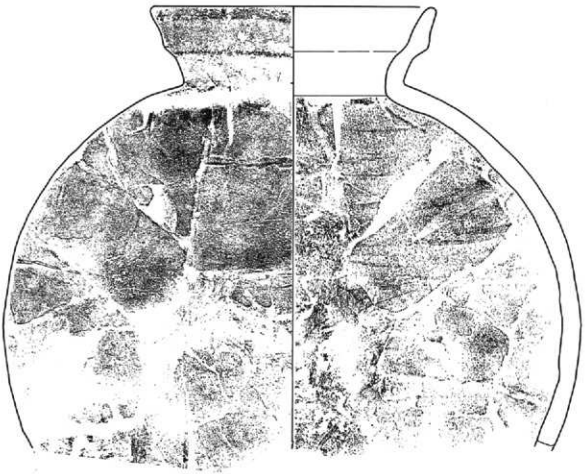
28-5はSF206土塁出土である。内外面に鉄釉が施され、外面下半は露胎となる。漆接ぎ痕が認められている。

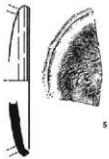
28-6、13はSK820出土である。6は磁器の戸車である。13は砥石である。1面のみ使用されている。

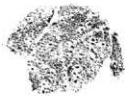
28-7～10・19は遺構外出土である。7は壺である。外面に施釉されるが、被熱のため釉が剝落している。9は蓋である。外面に緑色釉が施され、一部銅色の金属光沢を呈する。被熱している。10は青磁の鉢である。口縁部に使用痕が認められ、煤状の物質が付着する。19は板碑である。凝灰岩製で頭頂部を山形に作り出す。額部が突出し、二条線が刻まれる。背面、側面には荒いノミ痕が認められる。碑面は平滑に成形されている。種子等は確認できない。



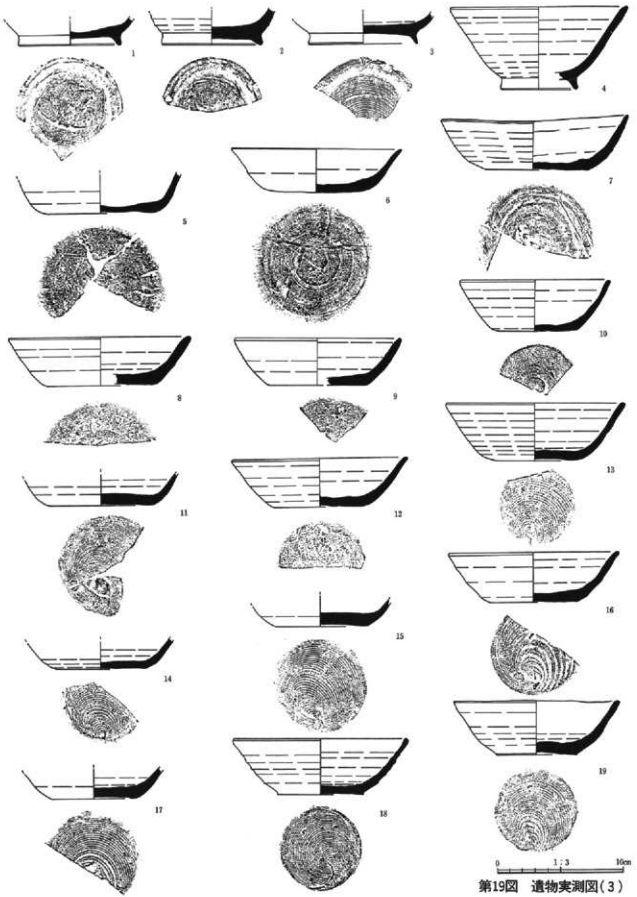
第17図　遺物実測図（１）



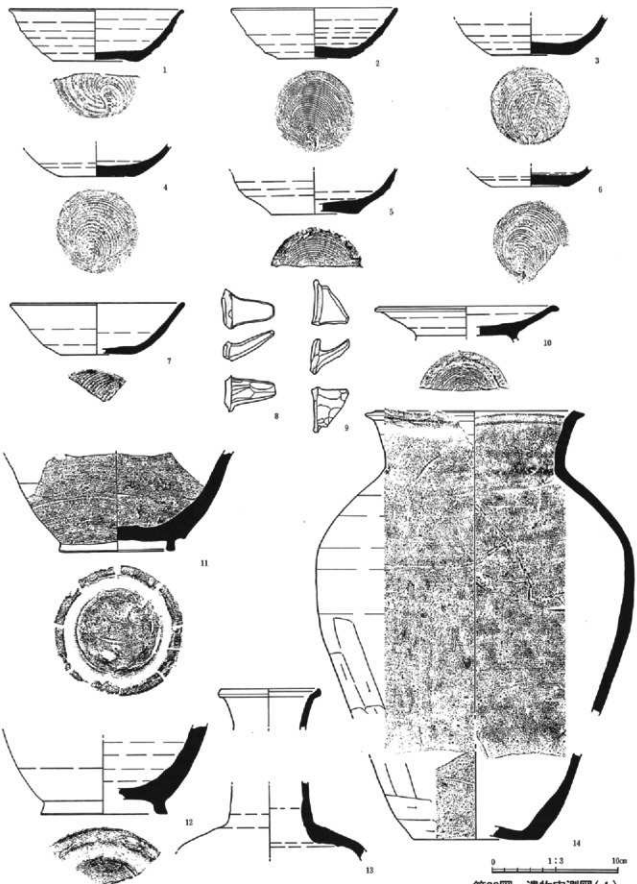




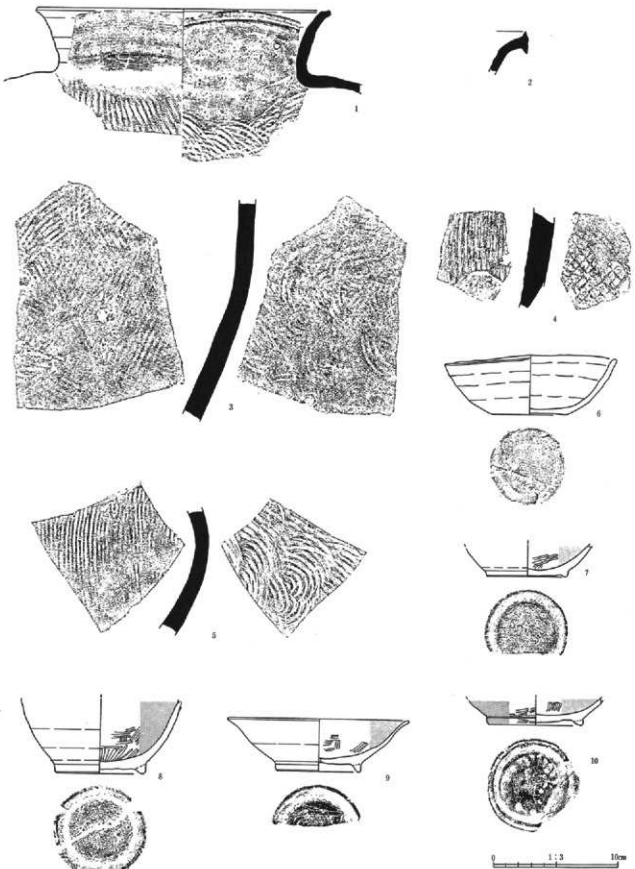
第18図　遺物実測図（２）



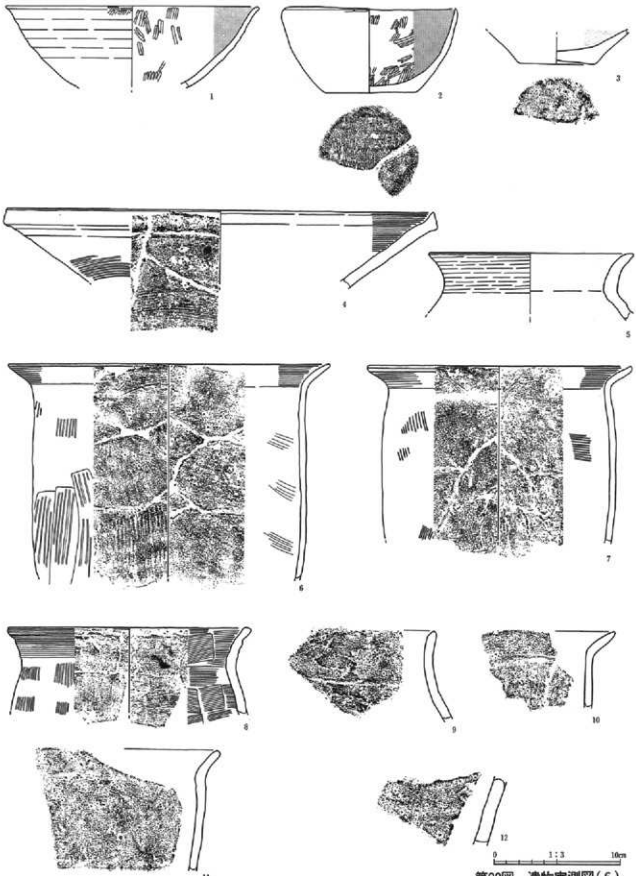
第19図　遺物実測図（３）



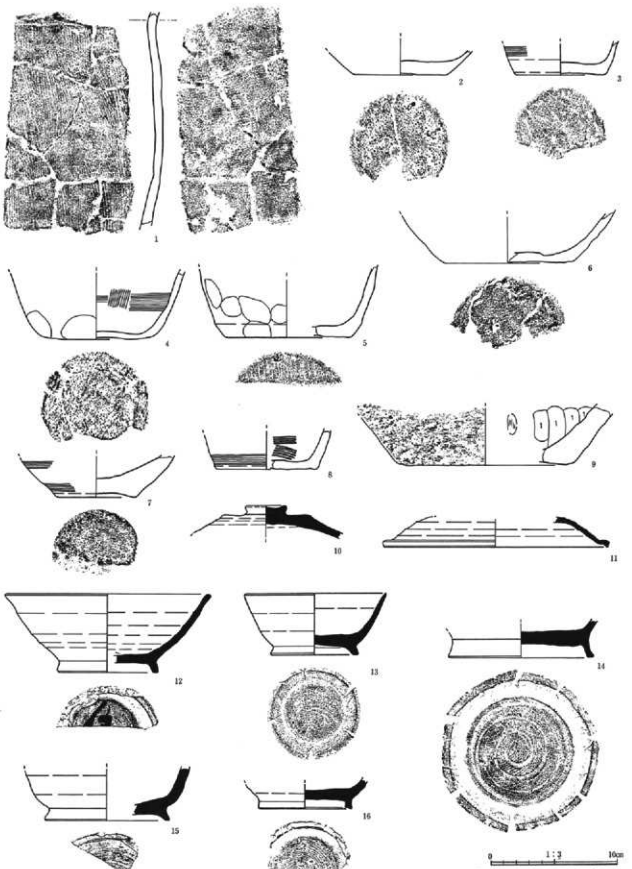
第20図　遺物実測図(4)



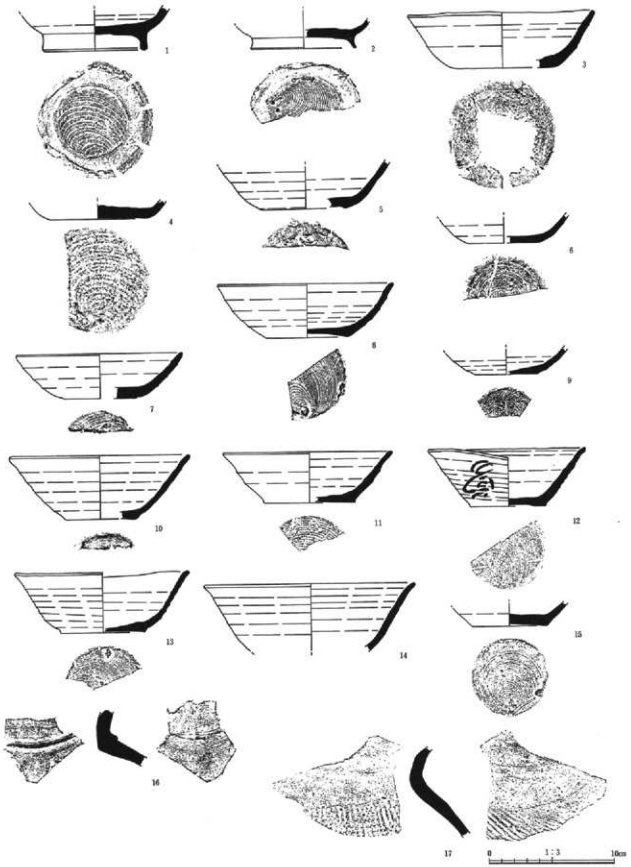
第21図　遺物実測図(5)



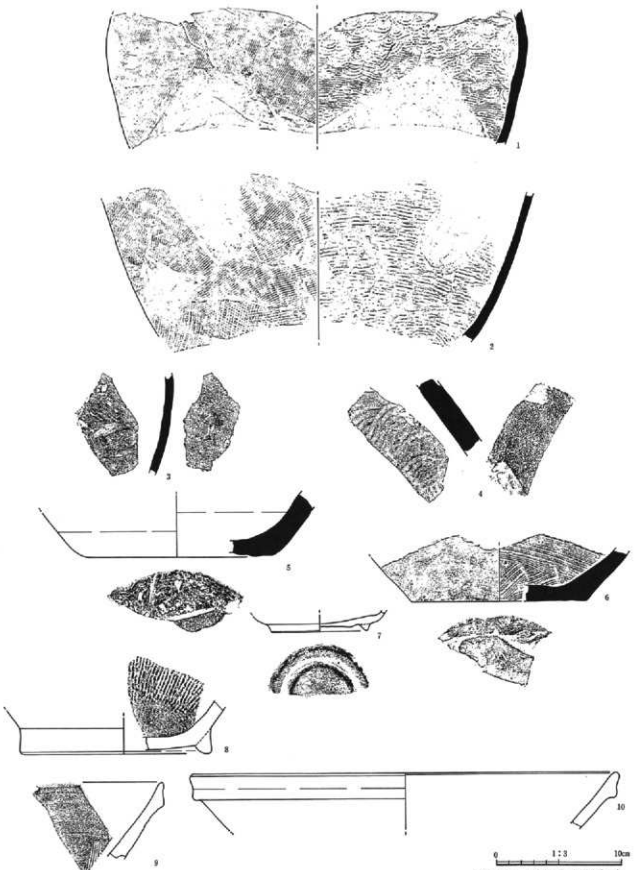
第22図　遺物実測図(6)



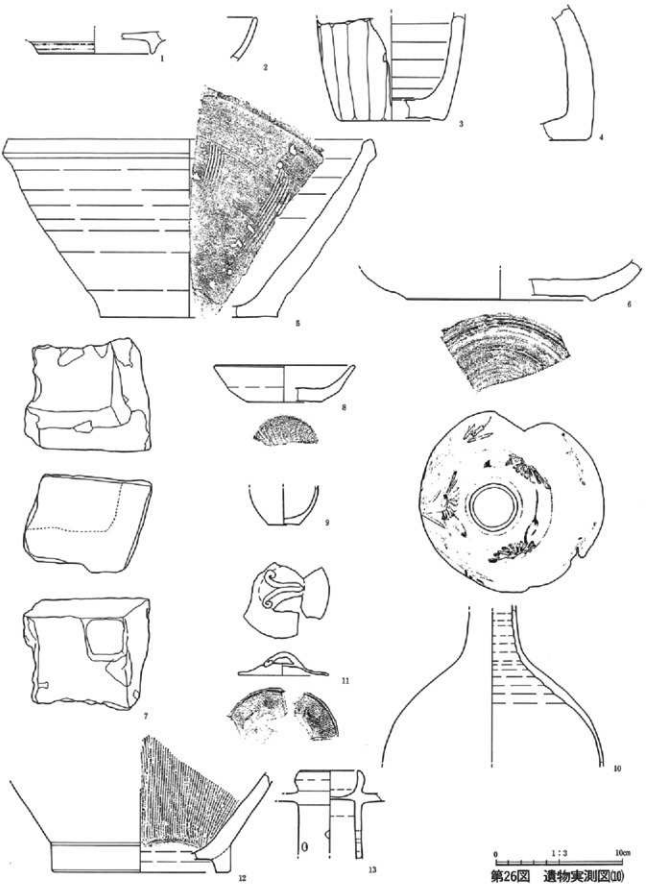
第23図　遺物実測図（７）



第24図　遺物実測図（８）

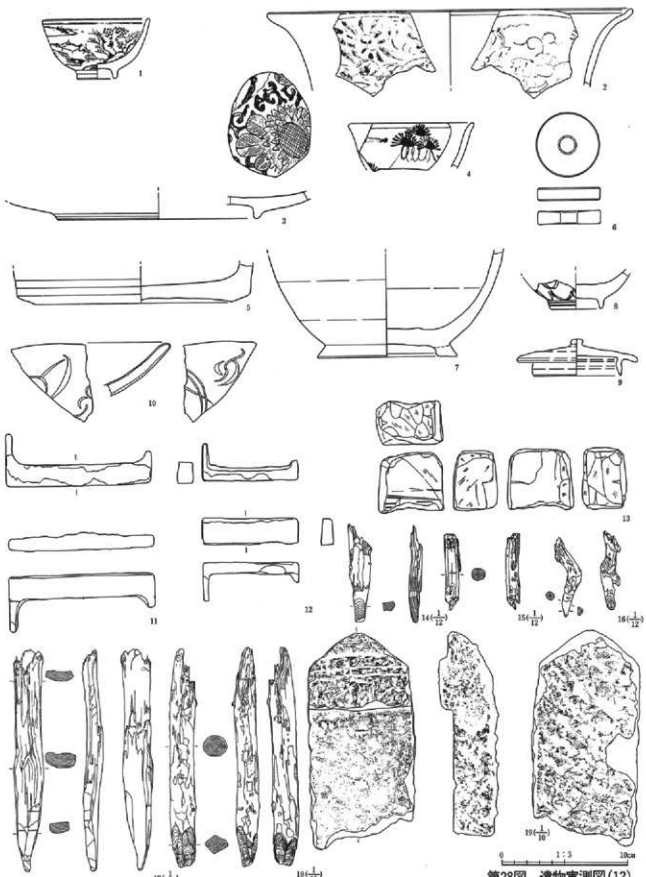


第25図　遺物実測図（９）



第26図　遺物実測図(10)

第27図　遺物実測図(11)



第28図　遺物実測図(12)

1次調査出土遺物観察表（1）

挿図No.		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
第17図	1	石器	石鏃	長35	幅12	厚2.8				SP601	1.1g　RQ38　先端部欠損
	2	石器	尖頭器	長92	幅64	厚16				14-Dグリッド	83.2g　RQ18　欠損
	3	石器	磨製石斧	長108	幅71	厚25.9				SX265	318.8g　RQ31　上部欠損
	4	石器	石鏃	長26	幅17	厚5.4				15-Cグリッド	2.3g
	5	石器	不明	長27	幅32	厚7				XO	5.8g　先端及び下部欠損
	6	石器	削器	長54	幅38	厚9				SD104F1	16.8g
	7	石器	石錐	長50	幅28	厚13				9-Cグリッド	12.6g
	8	石器	石匙	長88	幅31	厚9				XO	25.6g
	9	石器	石匙	長64	幅39	厚11.9				2区	38.2g
	10	石器	石匙	長83	幅35	厚16				SG380T2	46g
	11	石器	磨石	長100	幅76	厚41.3				XO	
第18図	1	土師器	壺	218	115		ミガキ	ハケナデ		1区	RP1　4世紀塩釜2期カ
	2	土師器	壺							SG380T	内外面赤彩痕跡　古式土師器
	3	土師器	壺	(125)						SG380T-2	頸径134mm　2段口縁　古墳時代
	4	土師器	壺							SG380T-1	2段口縁　赤彩痕跡　古墳時代
	5	須恵器	樽型𤭯				ロクロ	ロクロ・アテ		SX651	内面に爪状のアテ痕跡　樽型𤭯閉塞部
	6	土師器	甕		(94)		ハケメ・ナデ			SG380T-2	底部木葉痕
	7	須恵器	蓋				ロクロ	ロクロ	不明	SG380T2	
第19図	1	須恵器	高台付坏		(80)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T3	RP91　底部回転ヘラケズリ　貼付高台
	2	須恵器	高台付坏		(79)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T3	貼付高台　底部回転ヘラケズリ
	3	須恵器	高台付坏		(87)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX550	貼付高台
	4	須恵器	高台付埦	(130)	(60)	65	ロクロ	ロクロ		SG380	
	5	須恵器	坏		(90)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T4	底部ヘラナデ
	6	須恵器	坏	(130)	85	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T3	
	7	須恵器	坏	(140)	(80)	44	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T2	RP89
	8	須恵器	坏	(140)	(90)	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T1	RP46　重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏	(130)	(78)	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T2	内面摩滅　重ね焼き痕跡
	10	須恵器	坏	(110)	(66)	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SG380T1	RP47
	11	須恵器	坏		80		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T2	
	12	須恵器	坏	(130)	(70)	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380	RP84　重ね焼き痕跡
	13	須恵器	坏	(142)	60	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380F2	重ね焼き痕跡
	14	須恵器	坏		(70)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T4	RP85
	15	須恵器	坏		74		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T4	RP83　内外面火襷
	16	須恵器	坏	(130)	(70)	38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T3	RP93
	17	須恵器	坏		(68)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T4	RP86
	18	須恵器	坏	(140)	68	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380F2	RP45　体部上部に2条の沈線
	19	須恵器	坏	(132)	64	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T1	重ね焼き痕跡
第20図	1	須恵器	坏	(130)	(68)	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380	RP42
	2	須恵器	坏	(132)	58	39.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T1	RP40　重ね焼き痕跡
	3	須恵器	坏		60		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T2	
	4	須恵器	坏		64		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380F2	RP44
	5	須恵器	坏		(70)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T2	
	6	須恵器	坏		(58)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T2	RP87
	7	須恵器	坏	(130)	(60)	40.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T1	重ね焼き痕跡
	8	須恵器	双耳坏柄	長38.5	幅24	厚11.5	ケズリ			SG380T1	
	9	須恵器	双耳坏柄	長32	幅28	厚7	ケズリ			SG380T3	
	10	須恵器	高台付皿	146	(80)	26	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380	RP39　重ね焼き痕跡　貼付高台
	11	須恵器	壺		92		ロクロ・ケズリ	ロクロ		SG380T2	RP88　貼付高台　体部外面回転ヘラケズリ
	12	須恵器	壺		(90)		ロクロ・ケズリ	ロクロ		SG380T4	RP98　貼付高台　内外面灰被り　体部外面回転ヘラケズリ
	13	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		SG380T2	RP99　長頸壺　頸部二段接合

1次調査出土遺物観察表（2）

挿図No.		種別	器種	計測値 口径	底径	器高	成形 外面	内面	底部切離	出土地点	備考
	14	須恵器	甕	(156)	(98)	340	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ハケメ	不明	SG380	内外面灰被り
第21図	1	須恵器	甕	(232)			ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		SG380T3	RP95 口縁部下部にヘラ描「生カ」
	2	須恵器	甕				ロクロ	ロクロ		SG380T2	内外面灰被り 内面火はね
	3	須恵器	甕				タタキ	アテ		SG380T1	
	4	須恵器	甕				タタキ	アテ		SG380T3	
	5	須恵器	甕				タタキ	アテ		SG380T2	外面灰被り
	6	土師器	坏	(140)	60	44.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG380T3	内外面有機物付着 赤焼土器
	7	黒色土器	高台付坏		(64)				回転糸切カ	SP705	内面黒色処理 削出高台 内面油煙付着
	8	黒色土器	高台付坏		70			ミガキ	回転糸切	SK177	内面黒色処理 貼付高台
	9	黒色土器	高台付坏		(64)	41		ミガキ	不明	SK777	RP74 内面黒色処理 貼付高台
	10	黒色土器	高台付坏		74		ミガキ	ミガキ	不明	SK520	RP82 内外面黒色処理 貼付高台 底部指圧痕跡
第22図	1	黒色土器	碗	(200)			ロクロ	ミガキ		SX779	RP77 内面黒色処理
	2	黒色土器	碗	138	73	67	ナデ	ミガキ		SX516	RP69・70 内面黒色処理 底部網代痕跡
	3	土師器	坏		(60)				不明	SD294	RP102 内面黒色処理カ
	4	土師器	鉢カ	(330)			ハケメ			03-C	二次加熱カ
	5	土師器	甕	(360)						33-C	二次加熱
	6	土師器	甕	(350)			ハケメ	ハケメ		SX550	RP72 頸部一条沈線 二次加熱
	7	土師器	甕	(210)			ハケメ			SX516	RP69 二次加熱
	8	土師器	甕	(190)			ナデ・ハケメ	ハケメ		SK484	RP81
	9	土師器	甕							SD080	RP17 頸部1条沈線
	10	土師器	甕				ハケメ			SX550	RP72 頸部一条沈線 二次加熱
	11	土師器	鍋				ハケメ	ハケメ		SP627	二次加熱 内外面煤付着
	12	土師器	甕							03-C	二次加熱
第23図	1	土師器	甕				ハケメ	ハケメ		SP583	二次加熱
	2	土師器	甕		74					SX392	RP36 二次加熱
	3	土師器	甕		70					SK575	RP79 底部木葉痕
	4	土師器	甕		(80)					SX777	二次加熱 外面煤付着
	5	土師器	甕		(100)		ケズリ			SK484	RP81 底部網代痕跡 外面煤付着 二次加熱
	6	土師器	坏		(100)		ケズリ			SP566	RP73 底部体部手持ちヘラケズリ
	7	土師器	甕		(64)					1区T	二次加熱
	8	土師器	甕		(80)			ハケメ		3区XO	底部木葉痕
	9	土師器	甕		(120)		ケズリ・ナデ			30-B	二次加熱
	10	須恵器	蓋				ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX265	RP32 天井部端部回転ヘラケズリ
	11	須恵器	蓋	(180)			ロクロ	ロクロ		SX487	重ね焼き痕跡
	12	須恵器	高台付坏	(160)	(80)	61	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK781	貼付高台 底部墨書(字種不明)
	13	須恵器	高台付坏	(112)	68	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD236	RP34 貼付高台
	14	須恵器	壺		116		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX516	貼付高台
	15	須恵器	高台付碗		(80)		ロクロ	ロクロ		SX265	RP30 貼付高台
	16	須恵器	高台付坏		(74)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	27-D	貼付高台
第24図	1	須恵器	高台付碗		(82)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	31-D	貼付高台
	2	須恵器	稜碗		(84)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SP624	RP75 貼付高台
	3	須恵器	坏	(148)	84	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SK168	RP20 底部ナデ調整 重ね焼き痕跡
	4	須恵器	坏		(80)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	27-C	RP22
	5	須恵器	坏		(72)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK534	RP71
	6	須恵器	坏		(58)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX779	
	7	須恵器	坏	(132)	(60)	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD236	RP27
	8	須恵器	坏	(140)	(67)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO	重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏		(50)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX779	
	10	須恵器	坏	(142)	(56)	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK484	重ね焼き痕跡
	11	須恵器	坏	(135)	(73)	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX265	RP29 重ね焼き痕跡

１次調査出土遺物観察表（３）

挿図No		種別	器種	計測値 口径	底径	器高	成形 外面	内面	底部切離	出土地点	備考
第24図	12	須恵器	坏	125	60	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK484	RP80 体部逆位に墨書「曾」
	13	須恵器	坏	(132)	(66)	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK177 28-C	RP79
	14	須恵器	坏	(146)			ロクロ	ロクロ		SK484	重ね焼き痕跡
	15	須恵器	坏		60		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD133	RP21
	16	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		26-D	頸部取付部に突帯
	17	須恵器	甕				タタキ	アテ		04-CT	
第25図	1	須恵器	甕				タタキ	アテ		SX779	
	2	須恵器	甕				タタキ	アテ		1区	
	3	須恵器	甕				ケズリ	ヘラナデ		27-C	RP23 外面手持ちヘラケズリ
	4	須恵器	甕				タタキ	アテ		XO	外面灰被り
	5	須恵器	甕		(150)		ロクロ	ロクロ・ハケメ		1区T	
	6	須恵器	甕		(140)		ケズリ	ハケメ		28-C	RP24
	7	土師器	高台付坏		(74)				回転糸切カ	SX779	RP78 貼付高台 赤焼土器
	8	陶器	擂鉢		(190)					SD4	内外面錆釉 14mmに6状の卸目
	9	陶器								SD4	12mm以上に8条以上の卸目
	10	陶器	擂鉢	(316)						SD4	口縁部鉄釉
第26図	1	磁器	皿		(90)					SD205	畳付け露胎
	2	磁器	皿			33				SD205F20	黄灰色釉 外面に煤付着
	3	陶器	花生		(80)	80				SD205F20	内外面白色釉 赤褐色土と黄褐色土の練胎
	4	土師質土	火鉢		脚(73)					SD207	内外面被熱
	5	陶器	擂鉢	(284)	(140)	140			回転糸切	SD294	RP100RP101 戸長里 錆釉 18mmに7条の卸目 回転糸切
	6	陶器	鉢		(150)	.				SD294	RP103 戸長里 黄色失透釉 高台、高台内無釉 漆接ぎ
	7	石製品	火鉢			74				SD294	RQ104 内面被熱
	8	土器	かわらけ	(112)	(60)	29			回転糸切	SD294F1	RP50 回転糸切
	9	小壺		25					SD382	底部回転糸切	外面灰釉 内面露胎
	10	磁器	徳利		[illegible]					SD382	内面露胎
	11	陶器	蓋	73		19				SD382	内面布痕 外面指頭痕
	12	陶器	擂鉢		(140)					SD382	RP57 内外面錆釉 36mm以上に20条以上の卸目
	13	磁器	不明	[illegible]						SD382	RP55 下部3カ所の穿孔 内外面瑠璃釉 上部緑色釉
第27図	1	陶器	擂鉢	(152)						SD382	内外面錆釉 口縁部緑色釉 23mm以上に12条以上の卸目
	2	陶器	擂鉢		(150)					SD382	内外面錆釉 26mm以上に13条以上の卸目
	3	陶器	小坏	52	24	27				SD382	RP65 灰釉 畳付け、高台内露胎
	4	陶器	小坏	55	26	27				SD382	RP52 灰釉 畳付け、高台内露胎
	5	陶器	小坏	53	26	26				SD382	RP66 灰釉 畳付け、高台内露胎
	6	陶器	小坏	53	26	25				SD382	RP64 灰釉 畳付け、高台内露胎
	7	陶器	小坏	52	28	25.5				SD382	RP63 灰釉 畳付け、高台内露胎
	8	陶器	天目茶碗		(46)					SD382	RP56 内外面鉄釉 外面下半露胎
	9	磁器	火入れ	(106)						SD382	内面露胎
	10	磁器	輪花皿	104	58	23				SD382	肥前 口紅 畳付け露胎
	11	磁器	輪花皿	100	60	22				SD382	RP61 口紅 畳付け露胎 一部釉切れ 白濁
	12	磁器	碗	(84)	30	42				SD382	口紅 畳付け露胎
	13	磁器	小坏	62	30	28				SD382	上絵付け
	14	磁器	徳利	30						SD382	RP68 内面露胎
	15	磁器	皿		(68)					SD382	RP58 淡緑色釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 外面下半部露胎
	16	磁器	合子蓋	62		11				SD382	RP62 口縁部内面露胎
	17	磁器	碗	(96)	(80)					SD382	RP60 色絵
	18	磁器	碗	66	36					SD382	RP54
	19	磁器	坏	58	25	48				SD382	
	20	磁器	碗		(34)					SD382	RP51 畳付け露胎
	21	陶器	皿							SK793	口縁端部露胎 貫入 美濃手

１次調査出土遺物観察表（４）

挿図No.		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
	22	陶器	鉢		49					SK793	畳付け露胎　貫入
	23	陶器	鉢	(309)						SD793	海鼠釉　内面下半部露胎　被熱
	1	磁器	鉢	84	32	48				SK793	畳付け露胎
	2	磁器	鉢	290						SK793	口紅
第	3	磁器	皿	(300)						SK793	畳付け露胎
	4	磁器	鉢	(300)						SK793	
	5	陶器	壺		(146)					SF206	内外面黒色釉　排除ず
28	6	磁器	戸車			厚10				SK829	側面露胎
	7	陶器	壺		100					１区	外面施釉　被熱
	8	磁器	鉢		(400)					１区	肥前　畳付け露胎
図	9	陶器	蓋	長(128)		29				28-B	外面緑色釉　外面被熱　貫入
	10	青磁	鉢	(270)						XO	内外面飛雲文
	11	石製品	硯			厚17				SD382	
	12	石製品	硯			厚10				SD382	
	13	石製品	鏡石	長48	幅52	厚25				SK829	
	14	木製品	杭	長(10)	幅72	厚38				SD382	
	15	木製品	杭	長(12)	幅48	厚44				SD382	
	16	木製品	杭	長(12)	幅44	厚56				SD382	
	17	木製品	杭	長(30)	幅95	厚52				SD382	
	18	木製品	杭	長(60)	幅88	厚84				SD382	
	19	石製品	板碑	長(57)	幅37	厚(19)					重さ22.2kg

Ⅳ　第２次調査

１　調査の経過

第２次調査は、平成９年５月７日から７月10日までの実質47日間行った。

第１次調査時に移転未了のため調査ができなかった豚舎及び関連施設部分300㎡と、平成８年に県文化財課による試掘調査で新たに事業に係ることが確認された1200㎡の、計1500㎡について調査の対象とした。

発掘作業に先立ち、器材の搬入と調査事務所の設営を行った。次いで地山面・遺物包含層確認のため調査区内に試掘トレンチを設定し掘り下げた。それに基づき、重機を用いて表土を除去し、並行して面整理を行い遺構確認にあたった。道路のセンター杭を基準に５ｍ×５ｍ１単位のグリッドを設定した。グリッドの南北軸の振れ及び軸方向は第１次調査と一致する。

その後、河川跡から順次遺構精査に着手し、覆土を半截あるいはベルト状に残し平面図や断面図などの記録作業を行った後完掘した。遺物についても、一括出土や完形あるいは特徴的な物を登録し、遺構と同様の記録作業の後取り上げた。

７月２日には調査結果を公表し、埋蔵文化財に対する理解と保護思想の普及を目的にした現地説明会を開催し多数の参加者を得た。７月10日器材を撤収し、現地調査を終了した。

２　検出された遺構

１）遺構の分布と層序

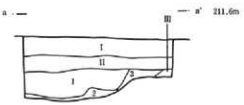
遺構は調査区全体に分布し、総計400基余りを数える。中央部を南西から北東に流下し調査区を２分するＳＧ2155の西側(右岸)に遺構の集中が見られ、６区と５区西側からは古墳や平安時代に属する竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土壙などが密集して検出されるが、東側(左岸)は遺構がややまばらとなり、５区東側では火葬墓・井戸跡・中小ピットが若干検出されるのみである。これらのことから平安時代の集落は調査区の北西に広がると推測される。４区は豚舎のコンクリート基礎によりグライ化し遺構の検出が難しく、明治大火時の廃材を埋設した土壙や現代の溝が主たる遺構であるが、１次調査時に検出された溝の延長部分や板材列と主軸方位がほぼ一致する杭列、さらに古代に属する土壙も少数ながら存在している。

井戸跡は５区の２基がＳＧ2155を切り、６区の２基が古墳周溝を切っている。地下水位が高く掘り込み易い地点を選別して井戸を構築したことが推測される。

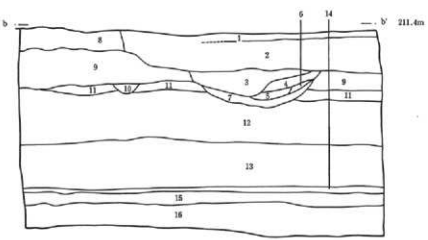
古墳はＳＧ2155右岸調査区西端で検出された。しかし古墳時代の遺物は左岸側から多く出土しており、当該時期の集落は左岸に存在した可能性がある。

調査区の層序は４区と５・６区とでは大きく異なる。第29図ａ－ａ′は古墳の周溝にかかる地点の層序である。Ⅰ層は畑地耕作土で、Ⅱ層は畑地基盤層(床土)と考えられる。Ⅲ層は地山であり、遺構検出面となっている。概ね１次調査の基本層序と一致する。第29図ｂ－ｂ′は４区北側の層序である。豚舎コンクリート基礎と西側を流れる農業用水路の影響によりグライ化が激しく様相を異にする。上位層は人為的な撹乱であり、整地層と考えられる。９で遺構を確認した。15は黒色粘質シルトで泥炭層である。付近から出土する縄文時代の石器との関連も考えられる

基本層序

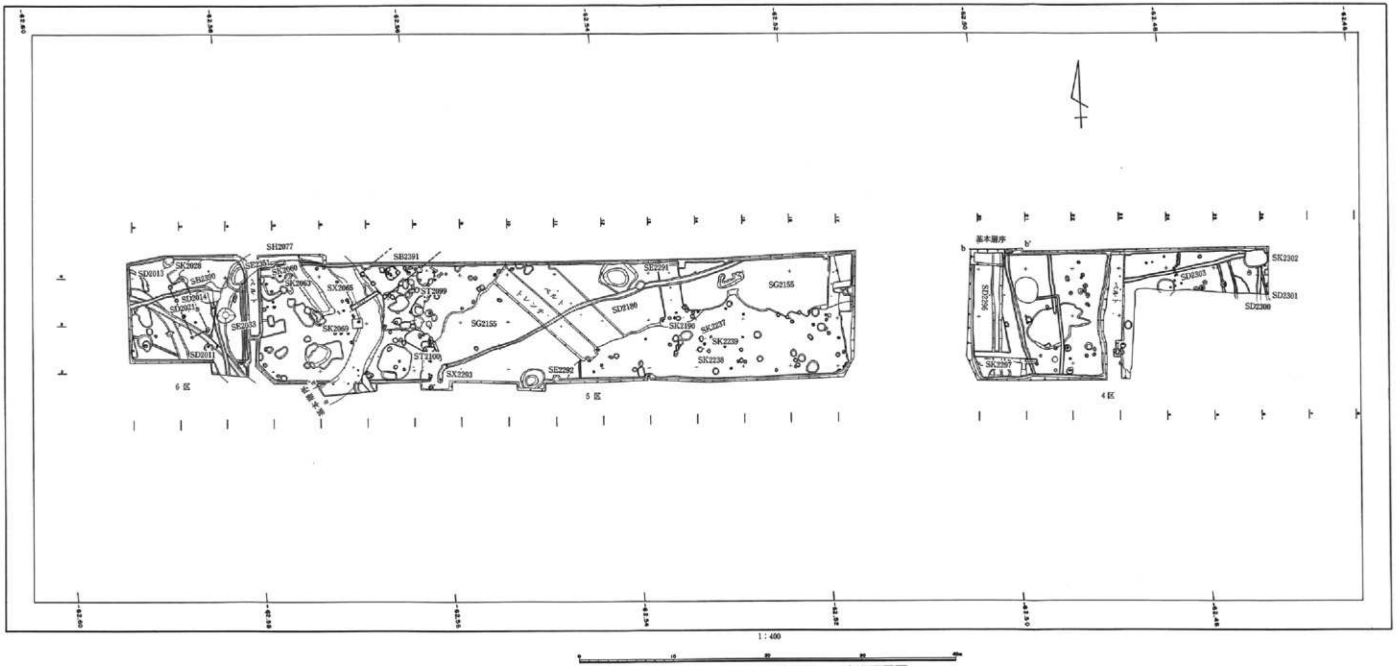


5区基層部分基本層序
I、10YR2/2黒褐色シルト
II、10YR2/2黒褐色シルト
III、10YR4/4褐色シルト
1、10YR2/1黒色シルト
2、10YR4/6褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入。
3、10YR3/4暗褐色シルト



4区基本層序
1、10YR3/2黒褐色砂質シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトが小粒状に混入。
2、10YR3/2黒褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入。
3、10YR2/2黒褐色砂質シルト
4、10YR2/2黒褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトがブロック状に混入。
5、10YR3/2黒褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトが細粒状に混入。炭化物を含む。
6、10YR5/6黄褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に少量混入。
7、2.5Y2/1黒色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色結質シルトがブロック状に混入。
8、10YR6/6明黄褐色砂質シルトに10YR3/3暗褐色砂質シルトがブロック状に混入。
9、10YR2/2黒褐色シルト
10、10YR2/3黒褐色シルトに2.5Y4/3オリーブ褐色シルトが粒状に混入。
11、2.5Y4/3オリーブ褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトがまだら状に混入。
12、2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト。一部グライ化。
13、2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質砂。一部グライ化。
14、7.5YR6/8橙色シルト
15、10YR1.7/1黒色粘質シルト
16、2.5Y3/1黒褐色粘質シルト

第29図　基本層序図



第30図　植木場一遺跡第 2 次遺構配置図

が、遺物の出土はなく詳細は不明である。

2）検出された遺構

2次調査の遺構としては、古墳1基、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡4基、河川跡1条、火葬墓1基、溝跡、土壙等、総計400基あまり検出された。以下時代毎に大別し、概要を述べる。

古墳時代

1　性格不明遺構

SX2065(第32図)　3～4-5～6グリッドで検出した。長軸780cm、短軸120～150cm内外の溝状を呈するが北側をSH2077周溝に切られ、さらに北側は調査区外のため全容は不明である。深さは30cmを測る。覆土は黒褐色砂質シルトと褐色シルトの2層を基調とし、遺物は1層からの出土である。土師器坏・壷・甕破片173点、黒色土器(内面黒色処理)坏破片3点、ほぼ完形の土師器丸底鉢1点、砥石1点計178点出土した。出土遺物は49-1～6の6点図示した。49-1は小型丸底鉢である。内外面丁寧なヘラミガキが施されている。塩釜式2期に並行すると考えられる。49～4・5は壷体部である。内外面ともヘラミガキ及び赤彩痕跡が観察される。前述小型丸底鉢とほぼ同時期と推定される。当初、方形周溝墓の一部の可能性を含め検討したが、詳細は不明である。

2　1号古墳

SH2077(第31図)　2～4-3～7グリッドで検出した。墳丘部は後世の削平により失われており周溝のみの検出にとどまった。北側と南側は調査区外であり、北側は地蔵堂境内、南側は民家敷地となっており全容は不明である。当初、前方後円墳の可能性を指摘されたため、北側と南側を一部拡張したところ、円形に周溝が巡っていることが判明し、円墳とした。周溝は幅160～250cm、深さは36cmを測る。周溝の心心間の距離は16mを測る。SX2065を切り、SD2014、SD2021、SD2354、SE2033、SE2351、ST2099等に切られる。覆土は黒色シルトと褐色シルトの2層を基調としている。遺物は1層からの出土である。土師器高坏脚部1点、坏破片78点、甕破片59点、壷口縁部1点、黒色土器(内面黒色処理)坏破片4点、須恵器甕1点、坏・蓋・甕・壷破片41点、砥石1点等総計196点出土している。出土遺物は48図に図示した。これら遺物のうち遺構の年代を示すものとして考えられるのは、土師器壷口縁部及び高坏脚部と須恵器甕である。他は平安時代の遺物であり、1～2-6グリッドから集中して出土したことから、周溝跡への一括投棄或いは後代の流れ込みと判断される。特に須恵器甕(48-7)は、口縁部が破損しているが体部は3分の2程遺存している。体部には1条の櫛描波状文が丁寧に整然と施文され、その上下に1条ずつヘラケズリによって突帯風に削り出す。焼成はやや甘いが、非常に丁寧な造りの優品である。大阪府陶邑ON46～TK208に並行すると考えられる(京都造形芸術大田辺昭三教授のご教示による)。土師器壷(48-2)は内外面ともヘラミガキされ、赤彩された痕跡を残す。体部は失われているが球胴型と考えられる。南陽市内には、稲荷森古墳を初めとして、蒲生田古墳群、上野山古墳群、二色根古墳群があり、前方後円墳の稲荷森古墳以外は市街地北東の丘陵上に位置している。出土遺物から蒲生田古墳群は4世紀中葉、稲荷森古墳は4世紀第4四半期とされ、植木場一遺跡SH2077は稲荷森古墳に後続する時期に構築されたと推測される。当該

時期の円墳が平野部に構築されるのは、類例が少ない。

平安時代

1　竪穴住居跡

S T2099(第33図)　3-7～8グリッドで検出した。長軸420cm、短軸410cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。S H2077の東側に位置し西辺がS H2077を切るが、北辺をS K2153、東辺をS K2142・S K2144、南辺をS K2150に切られ全形は不明である。また、S B2391のE B2107にも切られている。確認面から床面までの深さは20～40cmを測る。主軸方位はN-7.5°-Eである。覆土中及び床面から土師器甕破片48点、須恵器坏・蓋・壷破片8点計56点出土した。床面のやや北壁寄りに長軸220cm、短軸174cmを測る不整形の落ち込みが見られた。ピットは深さは5～15cm程度と浅く、主柱穴は不明である。北壁やや東寄りのE L 6がカマドに相当すると考えられるが、攪乱を受けており詳細は不明である。出土遺物は49-7～10の4点図示した。49-8は須恵器壷体部破片で二次加熱を受けている。49-9は須恵器坏で底部は回転糸切で、口径に比して底部がやや大きいタイプである。これらにより、S T2099は9世紀第一四半期頃と推測される。

S T2100(第34図)　1～2-7グリッドで検出した。長軸340cm、短軸334cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。S H2077の南東に位置し、S T2099と南北に並ぶ。南辺をS K2101に切られる。確認面から床面までの深さは20cmを測る。主軸方位はN-28°-Eである。覆土中及び床面から須恵器坏・甕破片13点、土師器坏・甕破片22点、黒色土器坏破片3点、土師器小型鉢1点等計42点出土した。カマドは検出されなかった。ピットは全て住居跡が埋没後に掘られたと推測され、遺構を構成する物ではない。出土遺物は49-11・12の2点図示した。49-11は古式土師器鉢で4世紀代と考えられる。器面調整等は不明であるが胎土は緻密である。流れ込みと考えられる。49-12は須恵器坏で底部回転糸切である。

2　掘立柱建物跡

S B2390(第35図)　2～3-2～3グリッドで検出した。桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡で、南北棟である。S D2014により東側の柱穴が切られる。桁行全長は400cm、梁行全長は120cmを測る。柱間は西側桁行きで北から120cm、120cm、160cmを測り柱穴の配置は不規則である。主軸方位は、N-21°-Wである。柱穴掘方は径20cm～30cmの円形を呈し、確認面からの深さは22cm～30cmである。E B2016から須恵器坏口縁部破片1点、土師器甕体部破片2点、E B2018から須恵器坏体部破片1点の計4点出土した。柱根は出土していない。

S B2319(第35図)　3～4-7～8グリッドで検出した。桁行が調査区外に伸びる為全容は不明であるが、桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物跡で東西棟である。E B2107がS T2099を、E B2152がS K2153を切っている。桁行全長は320cm以上、梁行全長は240cmを測る。柱間は桁行約160cm、梁行約120cmを測る。主軸方位はN-51°-Eである。柱穴掘方は長軸40cm～短軸30cmの隅丸方形を呈し確認面からの深さは20cm～25cmである。E B2109から須恵器坏体部破片1点、土師器坏体部破片、甕底部破片各1点計3点出土した。柱根は出土しない。

3　溝跡

S D2180(第36図)　1～4-8～14グリッドで検出した。1-8グリッドで東に進路を変え、東

流し調査区外に抜ける。SG2155を切りSK2182及びSE2291に切られる。幅40cm～80cm、深さ10cm～25cmを測る。覆土中から須恵器坏・蓋・甕・壷破片53点、土師器坏・甕破片93点、黒色土器(内外面黒色処理)坏1点計147点出土した。出土遺物は49-13～23の11点図示した。49-16は須恵器蓋で肩部は回転ヘラケズリされる。49-18は須恵器坏で底部回転ヘラケズリされる。

SD2011(第37図)　2～3-2～3グリッドで検出した。円形を呈するように見受けられるが、4分の3程が調査区外へ伸びるために詳細は不明である。SD2014、SD2021、SP2023に切られる。幅100cm～120cm、深さ約15cmを測る。覆土中から、須恵器坏破片8点、土師器坏・蓋・甕破片31点計39点出土した。出土遺物は49-24～26の3点図示した。円墳周溝の可能性もあるとしておく。

SD2014(第37図)　2～3-2～4グリッドで検出した。東西の流れから3-3グリッドで南北へと直角に流路を変える。SD2011、SD2021、SH2077を切る。幅40cm、深さ12cm～15cmを測る。覆土中から土師器甕体部破片2点出土した。直角に曲がることから何らかの区画施設の可能性もある。

SD2021(第37図)　2～3-2～4グリッドで検出した。SD2011・SH2077を切り、SD2014に切られる。幅約60cm、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。

SD2013(第38図)　3～4-2グリッドで検出した。幅30cm～40cm、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。

SD2354(第38図)　1～2-6～7グリッドで検出した。SH2077を切る。幅60cm～80cm、深さ37cmを測る。覆土中から須恵器坏口縁部破片1点、土師器甕破片3点計4点出土した。

SD2300・SD2301(第38図)　3-26グリッドで検出した。SD2300がSD2301を切り、SK2302に切られる。SD2300は幅40cm、深さ15cm、SD2301は幅26cm、深さ8cmを測る。SD2300の覆土から須恵器坏・甕破片3点、土師器坏・甕破片3点、黒色土器坏3点計9点出土した。出土遺物は49-27の1点図示した。須恵器甕体部の破片である。精査の結果SD2300は1次調査SD776と、SD2301は1次調査SD715と同一であることが判明した。

SD2303(第39図)　3～4-23～26グリッドから検出した。SK2302に切られる。幅30cm～40cm、深さ40cmを測る。15°程北に傾くがほぼ直線的に伸びている。覆土中から須恵器坏底部破片1点、土師器坏・甕破片8点計9点出土した。

4　土壙

SK2032(第39図)　2-3グリッドで検出した。径94cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。SH2077、SD2021を切る。出土遺物は須恵器坏・蓋・甕破片3点出土している。

SK2190(第39図)　3-13グリッドで検出した。長径55cm、短径44cmの不整円形を呈し、深さは26cmを測る。覆土2層外縁部に土師器甕破片が見られ、1～2層中に土師器片及び黒色土器坏が混入する。これらのことから土器埋設遺構の可能性もある。土師器甕破片8点、黒色土器(内面黒色処理)坏2点計10点出土した。出土遺物は50-10～12の3点図示した。50-11は黒色土器(内面黒色処理)坏で、口径に比して底部及び器高がやや大きい。体部外面下半手持ちヘラケズリされる。二次加熱を受けている。

S K2028(第40図)　4-2グリッドで検出した。長径126cm、短径98cmの不整円形を呈し、深さは42cmを測る。覆土は8層に分けられるが、遺物は4層までの上層から出土する。須恵器坏破片6点、土師器坏・甕破片55点、黒色土器(内面黒色処理)坏1点、石製品1点計63点出土した。出土遺物は、49-28～50-9の10点図示した。50-1は土師器甕で底部ヘラ切りの小型の甕で、二次加熱される。

S K2302(第40図)　4-25～26グリッドで検出した。北側は調査区外の為全容は不明であるが長軸260cm、短軸180cm以上の不整円形を呈し、深さは20cmを測る。S D2300、S D2301、S D2303を切る。須恵器坏・甕・壷破片44点、土師器甕破片60点、黒色土器(内面黒色処理)坏計111点出土した。出土遺物は50-15～23の9点図示した。

S K2069(第41図)　3-5グリッドで検出した。長軸214cm、短軸105cmの不整形で深さは45cmを測る。遺物は出土しない。

S K2060・S K2063(第41図)　4-5グリッドで検出した。S K2060をS K2063が切り、S X2065を切っている。S K2060は北辺が調査区外に伸びるが長軸180cm、短軸160cm以上、深さ25cmを測る。S K2063は径53cm、深さ23cmを測る。須恵器坏・甕破片3点、土師器甕破片4点計7点出土した。出土遺物は50-13・14の2点図示した。

S K2037(第41図)　2-13グリッドで検出した。径104cm、深さ18cmを測る。断面観察で2つの遺構の切り合いが判明した。須恵器坏破片4点、土師器甕破片14点計18点出土した。

5　井戸跡

S E2033(第42図)　3-3～4グリッドで検出した。S H2077を切る。径183cm、深さは確認面から130cmを測る。井戸枠・井戸眼等の施設は認められない。須恵器坏・甕・壷破片14点、土師器坏・甕破片52点、黒色土器(内面黒色処理)4点、石製品3点計73点出土した。遺物は1層からの出土である。出土遺物は51-1～5の5点図示した。51-4は砥石に類似する石製品である。1層底面より出土した。上部に径5㎜程の貫通孔が穿たれると考えられるが破損している。3面に線刻が施され、うち1面は文字と考えられる。国立歴史民俗博物館平川南氏によれば「譖」と読めるとのことであった。意味等については後述する。断面観察等から井戸廃絶後、窪地となり遺物が投棄されたと考えられる。何らかの祭祀を想起させる。

S E2351(第42図)　3～4-4グリッドで検出した。S H2077を切る。S H2077精査中に不整円形の掘方を確認し、掘方の傾斜が急であることなどから井戸跡とした。井戸枠・井戸眼等の施設は認められない。径325cm、確認面からの深さは170cm以上を測るが、ベルト崩落の為詳細な記録は取ることができなかった。須恵器坏・甕・壷破片23点、土師器坏破片18点、黒色土器(内面黒色処理)坏1点計42点出土した。出土遺物は51-6～9の4点図示した。

S E2292(第43図)　1-10グリッドで検出した。径260cm、確認面からの深さは130cm以上を測る。井戸枠・井戸眼等の施設は認められない。須恵器坏・蓋・甕破片22点、土師器坏・甕・壷破片36点、黒色土器2点計60点出土した。出土遺物は51-10～52-3の9点図示した。

S E2291(第44図)　3～4-12グリッドで検出した。S D2180を切る。長軸350cm、短軸320cmの不整方形を呈する。確認面からの深さは130cm以上を測るが、ベルト崩落の為詳細な記録を取る

ことができなかった。須恵器坏・蓋・甕・壷381点、土師器坏・甕826点、黒色土器69点、砥石1点、石製品1点、石94点計1372点出土した。遺物は概ね上層からの出土で、人為的に埋められた後投棄されたと考えられる。2次調査出土遺物の約30％に当たる。出土遺物は52-4～59-12の143点図示した。墨書土器が21点出土している。出土墨書土器総数の87.5％である。判読できたのは「曽」「手」「良」「福」「丈」「持」「本」「宙カ」の8種である。同一井戸跡から墨書土器が集中して出土する例は、極めて珍しく何らかの祭祀を想起させる。

6　河川跡

S G2155(第47図)　1～4-8～17グリッドで検出した。南西から北東に流下する。多くの遺構に切られることから、早い時期に埋没し湿地状態で存在したと考えられる。2-9グリッドを中心に遺物集中地点を確認しS X2293とした。幅13m以上、確認面からの深さは90cm以上を測る。須恵器坏・蓋・甕・壷破片62点、土師器坏・甕破片203点、黒色土器坏(内面黒色処理)坏10点計275点出土した。出土遺物は60-1～7の7点図示した。S X2293からは須恵器・坏・蓋・甕・壷破片166点、土師器坏・甕破片111点、黒色土器坏10点計287点出土した。出土遺物は60-8～63-7の51点図示した。遺物は口径に比して底径が大きく器高が低い坏類が中心となる。S E2291に先行すると考えられ、9世紀前半代としたい。

7　墓壙

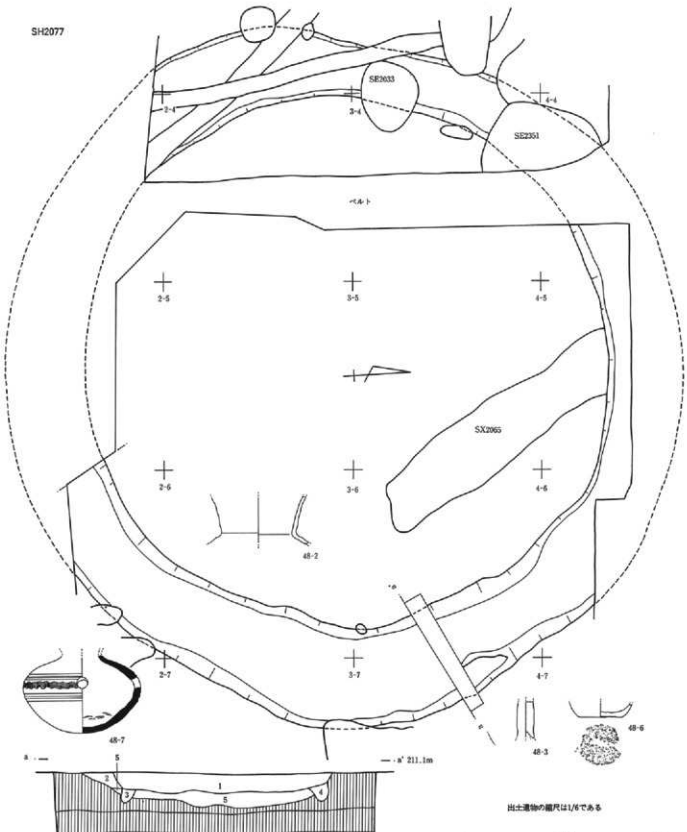
S K2239(第45図)　2-14グリッドで検出した。長径60cm、短径40cmの不整楕円形を呈し、深さは15cmを測る。1層から火葬骨と考えられるものが混入するのを確認した。理化学分析を依頼した。時期は平安時代としておく。詳細は付編に譲る。

近世以降

S A2357(第45図)　3～4-24グリッドで検出した。径15cm内外の小ピットが直線的に配列されているのが確認された。何らかの区画機能を持つ杭列と考えられる。方位はN-11°-Eである。1次調査の2区S D4と3区S D382とほぼ並行であり関連性があると思われる。S A2357はS D382の上部の溝が後代に削平された状況を示していると考えることができる。

S K2297(第46図)　1～2-20グリッドで検出した。長軸600cm以上、短軸250cm以上の不整方形を呈し、深さは90cmを測る。上層は砂に覆われており埋土と考えられる。19層から木屑が大量に出土した。鉋屑等と思われる。明治時代の大火に関連すると考えられ、1次調査の大火廃材を埋設したS K793とは20m程の距離である。出土遺物は65-1～17の17点図示した。大半は近世陶磁器である。65-16は木製合子で内部に有機物が入れられている。

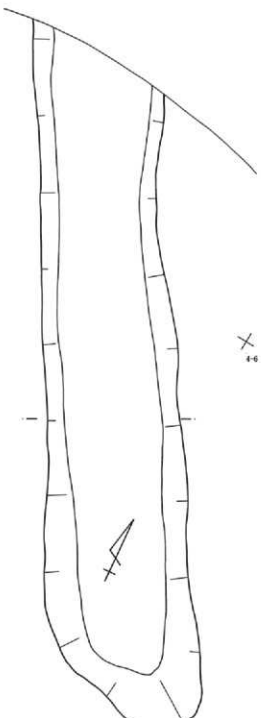
S D2296(第45図)　2～4-20グリッドで検出した。方位はN-5°-Eで、直線で南北に伸びる。幅100～120cm、深さは30cmを測る。出土遺物は66-1～67-3の21点図示した。前述S K2297と同様大半は近世陶磁器である。67-3は底面出土の鉄製文鎮である。表面に赤湯圏芸高の校章が刻まれている。これらのことからS D2296の構築年代は昭和20年代後半以降の可能性が高い。



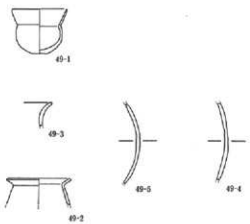
1．10YR1.7/1黒色シルトに10YR4/4褐色砂質シルトがまだら状に少量混入。
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色砂質シルトがブロック状に多量に混入。
3．10YR4/4褐色シルト質砂に10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入。
4．10YR2/2黒褐色シルトに10YR3/3暗褐色砂質シルトがブロック状に混入。
5．10YR4/4褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトが柱状・まだら状に混入。

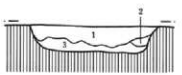
第31図　遺構実測図(13)

SX2065



4-6



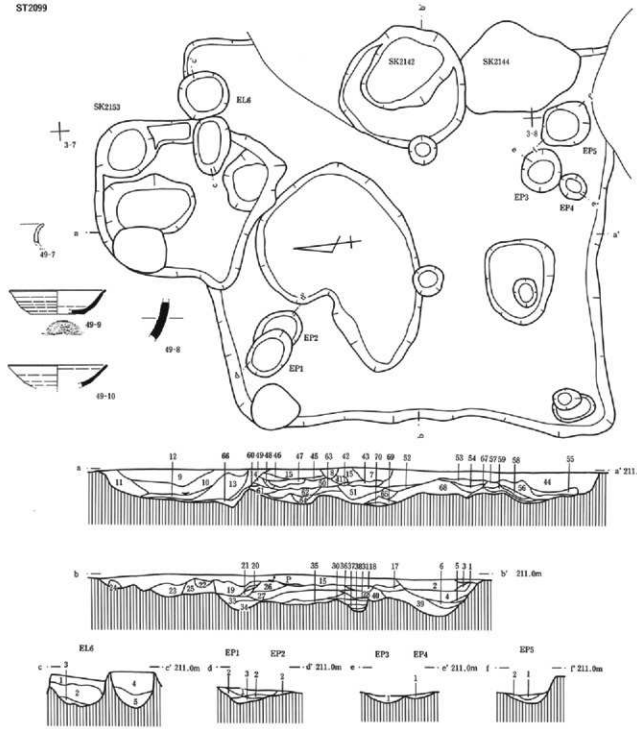


SX2065
1．10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が斑状に混入。
2．10YR2/1黒色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
3．10YR4/4褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトがまだら状に混入。

出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図　0　1：40　2m

第32図　遺構実測図(14)



ST2099-EL6
C-C'　1．10YR4/6褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
　　2．10YR2/1黒色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が小粒状に混入。
　　3．10YR4/4褐色砂質シルトに10YR2/1黒色シルトが粒状に混入。
　　4．10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトが粒状に混入。炭化物を含む。
　　5．10YR2/1黒色シルトに2.5YR4/6赤褐色シルト(地土)が粒状に多量に混入。炭化物を含む。
ST2099-EP1・2
d-d'　1．10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入。
　　2．10YR2/1黒色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
　　3．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
　　4．10YR4/4褐色砂質シルト
ST2099-EP5
f-f'　1．10YR2/1黒色シルト
　　2．10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
ST2099-EP3・4
e-e'　1．10YR2/1黒色シルト

出土遺物の縮尺は1/6である

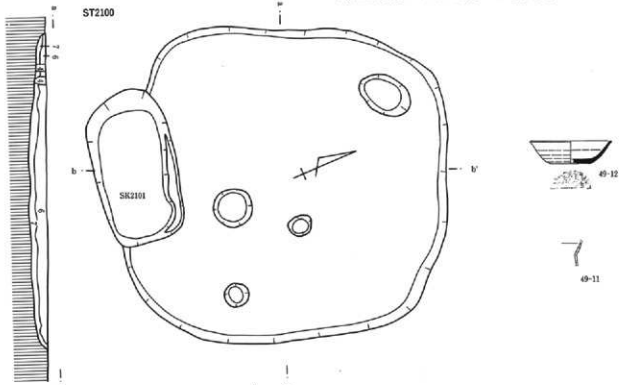
遺構平面図・断面図　0　1:40　2m

第33図　遺構実測図(15)

ST2009

a-a' b-b'

1. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトが粒状に混入。
2. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
3. 10YR2/1黒色砂質シルトに7.5YR4/6褐色砂質シルトがまだら状に混入。
4. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に多量に混入。
5. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに7.5YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
6. 10YR3/3暗褐色砂質シルトに10YR2/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
7. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が粒状に混入。
8. 10YR3/3暗褐色シルト
9. 10YR2/3黒褐色シルト。炭化物を含む。
10. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが粒状に混入。
11. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂質シルトがブロック状に混入。
12. 10YR3/3黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトがまだら状に混入。
13. 10YR2/1黒色シルト。炭化物を含む。
14. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルト質砂がまだら状に混入。
15. 10YR2/3黒色シルトに7.5YR5/8明褐色シルト質砂が小粒状に少量混入。
16. 10YR5/6黄褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色シルトが粒状に混入。
17. 10YR2/3黒褐色シルトに7.5YR4/6褐色砂が粒状に混入。
18. 10YR2/1黒色シルト
19. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状、粒状に混入。
20. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に混入。
21. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入。
22. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色砂質シルトがまだら状に混入。
23. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
24. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。(23と9褐色シルト質砂がやや多い。)
25. 10YR4/6褐色シルト質砂
26. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が粒状に混入。
27. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR3/3暗褐色シルトがまだら状に混入。
28. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR3/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
29. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が小粒状に混入。
30. 10YR2/3暗褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
31. 10YR2/3暗褐色砂質シルト
33. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR3/4暗褐色シルトが少量まだら状に混入。
34. 10YR3/3暗色砂質シルトに10YR4/6褐色砂が少量ブロック状に混入。
35. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/2黒褐色シルトが少量まだら状に混入。
36. 10YR4/4褐色シルト
37. 10YR3/4暗褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に混入。
38. 10YR2/3黒褐色砂質シルト
39. 10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
40. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3暗褐色シルトが少量まだら状に混入。
41. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状・粒状に混入。
42. 10YR2/3黒褐色砂質シルト
43. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
44. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が小粒状に混入。
45. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が小粒状に混入。
46. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルト質砂が小粒状に混入。
47. 10YR4/4褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色砂質シルトがまだら状に混入。
48. 10YR2/2黒褐色シルト
49. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色砂質シルトがまだら状に混入。
50. 10YR4/6褐色砂質シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入。
51. 10YR3/4暗褐色砂質シルトに10YR2/3黒褐色シルト・10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
52. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR3/3暗褐色砂質シルトがブロック状に混入。
53. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
54. 52と同様。褐色シルト質砂がやや多い。
55. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入。
56. 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂質シルトが粒状に混入。
57. 10YR4/4褐色シルトに10YR3/3暗褐色シルトがブロック状に混入。
58. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR3/3暗褐色シルトがまだら状に混入。
59. 10YR4/6褐色シルト質砂
60. 10YR4/4褐色シルト
61. 10YR4/6褐色シルト質砂
62. 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に混入。
63. 62と同様。褐色シルト質砂が多い。
64. 62と同様。
65. 10YR4/6褐色シルト質砂に10YR2/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
66. 65と同様。
67. 10YR4/4褐色砂質シルト
68. 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が粒状に混入。
69. 10YR3/4暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がブロック状に混入。
70. 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが粒状に混入。



ST2100・SK2101 a-a' b-b'

1. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色砂質シルトが小粒状に混入。
2. 10YR2/2黒褐色シルトに7.5YR5/8明褐色砂質シルトが粒状に混入。
3. 10YR4/4褐色砂質シルトに10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入。
4. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に混入。
5. 10YR2/3黒褐色に10YR4/6褐色シルト質砂が粒状に少量混入。
6. 10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6明褐色シルト質砂がブロック状・小粒状に混入。
7. 10YR4/6褐色砂質シルトに10YR2/2黒褐色シルトが粒状。7.5YR5/8明褐色シルトが上部に帯状に混入。

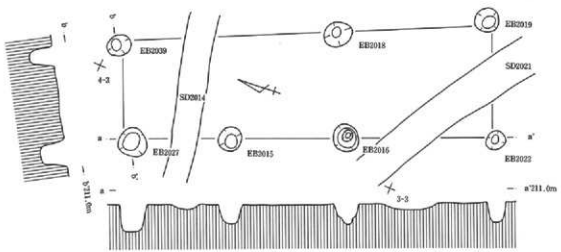
出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図

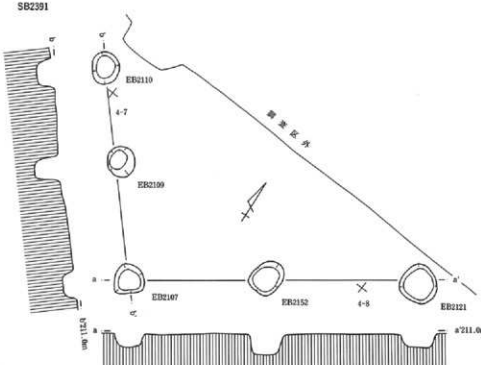
0 1:40 2m

第34図　遺構実測図(16)

SB2390

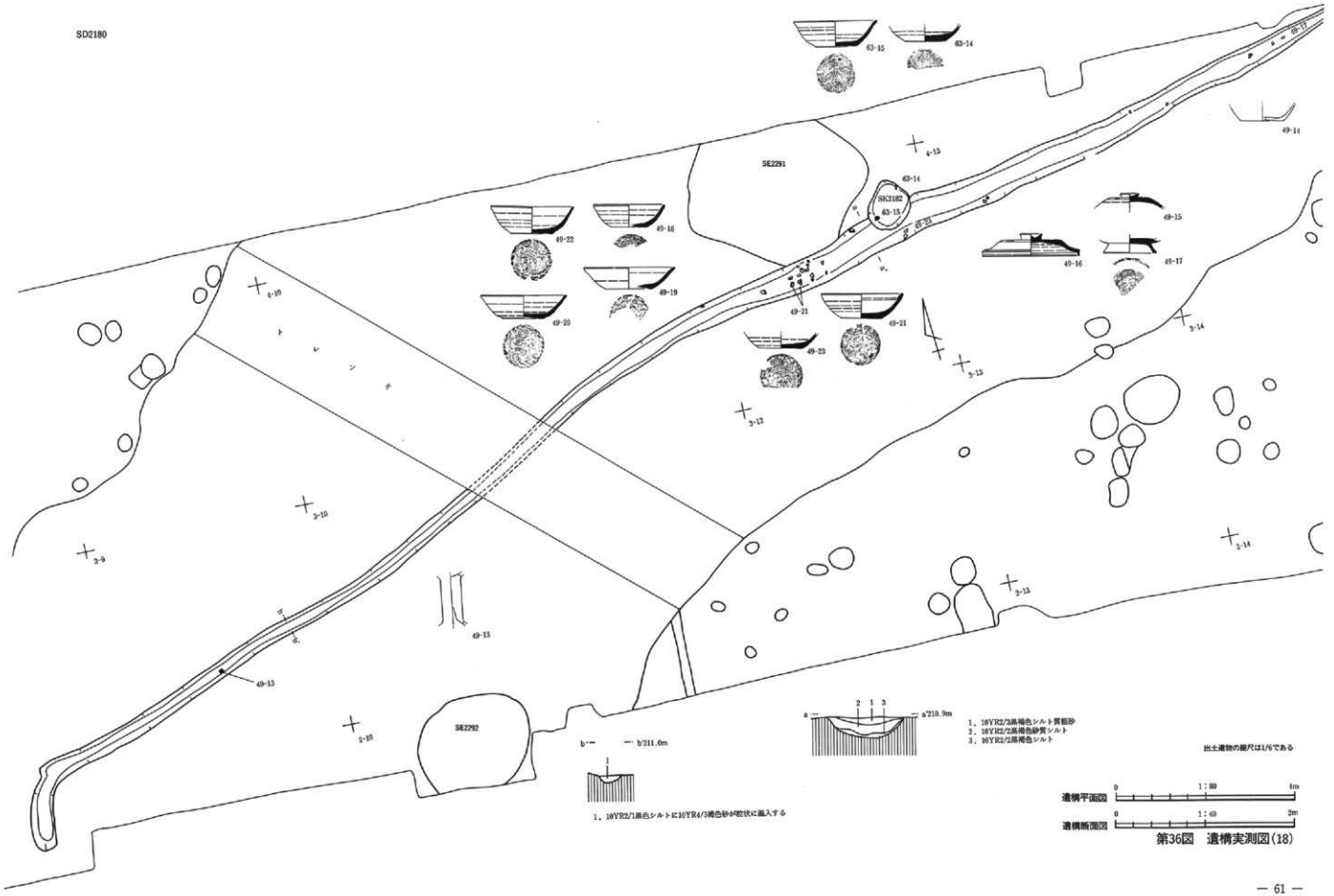


SB2391

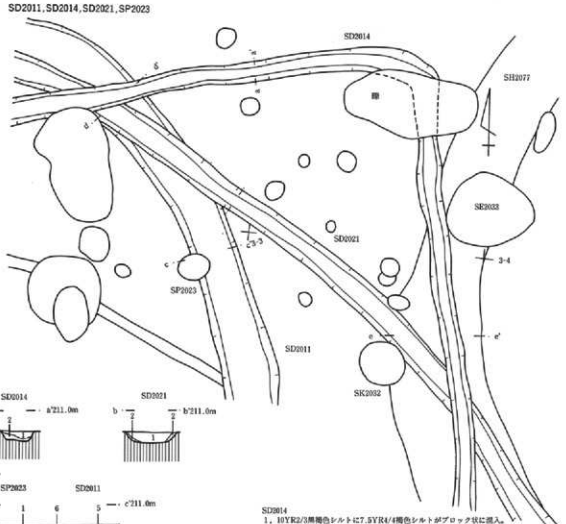


遺構平面図・エレベーション図　0　1:60　3m

第35図　遺構実測図(17)



第36図　遺構実測図(18)



SD2014
1．10YR2/3黒褐色シルトに7.5YR4/4褐色シルトがブロック状に混入。
2．7.5YR4/4褐色シルト（Hhill）

SD2021
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト
2．7.5YR4/4褐色シルト（Hhill）

SP2023・SD2011
1．10YR2/1黒色シルト
2．10YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがブロック状に混入。
3．10YR3/4暗色シルトに10YR4/6褐色シルトが小粒状に混入。
4．10YR2/2黒褐色砂質シルトが7.5YR4/4褐色シルトがまだら状に混入。
5．10YR2/2黒褐色シルト
6．7.5YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがブロック状に混入。

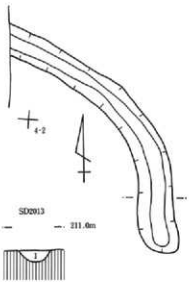
SD2014・SD2021・SD2011
1．10YR2/2黒褐色砂質シルトに7.5YR4/4褐色シルトが粒状に混入。
2．10YR3/4暗褐色砂質シルトに7.5YR4/4褐色シルトがブロック状に混入。
3．7.5YR4/4褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトが粒状に混入。
4．10YR2/2黒褐色砂質シルトに7.5YR4/4褐色シルトが粒状に混入。
5．7.5YR4/4褐色シルトに10YR3/3暗褐色シルトがブロック状に混入。
6．10YR2/2黒褐色シルトに7.5YR4/4褐色シルトがブロック状に混入。

SH2077・SD2021・SD2014
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト
2．10YR2/2黒褐色砂質シルトに7.5YR4/4褐色シルトが少量小粒状に混入。
3．10YR2/1黒色シルトに7.5YR4/4褐色シルトがまだら状に混入。
4．10YR2/2黒褐色砂質シルトに7.5YR4/6褐色シルトが少量まだら状に混入。
5．7.5YR4/4褐色シルトに10YR2/1黒色シルトがブロック状に混入。
6．10YR2/2黒褐色砂質シルト

遺構平面図 0 1:80 4m
遺構断面図 0 1:40 2m

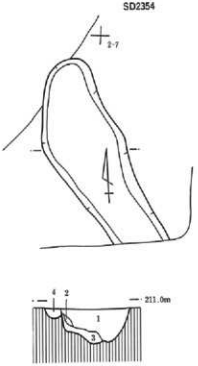
第37図　遺構実測図(19)

SD2013



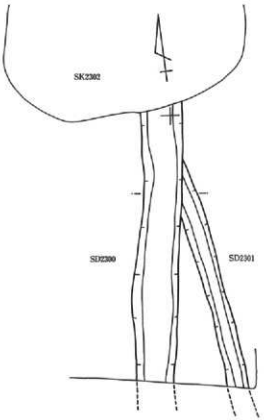
SD2013
1．10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入。

SD2354



SD2354
1．10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/3灰褐色砂質シルトが斑状に混入。
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
3．10YR4/6褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
4．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色砂質シルトが斑状に混入。

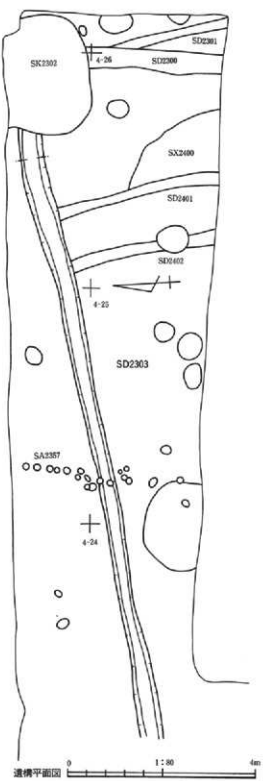
SD2300,SD2301



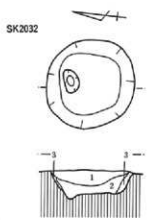
SD2300・2301
1．10YR2/3黒褐色砂質シルト
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
3．10YR3/4暗褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトが大ブロック状に混入。

遺構平面図・断面図 0 1:40 2m

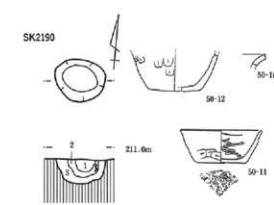
第38図　遺構実測図(20)



SD2303
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトが粒状に混入。
3．10YR2/2黒褐色シルト



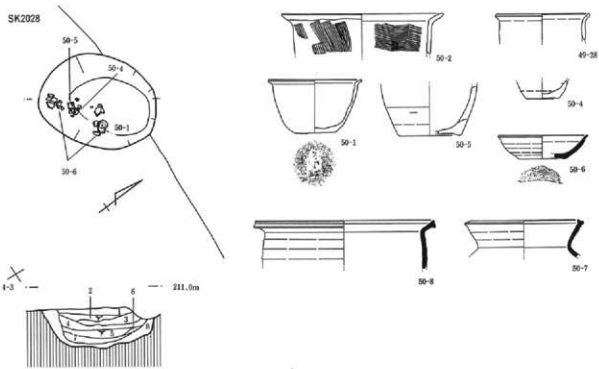
SK2032
1．10YR2/1黒褐色シルトに2.5YR5/8明褐色砂質シルトが粒状に混入。
2．10YR2/1黒色シルトに10YR4/6褐色砂が少量小粒状に混入。
3．10YR2/1黒色シルトに10YR4/4褐色シルトがブロック状に混入。



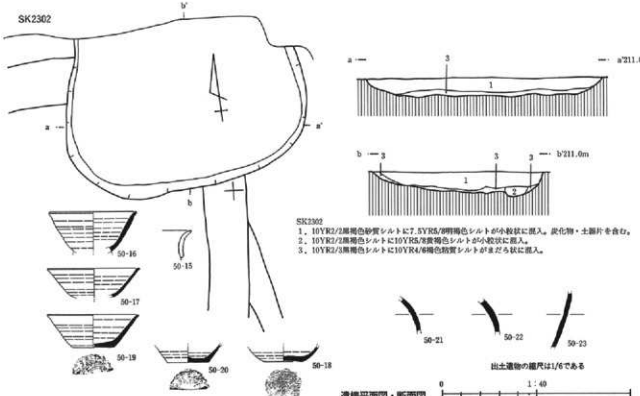
SK2190
1．7.5YR2/3極暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状、5YR5/8
明赤褐色シルト（焼土）がブロック状に多量に混入。土師片・炭化物を含む。
2．10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが粒状に混入。土師片・炭化物を含む。
3．10YR3/6黄褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトがまだら状に混入。

出土遺物の縮尺は1/6である

第39図　遺構実測図(21)



SK2028
1．10YR2/1黒色シルトに10YR4/6褐色シルトがまだら状に混入する。土器片を含む。
2．10YR2/2黒褐色砂質シルト。土器片を含む。
3．10YR4/6褐色シルトに10YR2/2黒褐色砂質シルトがブロック状に混入する。土器片を含む。
4．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色砂ﾚﾝｽﾞ状に混入する。土器片を含む。
5．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂質シルトがブロック状に混入。
6．10YR4/4褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトがまだら状に混入。
7．10YR4/4褐色シルトに10YR2/3黒褐色シルトが粒状に混入。
8．7.5YR3/4暗褐色シルトに10YR2/1黒褐色シルトがまだら状に少量混入。



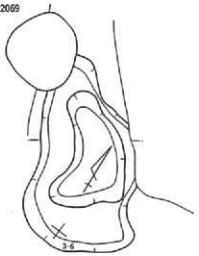
SK2302
1．10YR2/2黒褐色砂質シルトに7.5YR5/8明褐色シルトが小粒状に混入。炭化物・土器片を含む。
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/8黄褐色シルトが小粒状に混入。
3．10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色粘質シルトがまだら状に混入。

出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図　0　1:40

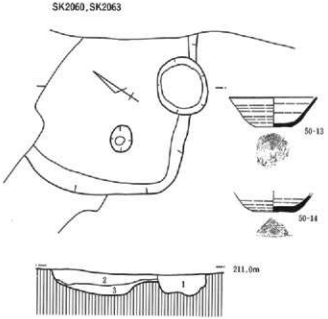
第40図　遺構実測図(22)

SK2069



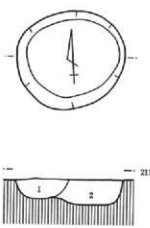
SK2069
1．10YR2/2黒褐色シルト
2．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトがまだら状に混入する。
3．10YR3/4暗褐色シルト質砂
4．10YR3/4暗褐色シルト質砂に10YR4/6褐色シルトがまだら状に混入。
5．10YR4/4褐色シルト質砂
6．10YR2/1黒色シルト
7．10YR4/4褐色シルト質砂

SK2060，SK2063



SK2060・2063
1．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが細粒状に混入。
2．10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR5/8明黄褐色シルトがブロック状に混入。
3．10YR2/2暗褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。

SK2237



SK2237
1．10YR2/3黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトがブロック状。
10YR5/6黄褐色砂質シルトが小粒状に混入。炭化物を含む。硬くしまる。
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂質シルトが小粒状に混入。炭化物を少量含む。

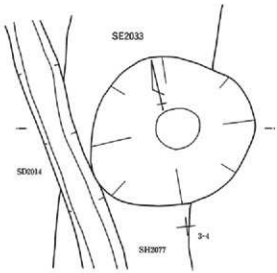
SK2238

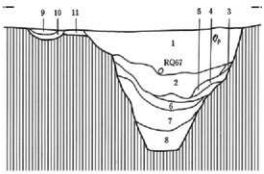
SK2238
1．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR5/6黄褐色シルト質砂が小粒状に混入。土器片・炭化物・焼土を含む。
2．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR5/6黄褐色シルト質砂が粒状に混入。土器片・炭化物・焼土を少量に含む。
3．10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/8褐色シルト質砂がらブロック状に混入。炭化物・焼土を少量に含む。

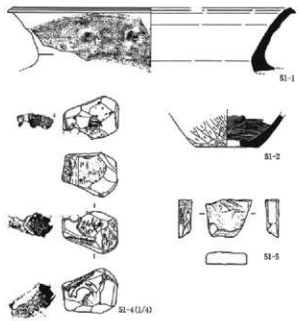
出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図　0　1：40　2m

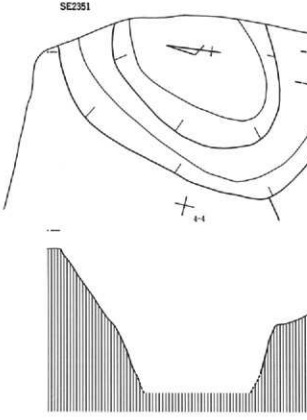
第41図　遺構実測図(23)

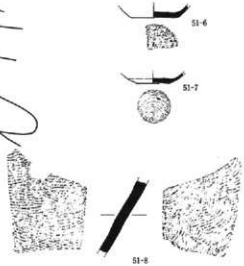






SE2033
1．10YR2/1黒色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトが粒状に少量混入。土器片を含む。最下層より抜刻痕。
2．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトが粒状に混入。
3．10YR3/4暗褐色シルト
4．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトが小粒状に混入。
5．10YR5/6黄褐色シルトに10YR2/1黒色シルトがブロック状に少量混入。
6．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトがブロック状に混入。
7．10YR2/2黒褐色シルト
8．10YR2/1黒色粘質シルト
9．10YR2/3黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルトが小粒状に混入。
10．7.5YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがブロック状に混入。
11．7.5YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトが小ブロック状に混入。



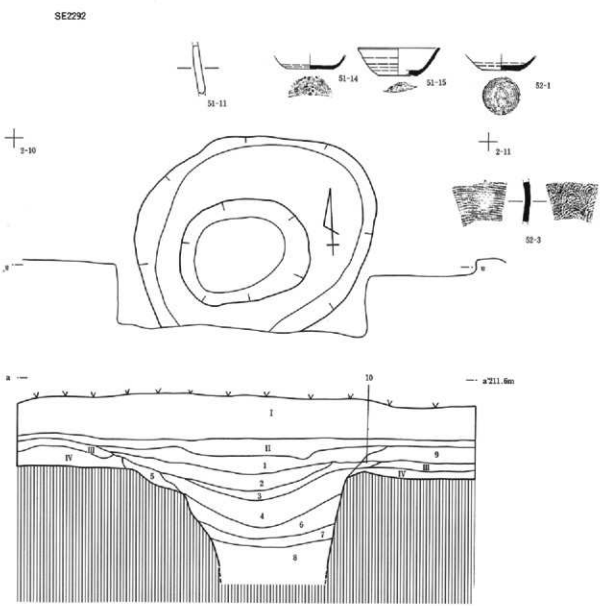


出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図
エレベーション図

0　1：40　2m

第42図　遺構実測図(24)

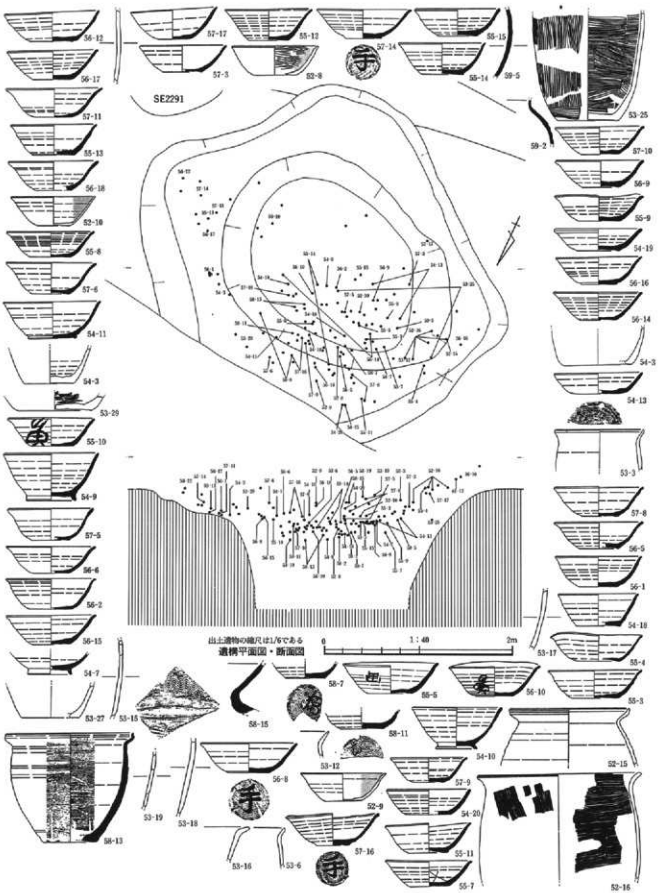


SE2292
Ⅰ．10YR3/3暗褐色砂質シルト。炭化物・土器細片を含む。（耕作土）
Ⅱ．10YR3/3黒褐色砂質シルト。土器片を含む。
Ⅲ．10YR4/6褐色シルトに10YR2/4暗褐色シルト質砂がまだら状に混入。
Ⅳ．7.5YR5/8明褐色シルト
1．10YR2/1黒色シルト
2．10YR2/1黒色シルトに10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入。
3．10YR1.7/1黒色シルト。炭化物を含む。
4．10YR2/1黒色シルトに10YR5/8黄褐色シルト質砂が小粒状に少量混入。土器片を含む。
5．10YR2/2黒褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルト質砂がブロック状に混入。炭化物を含む。
6．10YR2/1黒色粘質シルトに10YR4/6褐色砂が粒状に少量混入。
7．10YR2/1黒色粘質シルトに10YR5/8黄褐色粘質シルトが下部に帯状に混入。
8．2.5Y2/1黒褐色粘質シルト
9．10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂が小粒状に少量混入。土器片を含む。（SG2155覆土）
10．10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR4/6褐色シルト質砂がまだら状に混入。（SG2155掘土）

出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図・断面図　1：40　0　2m

第43図　遺構実測図(25)

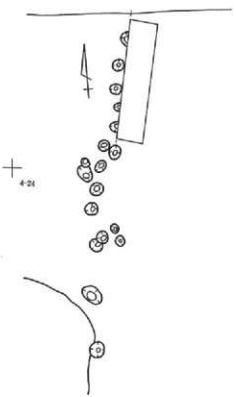


第44図　遺構実測図(26)

SK2239

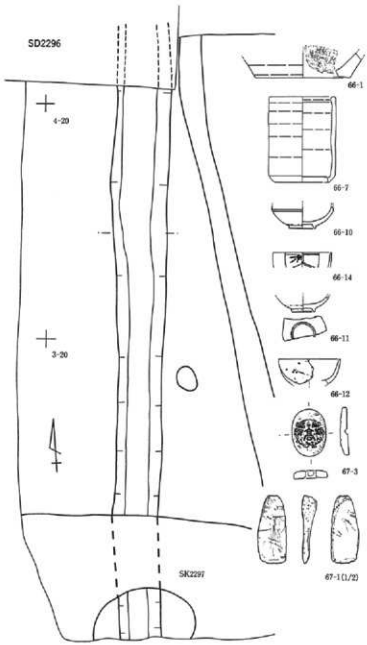
SK2239
1．10YR2/1黒色シルトに10YR4/4褐色シルトがブロック状に少量混入。
2．10YR1.7/1黒色シルト。炭化物を少量に含む。
3．10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトがブロック状に混入。
炭化物を少量含む。

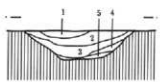
SA2357



SA2357
1．10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトがブロック状に混入。
2．10YR4/4褐色シルト（地山）

SD2296





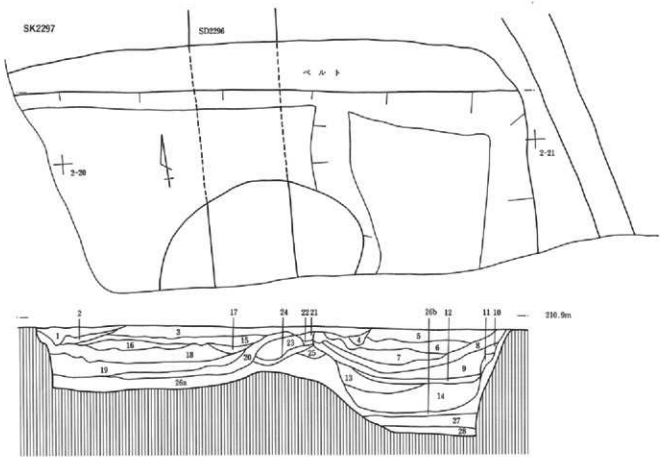
SK2296
1．10YR3/2黒褐色シルト質砂
2．10YR3/1黒褐色シルト質砂に10YR4/4褐色シルトが斑状に混入。
3．10YR3/2黒褐色砂質シルトに10YR5/8黄褐色砂質シルトがブロック状に混入。
4．10YR4/3にぶい黄褐色シルト質砂
5．7.5GY4/1暗緑灰色粘土

出土遺物の縮尺は1/6である

遺構平面図 0 1:80 4m

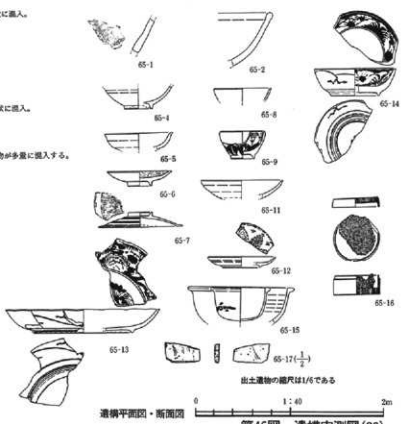
遺構平面図・断面図 0 1:40 2m

第45図　遺構実測図(27)

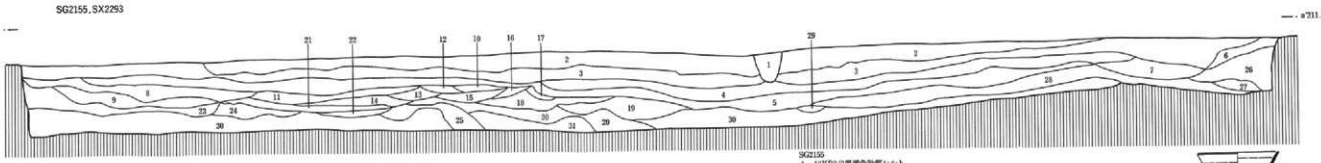


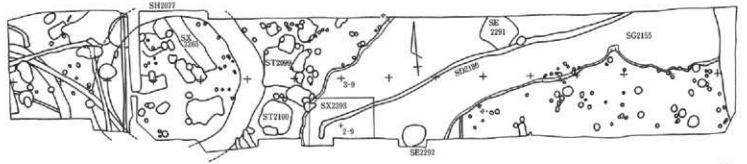
SK2297

1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂に10YR4/2灰褐色シルト質砂がブロック状に混入。
2. 10YR3/2黒褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
4. 10YR4/2灰黄褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
5. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
6. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
7. 10YR3/1黒褐色砂質シルト
8. 10YR2/2黒褐色シルト
9. 10YR3/2黒褐色シルト
10. 10YR3/3暗褐色砂質シルト。酸化鉄が粒状に混入。
11. 10YR2/2黒褐色砂質シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトがまだら状に混入。
12. 2.5Y4/1黄灰色シルト
13. 2.5Y3/1黒褐色シルト
14. 2.5Y3/1黒褐色シルトに7.5Y4/1灰色粘土が一部混入する。
15. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
16. 10YR3/2黒褐色砂質シルト。酸化鉄がまだら状に混入する。炭化物が多量に混入する。
17. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（SD2296埋土）
18. 10YR3/1黒褐色シルト
19. 10YR2/2黒褐色シルト。木炭が多量に混入。
20. 7.5Y4/1灰色粘土
21. 2.5Y5/3暗灰黄色シルト質砂。酸化鉄が粒状に少量混入。
22. 10YR4/2灰黄褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に混入。
23. 2.5Y5/3黄褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に混入。
24. 10YR2/2黒褐色砂質シルト。酸化鉄がまだら状に少量混入。
25. 2.5Y5/3黄褐色シルト質砂。酸化鉄が粒状に混入。
26a. 10YR5/6黄褐色砂質シルト
26b. 7.5GY4/1暗緑灰色粘土
27. 10YR2/1黒色粘土
28. 7.5GY4/1暗緑灰色粘土



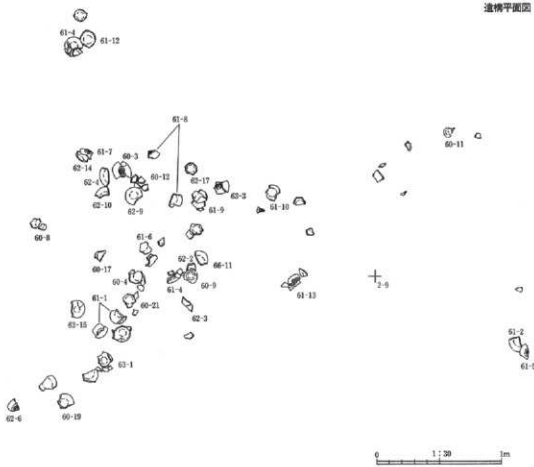
第46図　遺構実測図(28)





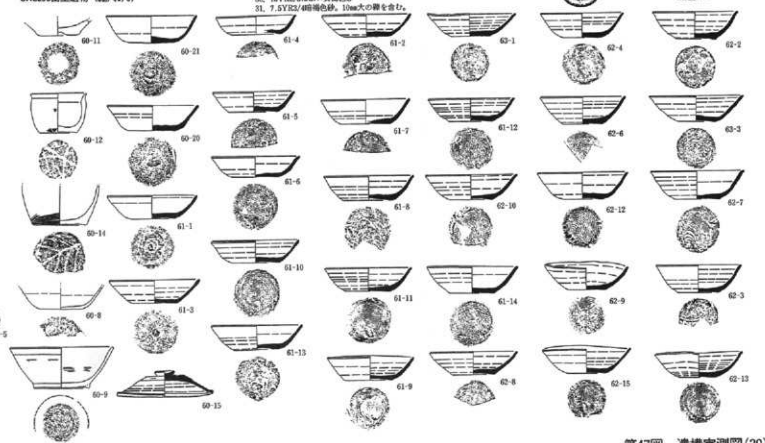
SG2155
1. 10YR2/2黒褐色砂質シルト
2. 10YR2/3黒褐色シルト
3. 10YR3/3暗褐色シルト
4. 10YR4/4褐色砂質シルト
5. 10YR5/6黄褐色シルト質砂
6. 7.5YR5/6明褐色砂質シルトに7.5YR4/6褐色シルトが粒状に混入。
7. 7.5YR5/6明褐色シルト質砂に5YR4/6砂褐色砂が粒状に混入。
8. 10YR5/8褐色シルトに7.5YR5/8明褐色シルト、10YR2/1黒色シルトが細粒状に混入。
9. 10YR4/4褐色砂
10. 10YR4/4褐色粘質細砂に10YR2/2黒褐色シルトが大粒状に混入。
11. 10YR5/8黄褐色シルトに7.5YR5/6明褐色シルトが粒状に混入。
12. 7.5YR4/4褐色粗砂
13. 7.5YR4/6褐色粗砂
14. 7.5YR4/6褐色砂質シルトに7.5YR4/3褐色細砂がまだら状に混入。
15. 7.5YR3/3暗褐色粗砂
16. 7.5YR4/6褐色シルト質粗砂
17. 10YR3/4暗褐色シルト質粗砂
18. 7.5YR4/4褐色粗砂質シルト
19. 10YR4/4褐色シルト質砂
20. 10YR3/3にぶい黄褐色粗砂
21. 7.5YR4/4褐色砂質シルト
22. 7.5YR4/6褐色細砂。20～30mm大の礫を含む。
23. 10YR4/4褐色シルト質砂
24. 7.5YR4/4褐色砂
25. 7.5YR3/4暗褐色細砂。20～30mm大の礫を含む。
26. 10YR4/6褐色シルトに7.5YR5/8明褐色シルトが粒状に混入。
27. 7.5YR4/4褐色シルト質砂
28. 7.5YR4/6褐色シルト質砂
29. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質粘土
30. 10YR5/3にぶい黄褐色砂
31. 7.5YR2/4暗褐色砂。10mm大の礫を含む。

SX2293遺物出土状況



遺構断面図 0 1:40 2m
遺構平面図 0 1:400 20m

SX2293出土遺物（縮尺1/6）



第47図　遺構実測図(29)

3　出土した遺物

1）古墳時代

古墳時代の遺物は、ＳＸ2065・ＳＨ2077周溝及び５区から出土している。器種は土師器高坏・小型丸底鉢・壷・甕、須恵器甕がある。以下個別に概要を述べる。

土師器

古式土師器は、ＳＸ2065・ＳＨ2077周溝など５区内の遺構から出土している。小型丸底鉢(49-1)はＳＸ2065から出土した。口径88㎜底径22㎜器高70㎜を測り、球形の体部から口縁部が僅かに内弯気味に伸び底部が僅かに窪み上げ底状を呈する。胎土は緻密で内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。辻秀人氏の土器編年(1995)によれば、器形及び器面調整の特徴から鉢A3類と考えられⅡ-2期に当てられる。塩釜式にすれば第２期に該当するとされるものである。１次調査で出土した土師器壷(18-1)とほぼ同時期とすることができる。壷(48-2)はＳＨ2077周溝からの出土である。口頸部のみの出土で全形は不明であるが、体部は球形を呈すると推定される。頸部径120㎜を測り、口頸部が直線的に外反している。胎土は細砂が混入している。器面調整は剥離が激しく不明である。前出辻氏編年によれば壷Ｉ2類と考えられ塩釜式Ⅲ-3期に該当する。他は、小壷(49-2)、壷体部(49-4・5)、甕(48-4・49-3)がある。いずれも破片での出土であるが、49-4の壷体部には剥離が激しいものの、外面にわずかに赤彩痕跡が確認することができる。高坏は脚部のみの出土である。ＳＨ2077周溝とＳＤ2180から各１点出土した。いずれも中実棒状の脚部を持つが、坏部と脚部が欠損しているため全形は不明である。前出辻氏編年によれば、高坏Ｆ類或いはＨ類の可能性があり、塩釜式第Ⅲ期に普遍的に見ることができる。

須恵器

須恵器は、ＳＨ2077周溝から出土した甕(48-7)１点のみの出土である。口縁部は頸部基部から欠損しているが体部は３分の２ほど遺存している。頸部基部径は43㎜、胴径は124㎜を測る。体部ほぼ中央にヘラ状工具により幅１～２㎜程の突帯が上下２条削り出され、その間に８～９条１単位の櫛描波状文が一条、極めて整然と丁寧に施文されている。櫛描波状文部分に径13㎜の小孔が１つ穿たれている。体部下半は手持ちヘラケズリの後ナデ調整が施されている。底部内面はあて具によると考えられる痕跡が残る。外面肩部と底部内面に自然釉がかかり正位で焼成されたと理解される。やや焼成が甘いが丁寧な造りの優品である。京都造形芸術大学田辺昭三教授によれば、須恵器の定型化(日本化)に移り変わる過渡期、また肩部に稜が出現するようになる過渡期にあたり、大阪府陶邑窯編年ではＯＮ46～ＴＫ208の時期とのことであった。山形県内出土須恵器甕では最古級の部類に入る可能性がある。

2）平安時代

平安時代の遺物は、２次調査区のほぼ全域で出土しているが一部の遺構からの出土が突出している。中でもＳＥ2291からの出土が際だって多く２次調査出土遺物の約３割を占めており、143点図示している。次いで、ＳＧ2155河川跡内のＳＸ2293からの出土も多く51点図示している。出土遺物は、黒色土器・土師器・須恵器等の土器類がほとんどであるが、刻字のある砥石状石製品１点など特異なものも含まれる。以下、種別毎に概括する。

黒色土器

黒色土器の出土量は、全出土遺物数の1％にも満たず主体とはならない。13点図示しているが、SE2291から出土したものが7点を占めている。器種は坏などの供膳形態が主体となる。

主体となる黒色土器(内面黒色処理)の坏には無高台と高台付が存在し、いずれも内面はヘラミガキが施されている。無高台の坏は非ロクロ成形とロクロ成形が見られる。非ロクロ成形の坏は1点(50-11)図示した。SK2190の覆土中からの出土である。口径130㎜、底径77㎜、器高52㎜を測る。口径に比して底部が大きく体部が直線的に伸び、口縁端部で指押さえの痕跡と考えられる僅かな窪みが観察される。体部外面下半に手持ちヘラケズリ後、体部全面にナデ調整が施されたと考えられる。内面は、細く短いスパンのヘラミガキが丁寧に施されている。二次加熱のためか黒色化部分はかなりとんでいる。埦(48-1)としたものは底部に木葉痕が明瞭に残り、体部下端に手持ちヘラケズリが施される。ロクロ成形の坏(52-8～11)はSE2291の覆土中からの出土である。いずれも口径に比して底径が小さく器高が高くなるもので、口縁端部が小さく外傾する。底部切り離しは回転糸切である。それらのうち52-11は、体部下端に回転ヘラケズリが施され外面には赤彩の痕跡が残る。底部には欠損のため判読不可能であるが墨書されている。高台付はすべてロクロ成形である。底径が小さく断面台形の高台が貼り付けられるもの(52-4･7)がありSE2291の覆土中からの出土である。埦(60-9)としたものは、大型で器高が高く断面三角形の高台が貼り付けられるもので、体部外面と底部は回転ヘラケズリが施されている。黒色土器(内外面黒色処理)の坏にはロクロ成形の無高台と高台付が存在し、内外面ともヘラミガキが施される。無高台の坏(63-9)は口径132㎜、底径74㎜、器高47㎜を測り、体部が直線的に立ち上がるもので、底部は回転ヘラケズリである。二次加熱を受けて表面はかなり痛んでいる。高台付はSE2291の覆土中から出土したもの1点(52-6)を図示した。口径132㎜、底径70㎜、器高49㎜を測り体部が直線的に立ち上がる。削り出しによって極小さな高台を作り出したもので、底部切り離しは回転糸切である。

土師器

土師器は全出土量のおよそ4割を占めており主体となる。調査区の全域、特に5～6区の井戸跡・土壙などの遺構内から多く出土している。器種は坏・甕等である。坏には無高台と高台付がある。いずれもすべてロクロを使用し酸化焔焼成である。これらは山形県内においては赤焼土器と称されてきた土器の一群に属するものである。赤焼土器の概念規定については、佐藤庄一氏が「ロクロや叩きによる整形など技術的に須恵器の技法を用いながら意図的に酸化焔焼成を行っているもの」とし、器種に関しては坏・皿のみならず埦・甕までを含めている(『新青渡遺跡第1次調査発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第67集1983)。一般的には、須恵器の技法を用い底部回転糸切無調整の酸化焔焼成の赤褐色を呈する土器と理解されてきた。しかし、東北地方全体を見渡せば赤焼土器類似の土器の一群を「須恵系土器」、「赤褐色土器」、「土師質土器」などと呼称し、概念が微妙に異なっている。また、近年の発掘調査では、庄内地方でロクロを使用し底部回転ヘラ切りで酸化焔焼成されるものや、ロクロを使用し底部回転糸切で体部に回転ヘラケズリ調整が施され内弯気味に立ち上がる小振りな土器が出土して

いる。鶴岡市西谷地遺跡第3次調査でまとまって出土しており「酸化焔土器」と仮称している。遊佐町北目長田遺跡・上高田遺跡などでも類似の土器が出土している。このように、いわゆる赤焼土器に関しては地域或いは研究者によって見解が分かれているのが現状である。本報告書では、赤焼土器を土師器の一類型として便宜上取り扱うこととする。

無高台の坏は48-19、59-9などがある。48-19は口径146㎜、底径63㎜、器高51㎜、59-9は口径146㎜、底径60㎜、器高49㎜とほぼ同じサイズを測る。いずれも底部切り離しは回転糸切で、無調整である。胎土は粗砂が混入し、体部にはロクロ痕が明瞭に残り歪みが大きいものがほとんどである。高台付は、48-18の1点を図示した。底部破片のみの出土であり全形は不明である。高台は貼り付け高台で回転糸切痕跡を明瞭に残す。出土数は極少なく、供膳形態の主体を成している当該時期の庄内地方とは様相を異にする。

甕は、調査区全域で一定量出土し主体を成している。SE2291からは、300点ほど出土し群を抜いている。いずれも破片での出土であり全形を知りうるものはない。非ロクロ成形で、口径260㎜内外を測り、外面は縦位のハケメ調整、内面は横位のハケメ調整が施され口縁部が最大径を有するもの(50-2、52-16等)、体部外面に手持ちヘラケズリ調整内面に横位のハケメ調整が施されるもの(54-1等)、体部に最大径を有するもの(52-12・14・15・17)等が見られる。主体となるのはロクロ成形で体部内外面にナデ調整や内面にハケメ調整が施されるものである。口縁部形態は多様な形状を持つが、非ロクロ成形の甕の口縁部は強く外反するもののみである。ロクロ成形の甕の口縁部には、強く外反するもの、外反の度合いがやや弱いもの、外反の後口縁端部が直立気味に立つもの、外反の後口縁端部が薄く摘み出されるもの、外反し口縁端部が玉縁状を呈するものなどが見られる。底部形状は、木葉痕が明瞭に残るもの、網代痕を残すもの、布目痕が残るもの、回転糸切痕が残るもの等が見られる。それぞれの組み合わせと法量等から分類が可能である。他には、鳩(59-8)や底部回転ヘラ切りと考えられる小甕(50-1)、底部に木葉痕が残る小甕(60-12)等が有り、いずれも二次加熱を受けている。60-12と似るものに、米沢市荒川2遺跡SK115出土の小型甕がある。調査者は供伴する須恵器などから9世紀第1四半期から第2四半期としている。

須恵器

須恵器は、全出土量の25%を占めている。また、出土状況は土師器とほぼ同様であるが、その32%がSE2291から、14%がSX2293からの出土であり突出している。器種は、坏・高台付坏・蓋・甕・壷等がある。

坏には、底部切り離しが回転ヘラ切りと回転糸切が見られ、いずれも無調整である。回転ヘラ切りの坏には、①口径に比して底径が大きく体部が緩やかに立ち上がり丸底風になるもの、②口径に比して底径が大きく体部が直線的に立ち上がるもの、③口径に比して底径がやや小さく体部が内弯気味に立ち上がるもの、④③と同様であるが体部の立ち上がりがシャープなもの、⑤口径に比して底径が大きく体部が緩やかに立ち上がり口縁端部がやや外反し器高が低いもの等のタイプがある。回転糸切の坏には、⑥口径に比して底径が大きく器高が低くヘラ切り坏にプロフィールが似るもの、⑦口径に比して底径がやや大きく器高がやや低いもの、⑧口径に比

して底径が小さく器高がやや低いもの、⑨口径に比して底径が大きく体部の立ち上がりがシャープなもの、⑩口径に比して底径がやや小さく器高が高いもの、⑪口径に比して底径が小さく器高が高いもの等がある。法量の大小・体部内弯度・口縁端部形状などにより細分化することが可能である。これらの中で54-19の坏は、体部が厚く口縁端部が外側に折り返され玉縁状を呈し胎土には海綿骨針を多く含んでいる。類似するものは他になく移入品と考えられる。また、ＳＥ2291から出土する墨書土器は、⑨・⑩・⑪に集中する傾向が看取される。

高台付坏には、①体部下半にナデ調整による緩やかな稜を形成し体部上半から直線的に立ち上がり稜境の新しいタイプと考えられるもの(60-16)、②口径に比して底径がやや小さく、体部が緩やかに立ち上がり外傾しつつ直線的に伸び器高がやや低いもの(60-17等)、③口径に比して底径が小さく体部が内弯しながら立ち上がり器高が高いもの(54-9等)があり、すべて回転糸切痕を明瞭に残す。貼り付け・削り出し・高台形状・口縁部形状等で細分が可能である。

さらに、巻末に須恵器坏・高台付坏についてＳＸ2293とＳＥ2291出土土器のみではあるが分類を試み、合わせて組成を示した。

甕は、破片による出土がほとんどで、かつ出土数が少ない。①天井部及び肩部が回転ヘラケズリされるものと②天井部に回転糸切痕を明瞭に残し肩部を回転ヘラケズリ調整するものに分けられる。①には広い天井部を持ち器高がやや低く口縁端部が垂直に摘み出されるもの(49-16)等があり、②には狭い天井部を持ち器高が高く体部が直線的に伸びるもの(60-15)や扁平な体部を持つもの(63-10)等がある。

甕は、ほとんど破片での出土であり全形を知りうる物は僅かであるが、口縁部に櫛描波状文が巡るものや体部に沈線が巡るものなども見られる。58-13は、ＳＥ2291の遺物出土層最下部付近から出土した土器の一つである。口径200㎜、底径96㎜、器高173㎜を測り口縁部は外反の後短く直立する。体部内外面の全面にカキメが施される。体部外面は二次加熱の痕跡が確認されるが、何らかの祭祀に使用された痕跡であり、使用中あるいは使用後意図的に破壊された後、投棄されたと考えたい。

壺は、破片による出土のみであり全形を知り得ない。短頸壺と長頸壺があるが短頸壺が凌駕する。体部には外面下半に回転あるいは手持ちのヘラケズリ調整が施され、上半と内面には平行にハケメあるいはカキメが施されるものが多い傾向が看取される。

他には、双耳坏の摘みなども出土している。

3)近世以降

近世以降の陶磁器は、調査区全域から出土するが、ほとんどが耕作土中からの出土である。ここでは明治期に起こった二度の大火時の廃棄土壙と考えられるＳＫ2297と、現道の旧側溝と考えられるＳＤ2296から出土した遺物について報告する。両遺構は重複関係があり、ＳＤ2296がＳＫ2297よりも新しい。

ＳＫ2297(第65図)　磁器25点、陶器12点、石製品１点、ガラス製品２点が出土している。その他計量できないものとして木製品や多量の炭化物が出土している。

１～７は陶器である。１は無釉の擂鉢である。内面は摩滅している。２は鉢である。玉縁状

の口縁を呈する。胎土には白色の砂粒が多く混入する。３は甕である。内外面に淡青色釉が施される。外面は16㎜幅で釉を掻き取る。胎土は白色の砂粒が混入し２と類似するが、２に較べ色調がやや暗い。４は碗である。体部は内弯しながら立ち上がる。遺存部の上端部で段を持つ。５は皿である。内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反する。胎土は緻密である。６は皿である。外面に白色釉が施され、貫入が入る。内面には赤色漆が塗られる。畳付けには黒色漆が塗られる。７は蓋である。内面に水色釉が施される。外面は無釉だが、体部に錆釉で二重の圏線が描かれる。外面に飛鉋状の刻線が施される。８～15は磁器である。８～10は碗である。９は内弯しながら立ち上がり、口縁部がやや膨らむ。10は内弯しながら立ち上がり口縁部は外反する。外面に植物文が描かれる。内面には、口縁部付近に雷文が描かれ、底部に界線が描かれる。11～14は皿である。11は淡緑色釉が施され、体部下半は露胎となる。12は紙型刷りで文様が施される。13は端反りの輪花皿である。胎土は緻密だが、焼成が悪くやや軟質である。全面に貫入が入る。14は口唇部に鉄釉が施される。15は鉢である。口縁部が外側に張り出す。16は木製の合子である。炭化している。外面に漆の痕跡が見られる。墨状の内容物が遺存している。17は砥石である。淡緑色を呈する。

ＳＤ2296（第66図）　陶器15点、磁器９点、砥石２点、金属製品１点が出土している。

１～10は陶器である。１～３は擂鉢である。１・２は赤褐色を呈する。ともに内面は摩滅している。２は漆接ぎの痕跡が見られる。３は内外面に錆釉が施される。４は外面に丸ノミ状の工具による区画文が施される。花生と思われる。５は甕である。海鼠釉が施される。６は徳利状の器形を呈し、頸部に一対の取手が付く。漆接ぎ痕が見られ、内外面にも漆が付着する。７は花生と思われる。底部付近の稜線より下は露胎である。８は鉢と思われる。９・10は碗である。９は黄色の灰釉が施される。10は内弯しながら立ち上がり、遺存部分の上端で屈曲しやや内傾気味に立ち上がる。高台は露胎である。11～18は磁器である。11～16は碗である。17・18は皿である。17は見込みは蛇の目釉剝ぎで、高台部分も露胎となる。高台内に鉋削り痕が見られる。18は芙蓉手の大皿である。乳白色の釉が厚く施される。貫入が入る。内面に桃あるいは柘榴が描かれる。胎土は軟質である。１次調査ＳＤ382出土第27図21と接合したため、接合後の実測図を示した。67図１・２は砥石である。３は平成３年に統合され廃校となった山形県立赤湯園芸高校の校章が施された文鎮である。中央に紐通しの穴があけられる。溝の床面から出土している。

４）石器

石器は、調査区の東側４区を中心に極少量出土し、その内５点を図化している。遺構からの出土も見られるが流れ込みと考えられる。器種は、石鏃・石匙・削器・打製石斧・磨製石斧がある。以下、個別に概観する。

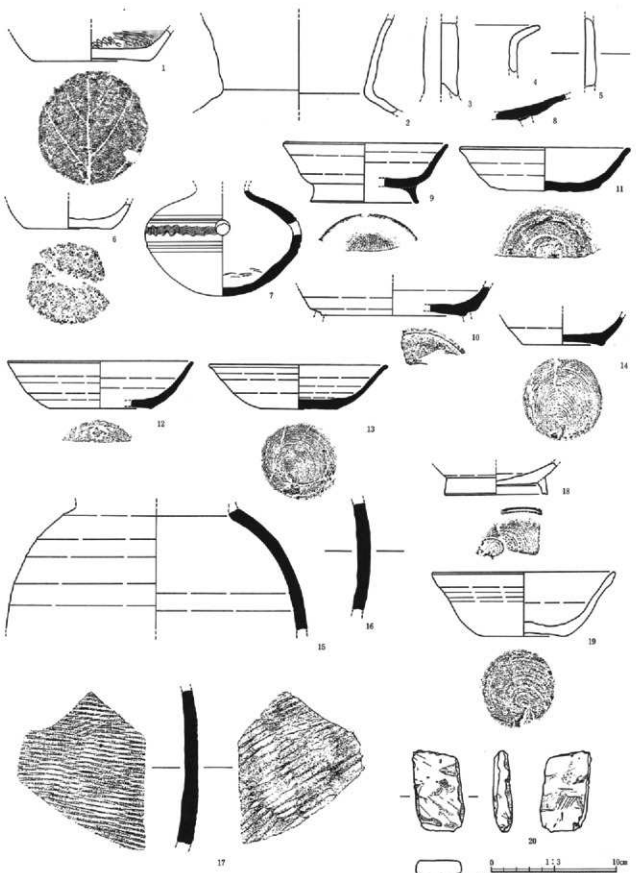
67-4は石鏃で４区の柱穴から出土した。基部側が直線状を呈するタイプである。67-5は４区から出土した石匙で左右非対称で左側縁が直線状をなし、右側縁が弧を描くタイプである。67-6は４区の土壙から出土した削器である。剝片の３辺に二次加工を施している。67-7は５区ＳＥ2291から出土した打製石斧である。刃部は両刃で、使用痕と考えられる磨滅が見られ挿図にスクリーントーンで示した。67-8は４区から出土した磨製石斧である。

5）石製品・その他の遺物

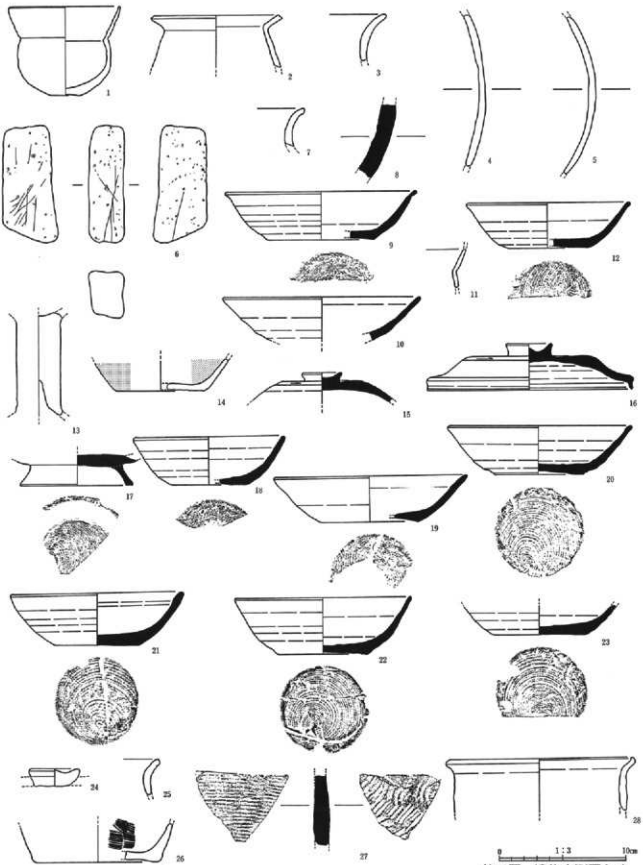
石製品には、10点の砥石があり7点が古代に属する。特筆されるのは、SE2033から出土した砥石状の石製品(51-4)である。全長59㎜、幅48㎜、厚さ42㎜を測り不整形である。上部には欠損しているが約7㎜の貫通孔が穿たれている。貫通孔には未完の孔も観察される。3面に線刻がみられる。1面目は直線を組み合わせたもので、3面目は曲線を組み合わせており動物様の図柄と考えることが出来る。2面目は文字様の図柄が線刻されており、国立歴史民俗博物館平川南教授によれば、「諱」の可能性が高いとのことである。山形県内ではこのような類例は少なく、庄内地方の酒田市上曽根遺跡SK5土壙から人面が線刻された砥石が出土しているのみで、刻字された例は現在のところ未確認である。井戸跡覆土中からの出土であり、何らかの祭祀、例えば井戸廃棄等に関わる可能性が高いと考えられる。

土製品には、製塩土器に類似するもの(53-24)がある。厚手で胎土は粗砂が混入している。輪積痕が観察され、外面は二次加熱される。SE2291から出土している。

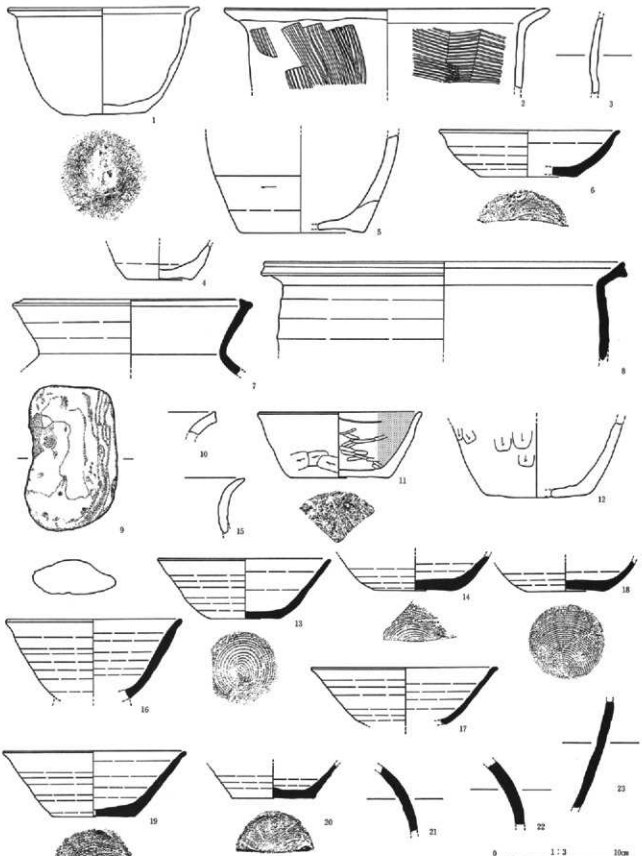
墨書土器は、22点出土している。内黒土器底部に墨書されるもの1点の他は、すべて須恵器の坏である。これらのうち21点96％がSE2291からの出土である。特定の遺構から墨書土器が集中して出土する事例は、類例が極めて少ない。字種は、判読可能なものでは「曽」、「手」、「良」、「福」、「持」、「宙カ」、「本」、「丈」の8種がある。詳細については、後述する。



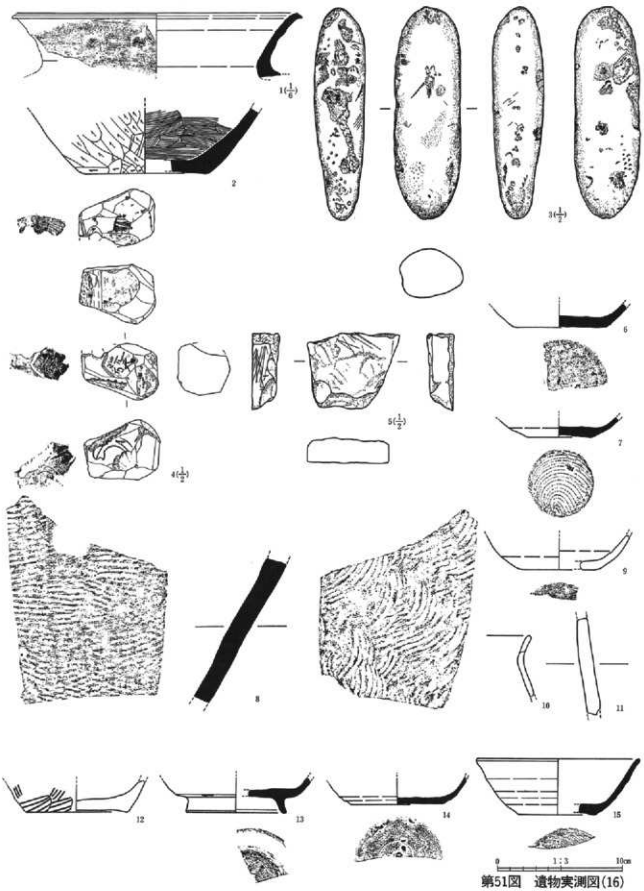
第48図　遺物実測図(13)



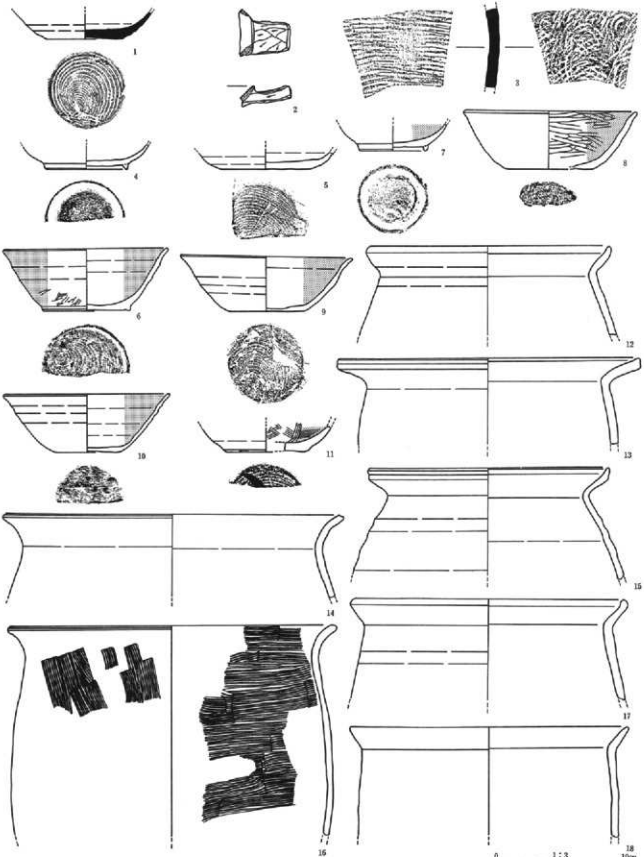
第49図　遺物実測図(14)



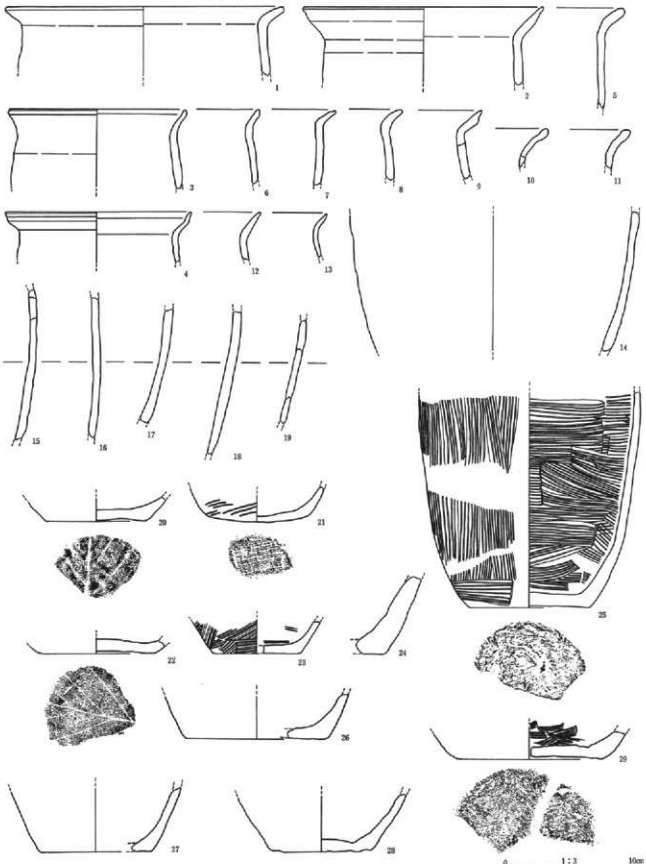
第50図　遺物実測図(15)



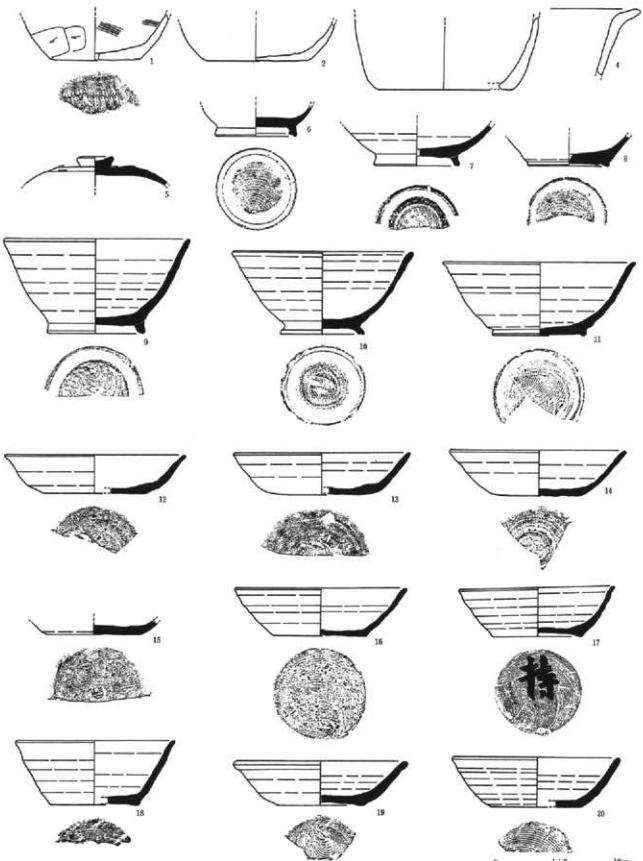
第51図　遺物実測図(16)



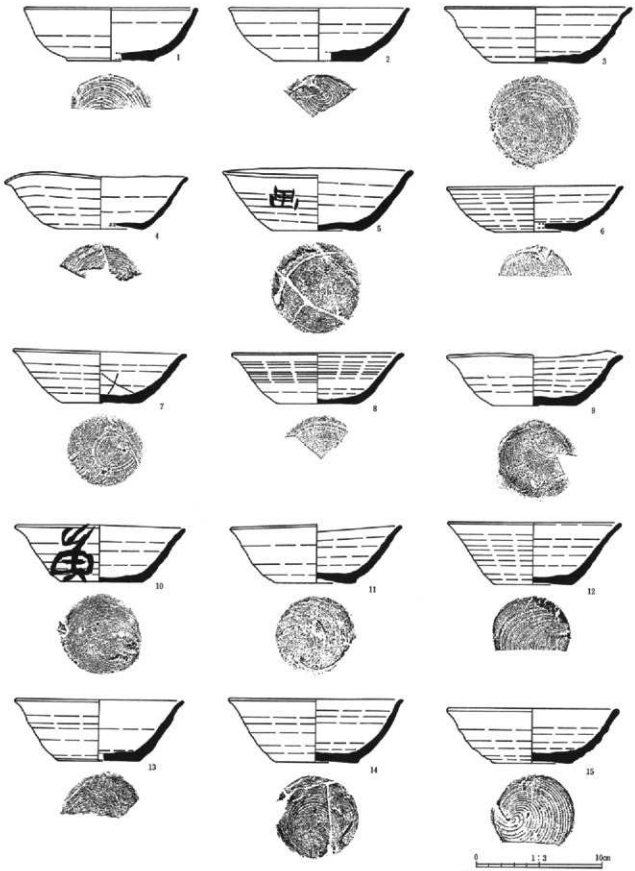
第52図　遺物実測図(17)



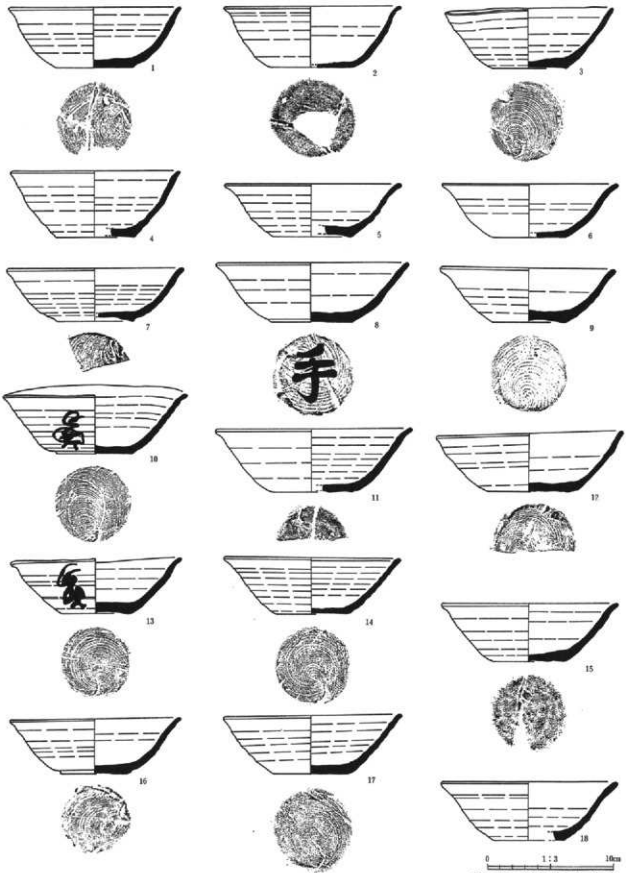
第53図　遺物実測図(18)



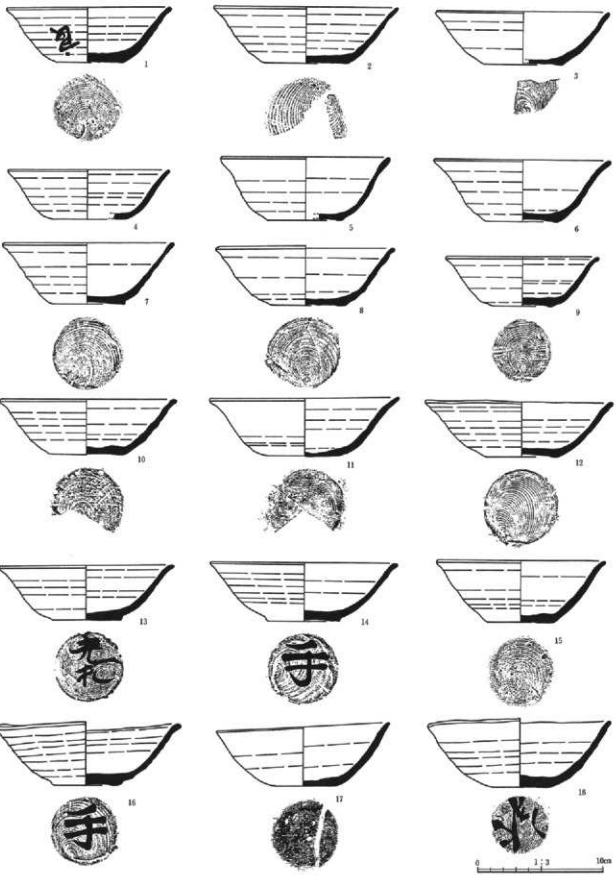
第54図　遺物実測図(19)



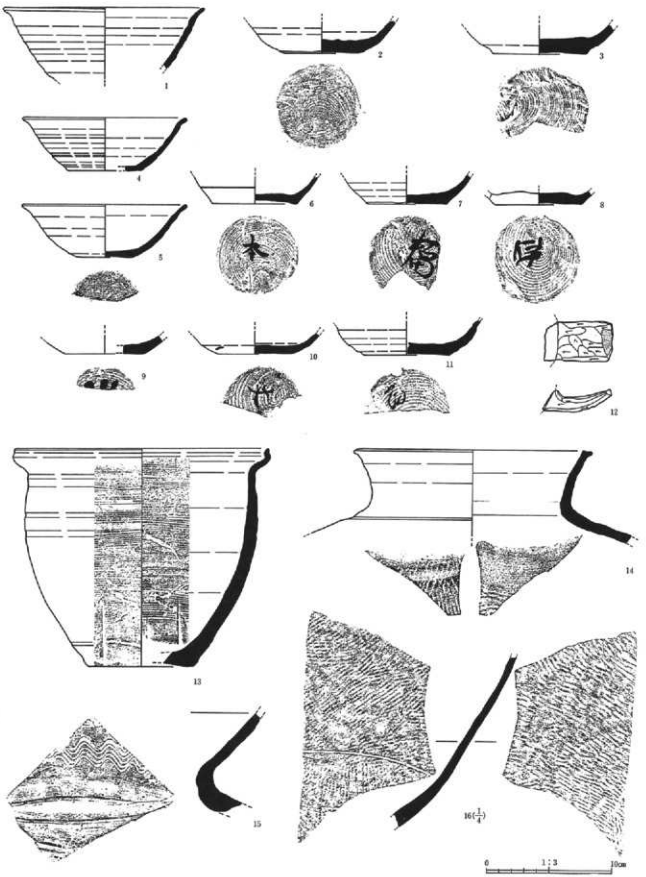
第55図　遺物実測図(20)



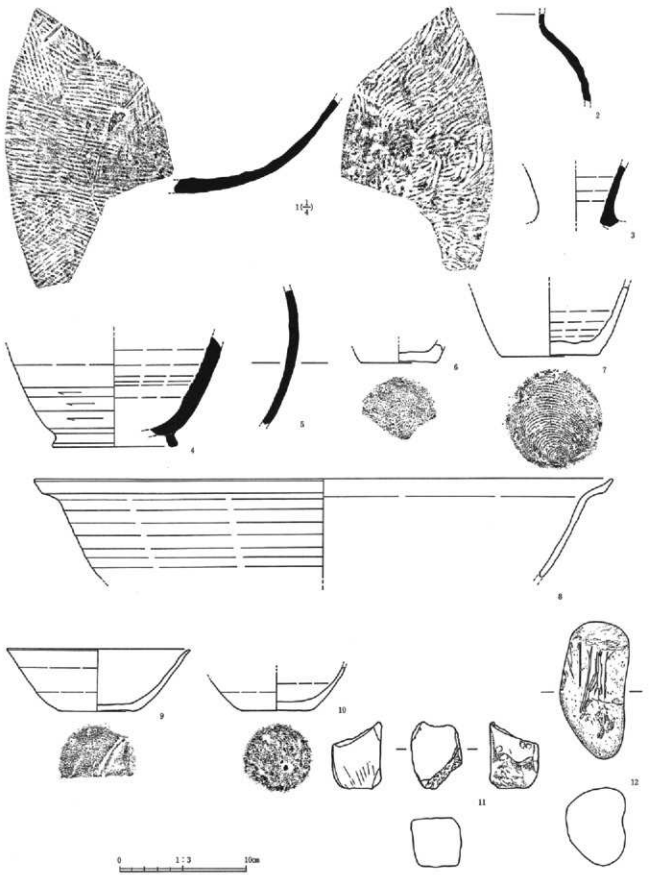
第56図　遺物実測図(21)



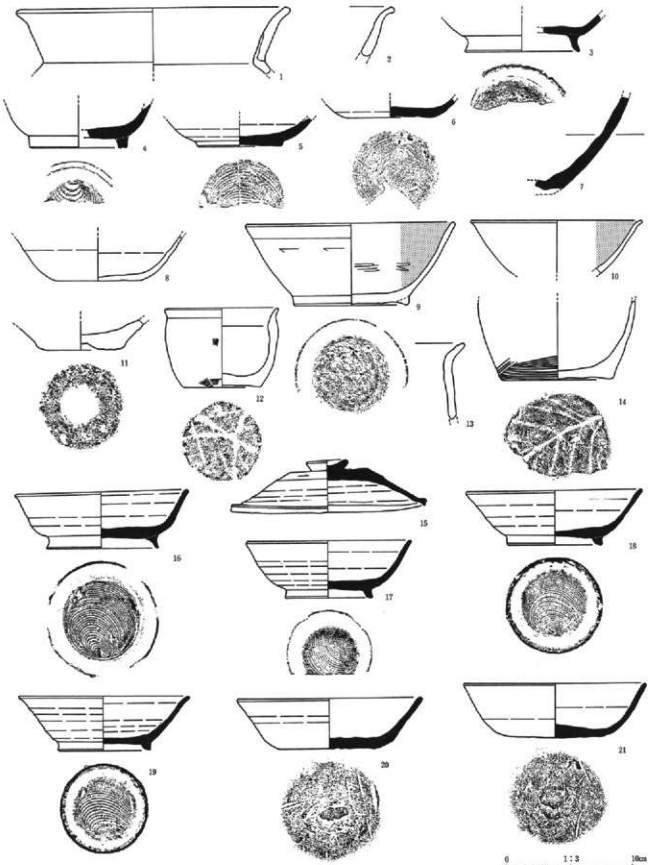
第57図　遺物実測図(22)



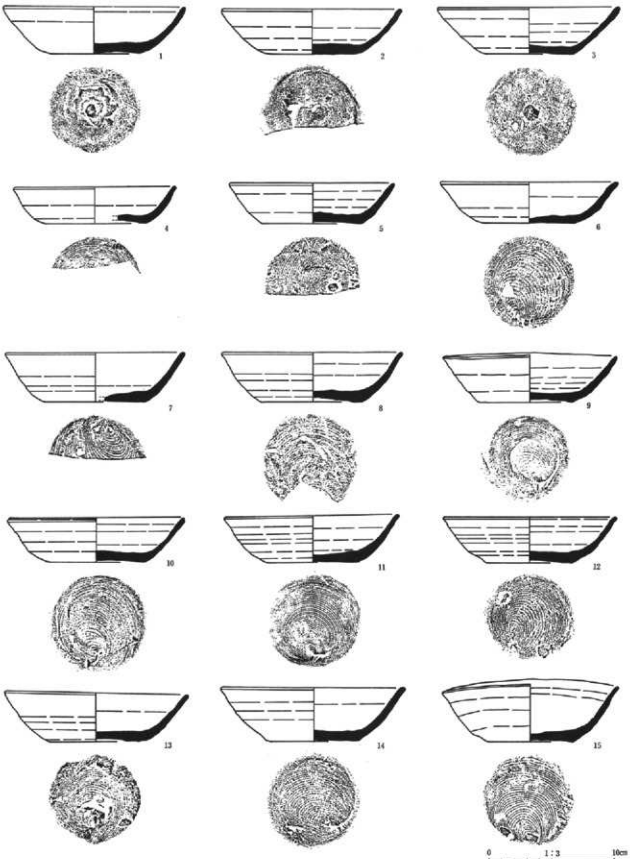
第58図　遺物実測図(23)



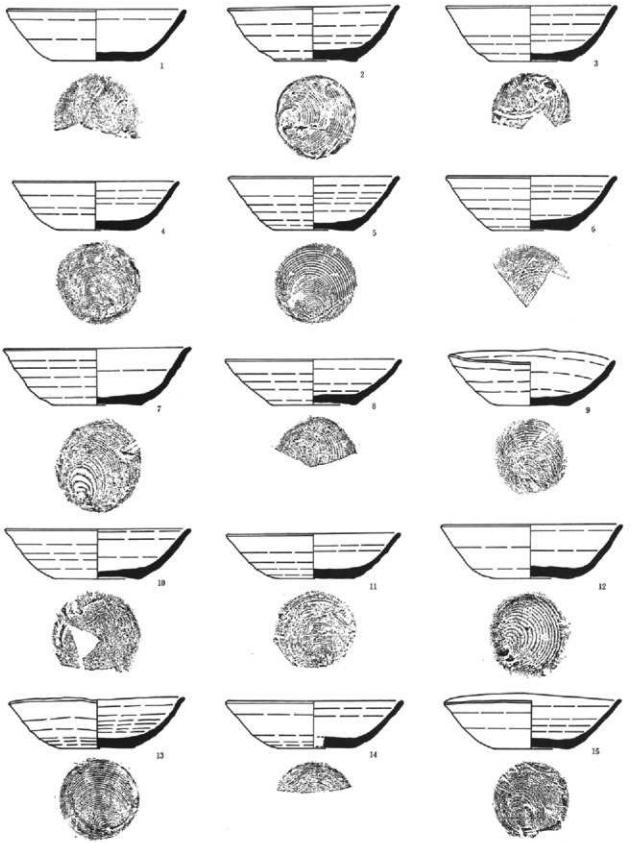
第59図　遺物実測図(24)



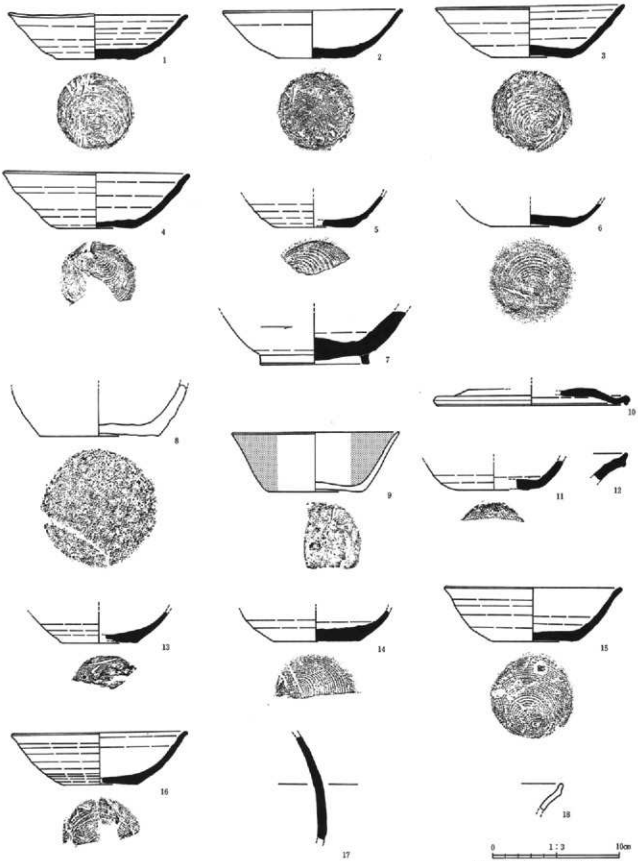
第60図　遺物実測図(25)



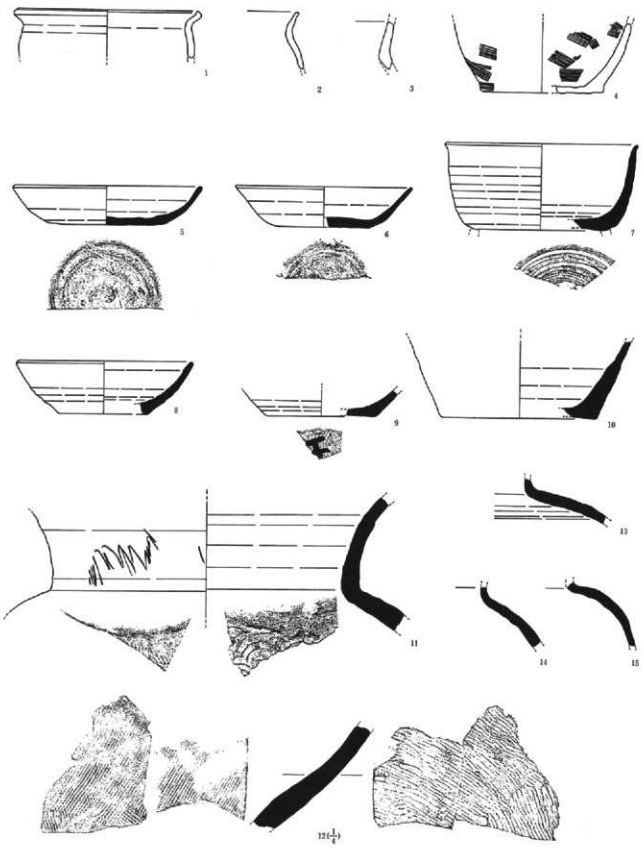
第61図　遺物実測図(26)



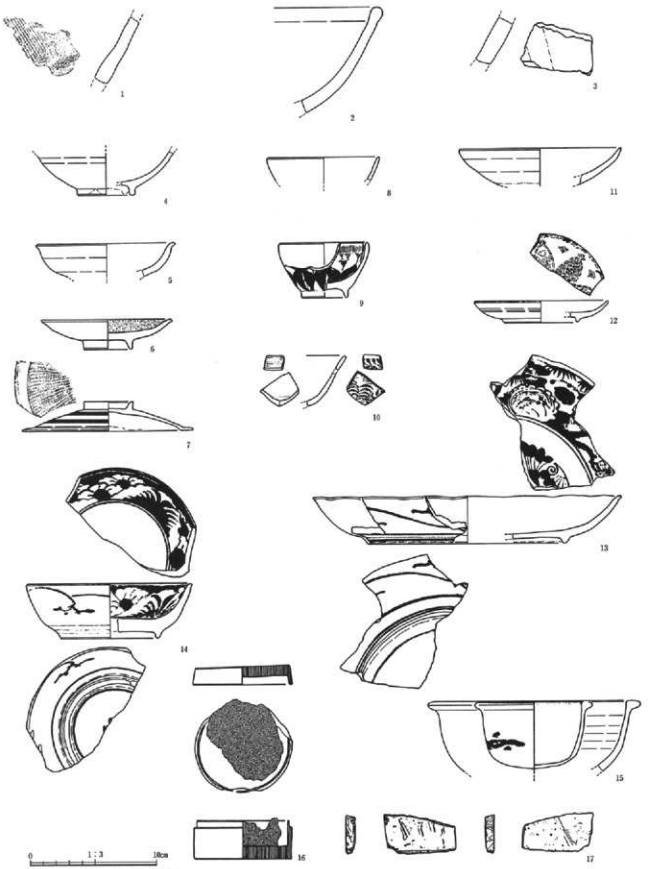
第62図　遺物実測図(27)



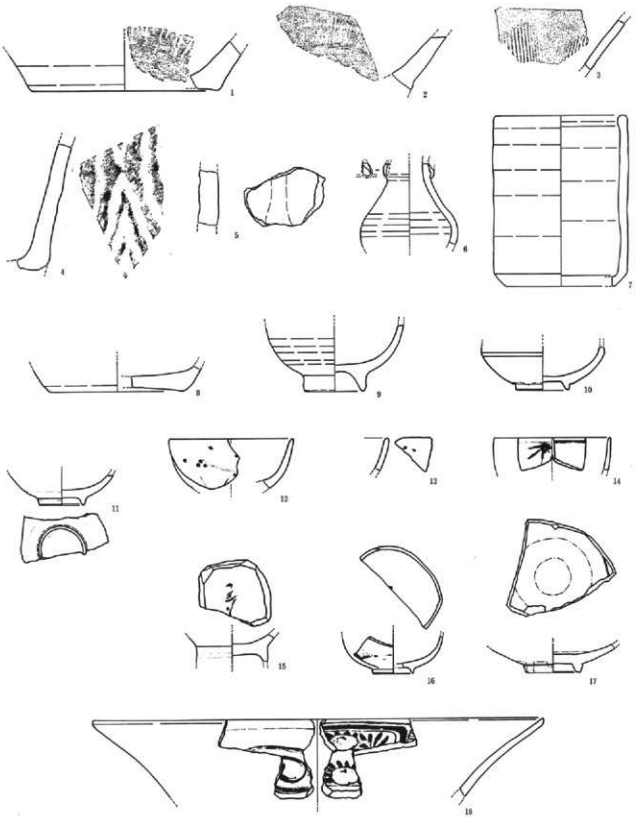
第63図　遺物実測図(28)



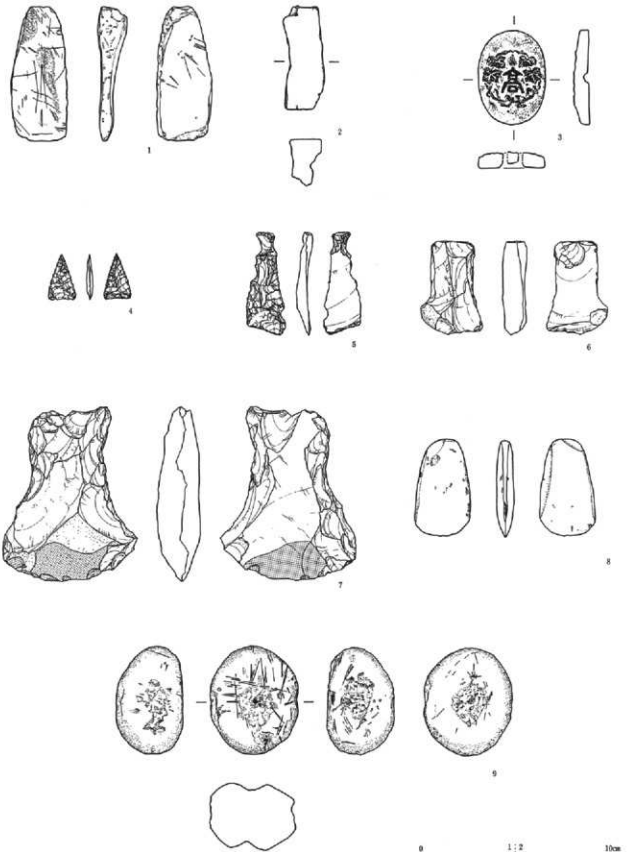
第64図　遺物実測図(29)



第65図　遺物実測図(30)



第66図　遺物実測図(31)



第67図　遺物実測図(32)

2次調査出土遺物観察表（1）

挿図No		種別	器種	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	成形 外面	成形 内面	成形 底部切離	出土地点	備考
第48図	1	土師器	椀		91			ミガキ		SH2077上	内面黒色処理　体部下端手持ちヘラケズリ
	2	土師器	壺							SH2077	古式土師器壺　頸径120mm　南小泉式カ
	3	土師器	高坏							SH2077	脚部のみ
	4	土師器	甕				ハケメ			SH2077	
	5	土師器	甕					ハケメ		SH2077	古式土師器カ
	6	土師器	甕		(68)					SH2077	底部木葉痕　二次加熱
	7	須恵器	𤭯				ロクロ・ケズリ	ロクロ・アテ		SH2077SD2044	RP65RP66　胴径124mm　櫛描波状文一条が上下各二条の沈線に挟まれ巡る
	8	須恵器	不明				ロクロ	ロクロ	不明	SH2077F1	古式須恵器　器台あるいは高坏カ
	9	須恵器	稜椀	(130)	(86)	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077	貼付高台
	10	須恵器	高台付椀		(110)		ロクロ	ロクロ	不明	SH2077上	高台剥離
	11	須恵器	坏	(136)	(82)	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SH2077上	
	12	須恵器	坏	(140)	(83)	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077上	
	13	須恵器	坏	142	60	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077	12-6　重ね焼き痕跡
	14	須恵器	坏		66		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077上	3-3グリッド
	15	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		SH2077上	二次加熱　外面火はね
	16	須恵器	甕				ハケメ	アテ・ハケメ		SH2077上	
	17	須恵器	甕				タタキ	アテ		SH2077上	
	18	土師器	高台付坏		(82)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077上	貼付高台　赤焼土器
	19	土師器	坏	(146)	63	51	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SH2077上	二次加熱　赤焼土器
	20	石製品	砥石	長64	幅41	厚15				SH2077	
第49図	1	土師器	鉢	(88)	22	70	ミガキ	ミガキ		SX2065F	古式土師器小型丸底鉢　塩釜式2期　4C
	2	土師器	小壺	(100)			ミガキ	ミガキ		SX2065F	古式土師器
	3	土師器	甕							SX2065	
	4	土師器	壺				ミガキ	ハケメ		SX2065	古式土師器壺　外面赤彩痕跡
	5	土師器	壺				ハケメ			SX2065	古式土師器4C
	6	石製品	砥石	長93	幅28	厚37				SX2065	
	7	土師器	甕				ロクロ	ロクロ		ST2099	煤
	8	須恵器	壺				ロクロ・ハケメ			ST2099	二次加熱
	9	須恵器	坏	(152)	(84)	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ST2099	
	10	須恵器	坏	(150)			ロクロ	ロクロ	不明	ST2099	
	11	土師器	鉢				ミガキ	ミガキ		ST2100	古式土師器
	12	須恵器	坏	(130)	(64)	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ST2100F	
	13	土師器	高坏							SD2180	RP68　脚部のみ
	14	黒色土器	坏		(70)				不明	SD2180F	RP17　内外面黒色処理　二次加熱
	15	須恵器	蓋				ロクロ・ケズリ	ロクロ	不明	SD2180F	天井部及び肩部上端回転ヘラケズリ
	16	須恵器	蓋	(165)		37	ロクロ・ケズリ	ロクロ	不明	SG2155SD2180	肩部回転ヘラケズリ
	17	須恵器	高台付坏		(88)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	
	18	須恵器	坏	(130)	(60)	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SD2180F	底部回転ヘラケズリ
	19	須恵器	坏	(155)	78	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	
	20	須恵器	坏	(140)	70	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	SG2155
	21	須恵器	坏	138	68	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	RP10RP11
	22	須恵器	坏	(140)	72	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	
	23	須恵器	坏		(82)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SD2180F	RP15
	24	土師器	蓋				ロクロ	ロクロ		SD2011	
	25	土師器	甕							SD2011	
	26	土師器	甕		(98)			ハケメ		SD2011	二次加熱
	27	須恵器	甕				タタキ	アテ		SD2300F	
	28	土師器	甕	(150)						SK2028F	二次加熱　煤
第50図	1	土師器	甕	(150)	67	83				SK2028F	二次加熱　煤
	2	土師器	甕	(260)			ハケメ	ハケメ		SK2028F	
	3	土師器	甕				ハケメ	ハケメ		SK2028F	二次加熱
	4	土師器	甕		(52)		ロクロ	ロクロ		SK2028F	RP208　二次加熱　煤
	5	土師器	甕		(100)		ケズリ			SK2028F	RP207　二次加熱　煤
	6	須恵器	坏	(143)	(74)	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2028F	RP210RP206
	7	須恵器	壺	(190)			ロクロ	ロクロ		SK2028	
	8	須恵器	甕	(290)			ロクロ・ハケメ	ロクロ・ハケメ		SK2028	
	9	石製品	砥石	長[illegible]	幅67	厚27				SK2028	
	10	土師器	甕				ロクロ	ロクロ		SP2190	
	11	黒色土器	坏	(130)	(77)	52	ケズリ・ナデ	ミガキ	不明	SP2190F	体部外面下半手持ちヘラケズリ　内面黒色処理カ
	12	土師器	甕		(88)		ケズリ			SK2238SP2190	二次加熱

２次調査出土遺物観察表（２）

挿図No.		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
第50図	13	須恵器	坏	(136)	56	47.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2060	焼成不良
	14	須恵器	坏		(64)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2063	
	15	土師器	甕							SK2302	二次加熱
	16	須恵器	高台付坏	(180)			ロクロ	ロクロ		SK2302F	高台剥離
	17	須恵器	坏	(180)			ロクロ	ロクロ		SK2302	重ね焼き痕跡
	18	須恵器	坏		(60)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2302	
	19	須恵器	坏	(180)	(66)	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2302	
	20	須恵器	坏		66		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2302	
	21	須恵器	壺				ロクロ・ケズリ	ロクロ		SK2302	
	22	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ・ハケメ		SK2302	
	23	須恵器	壺				ロクロ・ケズリ	ロクロ・ハケメ		SK2302	
第51図	1	須恵器	甕	(400)			ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ・ハケメ		SE2033	
	2	須恵器	壺		(96)		ロクロ・ケズリ	ロクロ・ハケメ		SE2033	
	3	石製品	敲き石	長67	幅53	厚40				SE2033	
	4	石製品	砥石	長59	幅48	厚42				SE2033	３面に線刻　「難ヵ」の文字有　貫通孔有り
	5	石製品	砥石	長60	幅73	重1.3				SE2033	
	6	須恵器	坏		74		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2351F	
	7	須恵器	坏		54		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2351F	
	8	須恵器	甕				タタキ	アテ		SE2351F	灰被り
	9	土師器	坏		(65)				不明	SE2351F	赤焼土器
	10	土師器	甕							SE2292F1	二次加熱　煤
	11	土師器	甕					ヘケメ		SE2292下	
	12	土師器	甕		(82)		ハケメ			SE2292F1	二次加熱　煤
	13	須恵器	高台付坏		(80)		ロクロ・ケズリ	ロクロ	不明	SE2292F1	底部体部下端回転ヘラケズリ　貼付高台
	14	須恵器	坏		(74)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2292F1	
	15	須恵器	坏	130	64	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2292	重ね焼き痕跡
第52図	1	須恵器	坏		62		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2292	
	2	須恵器	双耳坏輪	長40	幅5.5	厚9	ケズリ			SE2292	
	3	須恵器	甕				タタキ	アテ		SE2292	
	4	黒色土器	高台付坏		(64)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	内面黒色処理ヵ　貼付高台
	5	土師器	坏		68		ロクロ	ミガキ	回転糸切	SE2291	二次加熱　底部ヘラ描　×印
	6	黒色土器	高台付坏	(132)	(70)	49	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	回転糸切	SE2291	両面黒色処理　削出高台
	7	黒色土器	高台付坏		(55)		ロクロ	ロクロ・ミガキ	回転糸切	SE2291	内面黒色処理　貼付高台　二次加熱
	8	黒色土器	坏	(137)	(68)	46	ロクロ	ロクロ・ミガキ	回転糸切	SE2291	RP162　底部ナデ　内面黒色処理
	9	黒色土器	坏	136	60	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP112　二次加熱　内面黒色処理
	10	黒色土器	坏	(132)	(50)	46	ロクロ	ロクロ	不明	SE2291	RP103　二次加熱　内面黒色処理
	11	黒色土器	坏		62		ロクロ・ケズリ	ロクロ・ミガキ	回転糸切	SE2291	体部下端回転ヘラケズリ　底部墨書字種不明　外面赤彩　内面黒色処理
	12	土師器	甕	(180)			ロクロ	ロクロ		SE2291	二次加熱
	13	土師器	甕	(242)			ロクロ	ロクロ		SE2291	二次加熱
	14	土師器	甕	(250)						SE2291	二次加熱
	15	土師器	甕	(190)				ロクロ・ハケメ		SE2291	RP144　二次加熱
	16	土師器	甕	(262)			ハケメ	ハケメ		SE2291	RP100RP101RP119RP121RP144　二次加熱
	17	土師器	甕	(230)			ロクロ・ナデ	ロクロ・ハケメ		SE2291	煤
	18	土師器	甕	(220)						SE2291	二次加熱
第53図	1	土師器	甕	(220)						SE2291	二次加熱　煤
	2	土師器	甕							SE2291	二次加熱
	3	土師器	甕	(140)						SE2291	RP119　二次加熱
	4	土師器	甕	146			ロクロ	ロクロ		SE2291	二次加熱　煤
	5	土師器	甕							SE2291	二次加熱
	6	土師器	甕							SE2291	RP164　二次加熱
	7	土師器	甕							SE2291	二次加熱
	8	土師器	甕					ハケメ		SE2291	二次加熱
	9	土師器	甕							SE2291	二次加熱　煤
	10	土師器	甕					ハケメ		SE2291	二次加熱
	11	土師器	甕							SE2291	二次加熱　煤
	12	土師器	甕							SE2291	RP174
	13	土師器	甕							SE2291	二次加熱
	14	土師器	甕							SE2291	二次加熱　煤
	15	土師器	甕							SE2291	RP140　二次加熱　煤
	16	土師器	甕				ハケメ・ケズリ			SE2291	RP96　二次加熱　煤

2次調査出土遺物観察表（3）

挿図No.		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
第53図	17	土師器	甕				ケズリ			SE2291	RP119　二次加熱
	18	土師器	甕				ケズリ	ロクロ		SE2291	RP156　煤
	19	土師器	甕					ハケメ		SE2291	RP99　二次加熱　煤
	20	土師器	甕		80					SE2291	底部木葉痕　二次加熱
	21	土師器	甕		(70)					SE2291	布目痕
	22	土師器	甕		(90)					SE2291	底部木葉痕　二次加熱
	23	土師器	甕		(70)		ハケメ	ハケメ		SE2291	底部網代痕　二次加熱
	24	土師器	甕							SE2291	二次加熱　製塩土器に類似
	25	土師器	甕		(96)		ハケメ	ハケメ		SE2291	RP151RP213　二次加熱　煤　底部網代痕
	26	土師器	甕		(110)					SE2291	二次加熱
	27	土師器	甕		(90)					SE2291	RP117　二次加熱　煤
	28	土師器	甕		(80)		ケズリ			SE2291	二次加熱
	29	土師器	甕		114			ハケメ		SE2291	RP87二次加熱
第54図	1	土師器	甕		(70)		ケズリ	ハケメ		SE2291	底部網代痕
	2	土師器	甕		(82)		ロクロ	ロクロ		SE2291	二次加熱　煤
	3	土師器	甕		(86)					SE2291	RP180RP213　二次加熱　煤
	4	土師器	鍋					ハケメ		SE2291	RP96　二次加熱
	5	須恵器	蓋				ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転糸切	SE2291	天井端部及び肩部上端回転ヘラケズリ
	6	須恵器	高台付坏		65		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	貼付高台　灰被り
	7	須恵器	高台付坏		68		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP157　貼付高台
	8	須恵器	高台付坏		(64)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	削り出し高台　底部有機物付着
	9	須恵器	高台付坏	(142)	(77)	75	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP214　貼付高台　内面墨付着
	10	須恵器	高台付坏	(140)	65	65	ロクロ	ロクロ	不明	SE2291	RP134　底部ナデ　貼付高台　重ね焼き痕跡　体部外面に補修痕
	11	須恵器	高台付坏	(152)	74	58	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP89　削出高台　焼成不良
	12	須恵器	坏	(144)	(80)	30.5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2291	底部ヘラナデ
	13	須恵器	坏	(140)	(70)	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2291	RP123RP147　焼成不良　重ね焼き痕跡
	14	須恵器	坏	(140)	(70)	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2291	重ね焼き痕跡
	15	須恵器	坏		(74)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SE2291	RP172
	16	須恵器	坏	136	73	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP230　重ね焼き痕跡
	17	須恵器	坏	124	70	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書「持」　重ね焼き痕跡
	18	須恵器	坏	(136)	(70)	51	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP215　焼成不良
	19	須恵器	坏	(138)	(68)	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP194　海綿骨針多　内面有機物付着し磨滅　口縁部端部を外側に折り曲げる
	20	須恵器	坏	(133)	(70)	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP181　火襷
第55図	1	須恵器	坏	(138)	(68)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	重ね焼き痕跡　体部下端回転ヘラナデ
	2	須恵器	坏	(142)	(70)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	重ね焼き痕跡
	3	須恵器	坏	149	72	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP95　重ね焼き痕跡
	4	須恵器	坏	(145)	(70)	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP108　歪み大　焼成不良
	5	須恵器	坏	150	72	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP97　体部外面逆位に墨書「宙カ」　焼成不良
	6	須恵器	坏	(140)	(65)	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	
	7	須恵器	坏	138	64	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP216　内面墨書「X」　底部墨書銘不明
	8	須恵器	坏	(139)	(62)	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP167　重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏	140	63	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP122　内面及び口唇部に有機物付着　歪み大
	10	須恵器	坏	135	64	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP78　体部外面逆位に墨書「曽」
	11	須恵器	坏	135	64	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP109　歪み大
	12	須恵器	坏	(130)	(64)	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP105
	13	須恵器	坏	(130)	(62)	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP75　焼成不良
	14	須恵器	坏	138	68	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP115RP132　二次加熱　焼成不良
	15	須恵器	坏	(136)	(63)	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP129　重ね焼き痕跡
第56図	1	須恵器	坏	136	62	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP83重ね焼き痕跡　焼成不良
	2	須恵器	坏	140	64	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP131　焼成不良
	3	須恵器	坏	134	60	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	歪み
	4	須恵器	坏	(130)	(65)	52.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	重ね焼き痕跡
	5	須恵器	坏	(140)	(62)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP178　重ね焼き痕跡
	6	須恵器	坏	140	58	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP91　重ね焼き痕跡
	7	須恵器	坏	(140)	(60)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	重ね焼き痕跡
	8	須恵器	坏	152	64	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP135RP84　底部墨書「手」
	9	須恵器	坏	136	59	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP128　焼成不良
	10	須恵器	坏	147	62	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP168　体部外面逆位に墨書「曽」
	11	須恵器	坏	(150)	(66)	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	焼成不良
	12	須恵器	坏	(140)	(62)	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP80 重ね焼き痕跡

２次調査出土遺物観察表（４）

挿図No.		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
第56図	13	須恵器	坏	136	56	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	体部外面逆位に墨書「管」　重ね焼き痕跡
	14	須恵器	坏	141	58	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP159RP195
	15	須恵器	坏	(140)	(58)	46	ロクロ	ロクロ	不明	SE2291	RP88　焼成不良
	16	須恵器	坏	136	57	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP106　焼成不良
	17	須恵器	坏	142	62	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP74　焼成不良
	18	須恵器	坏	140	58	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP113
第57図	1	須恵器	坏	130	52	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	体部外面逆位に墨書「良」　重ね焼き痕跡
	2	須恵器	坏	(140)	(64)	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	焼成不良　重ね焼き痕跡
	3	須恵器	坏	(130)	(62)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP152　焼成不良
	4	須恵器	坏	(130)	(56)	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	
	5	須恵器	坏	134	58	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP98　底部手持ちヘラナデ
	6	須恵器	坏	(140)	(58)	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP90　重ね焼き痕跡
	7	須恵器	坏	136	58	48	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	二次加熱　焼成不良
	8	須恵器	坏	142	56	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP93RP116　重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏	(122)	48	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP136　重ね焼き痕跡
	10	須恵器	坏	(140)	(55)	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP193　焼成不良
	11	須恵器	坏	150	58.5	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP76　焼成不良
	12	須恵器	坏	149	58	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	重ね焼き痕跡
	13	須恵器	坏	139	54	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書字種不明　SG2155
	14	須恵器	坏	148	56	47	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP70　底部墨書「手」
	15	須恵器	坏	(135)	52	49	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書字種不明
	16	須恵器	坏	150	54	50	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP135RP137　底部墨書「手」　歪み大
	17	須恵器	坏	136	48	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切カ	SE2291	RP110　焼成不良
	18	須恵器	坏	144	47	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書字種不明
第58図	1	須恵器	坏	160			ロクロ	ロクロ		SE2291	
	2	須恵器	坏		64		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部手持ちヘラケズリ　ナデ
	3	須恵器	坏		75		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP81　底部ヘラナデ
	4	須恵器	坏	(130)	(60)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	
	5	須恵器	坏	(131)	(44)	42	ロクロ	ロクロ	不明	SE2291	焼成不良
	6	須恵器	坏		64		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書「本カ」
	7	須恵器	坏		(63)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP161　底部墨書「福カ」
	8	須恵器	坏		69		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書字種不明
	9	須恵器	坏		(60)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書「手カ」
	10	須恵器	坏		(58)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	底部墨書「丈」体部墨書字種不明
	11	須恵器	坏		(68)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP138　底部墨書字種不明
	12	須恵器	双耳坏摘	長54	幅31	厚11.5	ケズリ			SE2291	
	13	須恵器	甕	(300)	(96)	173	カキメ	カキメ	不明	SE2291	RP191RP183　二次加熱
	14	須恵器	甕	(390)			ロクロ・タタキ・ハケメ	ロクロ・アテ・ハケメ		SE2291	RP78
	15	須恵器	甕				ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		SE2291	RP180　頸部櫛描波状文　16mm 5単位
	16	須恵器	甕				タタキ・ハケメ	アテ		SE2291	外面に一条の沈線
第59図	1	須恵器	甕				タタキ	アテ		SE2291	
	2	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		SE2291	RP171　短頸壺
	3	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		SE2291	頸径68mm
	4	須恵器	壺		(100)		ロクロ・ケズリ	ロクロ・ハケメ	不明	SE2291	
	5	須恵器	壺				ロクロ・ハケメ	ロクロ		SE2291	RP124
	6	土師器	甕		60				回転糸切	SE2291	二次加熱　赤焼土器
	7	土師器	甕		(75)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	RP82　二次加熱　赤焼土器
	8	土師器	鍋	(460)			ロクロ	ロクロ		SE2291	赤焼土器
	9	土師器	坏	(140)	(60)	49	ロクロ	ロクロ	不明	SE2291	赤焼土器
	10	土師器	坏		56		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SE2291	二次加熱　赤焼土器
	11	石製品	砥石	長52	幅41	厚39				SE2291上	
	12	石製品	砥石	長108	幅55.5	厚46				SE2291	
第60図	1	土師器	甕	(220)						SG2155	二次加熱
	2	土師器	鍋							SG2155	二次加熱
	3	須恵器	高台付坏		(90)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG2155F	貼付高台
	4	須恵器	高台付坏		(76)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG2155F	4-13グリッド　貼付高台
	5	須恵器	坏		(68)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG2155F	
	6	須恵器	坏		70		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SG2155F	
	7	須恵器	甕				ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ・ハケメ		SG2155F1	
	8	土師器	坏		(68)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP33　二次加熱　赤焼土器

２次調査出土遺物観察表（５）

挿図No		種別	器種	計測値			成形			出土地点	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	底部切離		
第60図	9	黒色土器	高台付埦	(160)	90	65.5	ロクロ・ケズリ	ミガキ	回転糸切	SX2293	RP40 底部回転ヘラケズリ 内面黒色処理
	10	黒色土器	坏	(130)			ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ		SX2293	両面黒色処理 二次加熱
	11	土師器	甕		70					SX2293	RP61 二次加熱 煤 古式土師器甕 ４Ｃ末～５Ｃ初
	12	土師器	甕	(90)	62	62.5	ハケメ			SX2293	RP48 底部木葉痕 二次加熱 煤
	13	土師器	甕							SX2293	二次加熱 煤
	14	土師器	甕		(86)		ハケメ			SX2293	RP35 底部木葉痕 二次加熱 煤
	15	須恵器	蓋	155		42	ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転糸切	SX2293	天井部及び胴部上端回転ヘラケズリ 重ね焼き痕跡
	16	須恵器	埦	138	91	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP６ 貼付高台 重ね焼き痕跡
	17	須恵器	高台付坏	(138)	68	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP36 底部端部回転ヘラケズリ 貼付高台
	18	須恵器	高台付坏	140	76	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP23 重ね焼き痕跡 貼付高台
	19	須恵器	高台付坏	136	72	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP25 貼付高台 重ね焼き痕跡 TT６
	20	須恵器	坏	147	82	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SX2293	RP22 重ね焼き痕跡
	21	須恵器	坏	(145)	(76)	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SX2293	RP34 底部手持ちヘラナデ 焼成不良
第61図	1	須恵器	坏	144	72	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SX2293	RP29RP31 重ね焼き痕跡
	2	須恵器	坏	(145)	(70)	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SX2293	RP63 重ね焼き痕跡
	3	須恵器	坏	144	70	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	SX2293	RP51 底部手持ちヘラナデ 重ね焼き痕跡
	4	須恵器	坏	(128)	(80)	29	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP39
	5	須恵器	坏	(130)	(78)	32	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP62
	6	須恵器	坏	(140)	74	32	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP37 重ね焼き痕跡
	7	須恵器	坏	(142)	(80)	39	ロクロ・ヘラナデ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP52 焼成不良
	8	須恵器	坏	(143)	78	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP46RP57
	9	須恵器	坏	138	74	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP45 重ね焼き痕跡
	10	須恵器	坏	140	74	35	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP59 重ね焼き痕跡
	11	須恵器	坏	(136)	72	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP64RP42
	12	須恵器	坏	(136)	70	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP55
	13	須恵器	坏	146	72	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP60 底部ヘラナデ 重ね焼き痕跡
	14	須恵器	坏	146	74	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP54 重ね焼き痕跡
	15	須恵器	坏	140	70	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP21 歪み大 重ね焼き痕跡
第62図	1	須恵器	坏	142	70	40.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	重ね焼き痕跡
	2	須恵器	坏	136	66	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP41RP64
	3	須恵器	坏	(136)	(66)	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP38 重ね焼き痕跡
	4	須恵器	坏	133	64	38.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP50 SK2150
	5	須恵器	坏	(136)	64	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP１ TT６
	6	須恵器	坏	(136)	(62)	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP23 重ね焼き痕跡
	7	須恵器	坏	(150)	70	45	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP58
	8	須恵器	坏	(140)	(66)	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP20 重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏	132	61	36	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP47 歪み大
	10	須恵器	坏	(148)	(68)	39	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP49 重ね焼き痕跡
	11	須恵器	坏	(136)	63	35.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	重ね焼き痕跡
	12	須恵器	坏	(140)	64	42.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP43 重ね焼き痕跡
	13	須恵器	坏	140	60	39.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP４ 重ね焼き痕跡 TT６
	14	須恵器	坏	(140)	(60)	37	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP53 重ね焼き痕跡
	15	須恵器	坏	141	60	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP32 歪み大
第63図	1	須恵器	坏	142	60	34.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP27 重ね焼き痕跡
	2	須恵器	坏	142	60	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP24 重ね焼き痕跡
	3	須恵器	坏	(150)	62	40	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	RP44 重ね焼き痕跡
	4	須恵器	坏	148	61	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	重ね焼き痕跡
	5	須恵器	坏		60		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	
	6	須恵器	坏		62		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SX2293	
	7	須恵器	壺		(86)		ロクロ・ケズリ	ロクロ	不明	SX2293	RP３ 底部回転ヘラケズリ
	8	土師器	甕		94					SK2008F	二次加熱
	9	黒色土器	坏	(132)	(74)	47	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	回転ヘラ	SK2153	内面黒色処理
	10	須恵器	蓋	(156)			ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転糸切	SK2153	重ね焼き痕跡 焼成不良 天井部回転ヘラケズリ
	11	須恵器	坏		(72)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2153	
	12	須恵器	甕				ロクロ	ロクロ		SK2153	口縁部
	13	須恵器	坏		(60)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2150	
	14	須恵器	坏		(66)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2182F	RP18
	15	須恵器	坏	140	64	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2182F	RP19 底部ヘラ描X印 重ね焼き痕跡
	16	須恵器	坏	(180)	(60)	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK2142	焼成不良
	17	須恵器	壺				ロクロ・ハケメ	ロクロ		SK2236F	

2次調査出土遺物観察表（6）

挿図No		種別	器種	計測値 口径	底径	器高	成形 外面	内面	底部切離	出土地点	備考
	18	土師器	甕							SK2352F	二次加熱
第64図	1	土師器	甕	(150)			ロクロ			XO	二次加熱　煤
	2	土師器	甕							2-8グリッド	二次加熱　煤
	3	土師器	甕				ハケメ	ハケメ		6区	頸部に一条の沈線　煤
	4	土師器	甕		(98)		ハケメ	ハケメ		3-2グリッド	二次加熱
	5	須恵器	坏	(150)	(90)	31	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	5区	
	6	須恵器	坏	(140)	(70)	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ	5区	
	7	須恵器	高台付碗	(152)	(100)	68	ロクロ	ロクロ	不明	5区	貼付高台　高台剥離
	8	須恵器	坏	(140)	(70)	42	ロクロ	ロクロ	回転糸切	5区	重ね焼き痕跡
	9	須恵器	坏		(86)		ロクロ	ロクロ	回転糸切	3-2グリッド	底部墨書「手カ」
	10	須恵器	甕		(122)		ロクロ・ハケメ	ロクロ		3-5グリッド	
	11	須恵器	甕				ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		4区東壁際	頸部径240mm　頸部波状文有り
	12	須恵器	甕				タタキ・ケズリ	アテ		4区	
	13	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		5区	灰被り　短頸壺
	14	須恵器	壺				ロクロ	ロクロ		2-11グリッド	
	15	須恵器	壺				ロクロ・ハケメ	ロクロ・ハケメ		5区	
第65図	1	陶器	擂鉢							SK2297	17mm以上に9条以上の卸目
	2	陶器	鉢							SK2297	灰釉
	3	陶器	甕							SK2297	内外面水色釉　外面一部釉剥ぎ
	4	陶器	碗		(46)					SK2297	内面白色釉　外面淡緑色釉　畳付け露胎
	5	陶器	皿	(100)						SK2297	灰色釉
	6	陶器	皿	(104)	38	23.5				SK2297	内面、畳付け露胎　内面赤色漆　畳付け黒色漆　外面白色釉　貫入
	7	陶器	皿	136	40	23.5				SK2297	内面水色釉　外面に銹釉による二重圏線　[illegible]状痕
	8	磁器	碗	(100)						SK2297	透明釉
	9	磁器	碗	(70)	(34)	43				SK2297	畳付け露胎
	10	磁器	碗							SK2297	貫入
	11	磁器	皿	(129)						SK2297	淡緑色釉　体部下半露胎
	12	磁器	皿	(106)	58	18				SK2297	型紙刷　畳付け露胎
	13	磁器	輪花皿	(166)	(156)	37				SK2297	畳付け露胎　貫入
	14	磁器	皿	(125)	(78)	42.5				SK2297	肥前　口紅　畳付け露胎
	15	磁器	鉢	(160)						SK2297	貫入
	16	木製品	合子	72	76	(38)				SK2297F	晶状の内容物
	17	石製品	砥石	長30.1	幅6.1	厚7				SK2297F	
第66図	1	陶器	擂鉢		(320)					SD2296	18mmに5条の卸目
	2	陶器	擂鉢							SD2296	26mmに10条の卸目　漆接ぎ
	3	陶器	擂鉢							SD2296	29mm以上に13条以上の卸目　内外面錆釉
	4	陶器	壺							SD2296	外面飴釉　丸ノミ状工具による波状の区画文
	5	陶器	瓶							SD2296	外面海鼠釉
	6	陶器	壺カ							SD2296	外面白色釉　漆接ぎ　双耳
	7	陶器	花生カ	104	(65)	134.5				SD2296	体部下部露胎
	8	陶器	鉢		(306)					SD2296	内面鉄釉　底部脇ヘラ削り
	9	陶器	碗		(44)					SD2296	内外面黄色釉　畳付け露胎
	10	陶器	碗		40					SD2296	内外面灰釉　高台露胎
	11	磁器	碗		35					SD2296	内外面透明釉　畳付け露胎
	12	磁器	碗	(98)						SD2296	内外面透明釉
	13	磁器	碗							SD2296	内外面透明釉
	14	磁器	碗	(92)						SD2296	内外面透明釉
	15	磁器	碗							SD2296	内外面透明釉
	16	磁器	碗		(32)					SD2296	内外面透明釉　畳付け露胎
	17	磁器	皿		44					SD2296	見込み蛇の目釉剥ぎ　外面体部下半露胎　高台内釉痕
	18	磁器	大皿	(358)						SD2296	芙蓉手　胎土陶質　被熱　貫入　SK739と接合
第67図	1	石製品	砥石	長63.1	幅45	厚13.3				SD2296F	
	2	石製品	砥石	長82	幅33	厚7.5				SD2296	3面剥離
	3	鉄製品	文鎮	長75	幅54	厚12				SD2296	中央に2ヶ所の紐通し穴・赤湯園芸高校校章
	4	石器	石鏃	長14.5	幅11.5	厚3.5				SP2295	0.94g
	5	石器	石匙	長41.5	幅20	厚6				4区	6.1g
	6	石器	削器	長60	幅32	厚13				SK2302	25.3g
	7	石器	打製石斧	長93	幅71	厚23				SE2291	120g　RQ204　先端部使用痕有り　磨滅
	8	石器	磨製石斧	長75	幅41.5	厚13				3-20グリッド	77.4g
	9	石製品	くぼみ石	長85	幅70	厚54				4区	

V　まとめ

今回の調査は、一般県道南陽川西線道路改良工事に先立つ緊急発掘調査である。平成８・９年の２カ年にわたる発掘調査では推定遺跡面積約70,000㎡のうち、第１次調査では2,700㎡、第２次調査では1,500㎡の総計4,200㎡を調査対象とした。

植木場一遺跡は山形県南部の置賜平野の北西部、南陽市の沖郷地区に所在し、最上川とその支流の上無川・吉野川の中間の微高地に立地する。付近には最上川の旧河道や吉野川の旧河道を利用した堤が点在し、河川活動の激しさを物語っている。

遺跡の性格は、古墳時代の集落跡と古墳、奈良・平安時代の集落跡、中近世の館跡であることが明らかとなり、さらに明治時代の大火の痕跡も確認することができた。検出された遺構は、古墳時代の溝跡や古墳、平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡や井戸跡、土壙、溝跡、墓壙、中近世の土塁跡や堀跡、地業跡、溝跡、近代の土壙、溝跡等である。遺構は調査区内の全域に分布するが、２区がやや希薄である。

古墳は、調査区西端の５～６区で検出した。周溝の心心間の距離が16ｍを測る円墳と考えられるが、主体部は後代に削平されている。周溝の幅は160～250㎝程を測り、覆土中から５世紀中葉頃の須恵器甕や古式土師器壷等が出土している。南陽市内では５世紀中葉頃の円墳が平野部に構築されている例は無く、注目される。

平安時代の井戸跡は４基検出された。ＳＥ2291からは、９世紀中葉頃の須恵器坏を中心とする土器類が一括して出土している。比較的短期間に投棄されたと考えられ、置賜平野北部の集落における土器組成を検討する上で貴重な資料が得られた。さらに、特筆されることは調査区内から出土した墨書土器の87.5％がこの井戸跡から出土していることである。１基の井戸跡から墨書土器が集中して出土する例は、県内では少なく注目される。井戸廃絶等に関する祭祀が行われた痕跡、あるいは集落または集団内における何らかの祭祀が幾たびか執り行われた場所(祭祀場)等の可能性が考えられる。

中世の宮崎館跡に関わる土塁跡及び堀跡は１区で検出された。１区東側では幅５ｍ、深さ２ｍを測る堀跡と削平された幅５ｍと推測される土塁跡が存在する。堀底部から、在地の珠洲系中世陶器片が出土し、堀の構築年代は15～16世紀頃と推定される。西に90ｍ程の地点に東土塁に対応する西土塁が検出されている。幅約５ｍを測る土塁が、地山から80㎝程残存している。

出土遺物で特徴的なものは、須恵器甑と須恵器樽型甑閉塞部がある。甑は古墳周溝から出土し、樽型甑閉塞部は３区の土壙から出土している。いずれも非常に丁寧な器面調整が施される優品である。甑は大阪府陶邑窯跡群ＯＮ46～ＴＫ208段階、樽型甑はやや古いＴＫ216段階に当たると考えられる。さらに、ＳＥ2033から出土した刻字等が見られる石製品がある。３面に線刻され、１面には「譜」と考えられる文字が、他は直線の組み合わせと曲線で動物的な図形の２面が線刻されている。吊り下げ用と考えられる貫通孔がある。形状は砥石に類似するが、刻字するために研磨して面を形成している可能性がある。何らかの祭祀に使用された可能性があり、ＳＥ2219の墨書土器と合わせ井戸跡に関わる祭祀の検討を進めなければならない。

ＳＸ2293・ＳＥ2291出土須恵器坏の分類と組成

植木場一遺跡第２次調査において、ＳＸ2293(ＳＤ2155の２－８グリッド付近)とＳＥ2291から須恵器坏を中心とする土器が集中して出土している。第44図、第47図に見られるように、同一層位からの出土とみられることなどにより一括投棄と考えられ、置賜平野北部の平安時代前半代の集落内における土器の変遷と組成を考察する上で、良好な資料が得られた。これら土器群の内、それぞれの遺構でまとまりの見られる須恵器坏について底径指数と高径指数を基にした相関グラフを作成し、その分布の状況から分類を試みた(第69図)。あわせて、２つの遺構から出土する土器の時期差について明らかにしていきたいと考える。

分類の基準は、あらかじめ無高台(以下坏)と高台付(高台付坏)とに分け、底部切り離し形態によってＡ：回転ヘラ切り坏、Ｂ：回転糸切坏、Ｃ：回転糸切高台付坏の３種に大別した。さらに、底径指数(底径÷口径×100)と高径指数(器高÷口径×100)の相関関係によって、グルーピングを行った。データを指数化することにより、器形の変遷をより客観的に検討・比較できると考えたのである。底径指数及び高径指数については、秋田県の岩見誠夫・船木義勝両氏の論考を参考にした。また、体部の立ち上がりや形状、口縁端部形状、外傾の度合い等により細分化を試みた。

ＳＸ2293出土須恵器坏

Ａ）底部回転ヘラ切り

Ａ１類：　底径指数52.4、高径指数29.66を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がり、底部と体部の境界が明瞭でないもの。

Ａ２類：　底径指数55.78、高径指数27.21を測り、底部から体部がやや緩やかに立ち上がり、直線的に伸びるもの。

Ａ３類：　底径指数49.48、高径指数25.61を測るもの。Ａ３類には、底部から体部が内弯気味に立ち上がるタイプ(Ａ3a)と、底部と体部の境界が明瞭で体部が直線的に伸びるもの(Ａ3b)が見られる。

Ｂ）底部回転糸切

Ｂ１類：　底径指数62.5、高径指数22.66を測り、底部から体部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部がやや摘み出されるもの。

Ｂ２類：　底径指数52.48、高径指数22.7を測り、底部から体部が緩やかに内弯して立ち上がり口縁端部が外反気味になるもの。

Ｂ３類：　底径指数60.0、高径指数24.62を測り、底部と体部の境界が明瞭で体部が直線的に伸びるもの。

Ｂ４類：　高径指数26.3前後を測る一群で、底径指数により３群に分けた。

Ｂ4a類：　平均して底径指数53.91、高径指数26.67を測り、底部から体部が直線的に立ち上がるもの。口縁端部形状により直線的に伸びるもの、やや外反気味に摘み出されるものがある。

Ｂ4b類：　平均して底径指数50.02、高径指数26.06を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がる

もの。体部形状が内弯気味と直線的なものがある。

B4c類：　平均して底径指数46.24、高径指数26.26を測り、底部から体部がやや内弯気味に立ち上がるもの。口縁端部がやや外反するものとしないものがある。

B5a類：　平均して底径指数47.89、高径指数30.54を測るもの。体部が緩やかに立ち上がりやや内弯するものと直線的に伸びるもの、底部と体部の境界が明瞭でやや内弯するものと直線的に立ち上がるものがあり、口縁端部が外反気味に摘み出されるものとしないものに細分化される。

B６類：　平均して底径指数42.19、高径指数27.01を測り、体部が外傾するタイプ。体部形状が内弯するものと直線的に伸びるものがあり、口縁端部が外反気味に摘み出されるものとしないものがある。

C）高台付坏　平均して高径指数は32.4程でまとまり、Ｃ１類の底径指数は65.94、Ｃ２・３類は平均して53.18を測り、器高がやや低く底径がやや大きい。

Ｃ１類：　体部下半にナデによる緩やかな稜を持ち体部上半が直線的に伸びるもので、いわゆる稜塊の最終段階にあてられるものである。

C2a類：　底部から体部が緩やかに立ち上がり、やや内弯気味のもの。

C2b類：　底部から体部が緩やかに立ち上がり、体部が外傾しながら直線的に伸びるもの。Ｃ３類：　底部と体部境界がやや明瞭で体部が直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁端部が外反するもの。

ＳＥ2291出土須恵器坏

A）底部回転ヘラ切り

A3a類：　平均して底径指数50.0、高径指数24.64を測り、底部から体部がやや緩やかに立ち上がり、やや内弯気味に伸びるもの。

Ａ４類：　底径指数55.56、高径指数21.18を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がりながら直線的に伸び、口縁端部が外反するもの。

B）底部回転糸切

B4d類：　底径指数49.28、高径指数25.36を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がり僅かに内弯気味に伸びる。口縁端部を外側に折り返し玉縁状にする。器厚は他に比して厚く、胎土には海綿骨針を多く含む。胎土に海綿骨針が確認できた唯一の土器である。

B5b類：　平均して底径指数47.92、高径指数29.04を測るもの。底部と体部の境界がやや明瞭で体部が内弯して伸びるものと直線的に伸びるものがあり、口縁端部形状が横に強く摘み出されるものとしないものに細分化される。

B7a類：　底径指数53.68、高径指数27.94を測り、底部と体部の境界が明瞭で体部が外傾しながら直線的に伸びるもの。

B7b類：　底径指数55.56、高径指数40.48を測り、底部と体部の境界が明瞭で直線的に立ち上がり口縁端部が外反するもの。

B7c類：　底径指数56.45、高径指数31.45を測り、底部と体部の境界が明瞭で内弯しながら伸び

口縁端部が外反するもの。

B8a類：　平均して底径指数45.8、高径指数35.08を測るもの。底部と体部の境界がやや明瞭なものと緩やかに立ち上がるものがあり、体部が直線的に伸び口縁端部が外反するものとしないもの、内弯しながら伸び口縁端部が横に摘み出されるものとしないもの、外反するものに細分化される。

B8b類：　平均して底径指数42.62、高径指数31.0を測るもの。底部から体部がやや緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び口縁端部が横に摘み出されるものとしないもの、外反するもの、体部が直線的に伸びるものがある。

B8c類：　平均して底径指数41.75、高径指数32.86を測り、底部が体部から緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び口縁端部が外反するものと底部から体部が緩やかに立ち上がり直線的に伸びるものがある。

B９類：　平均して底径指数38.96、高径指数31.15を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び口縁端部がやや横に摘み出されるものや外反するもの、底部から体部が緩やかに立ち上がり直線的に伸びるものがある。胎土は灰白色を呈し、焼成が不良な印象な持つ。

B10類：　平均して底径指数35.15、高径指数34.32を測り、底部から体部が緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び口縁端部が外反するものと、底部から体部が緩やかに立ち上がり体部が直線的に伸びるものがある。

C)高台付坏　平均して底径指数48.73、高径指数44.77を測り、器高が高く底径が小さい。

C4a類：　底部から体部が緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び口縁端部がやや外反するもの。

C4b類：　底部から体部が緩やかに立ち上がりやや直線的に伸びるもの。

C５類：　底部から体部が緩やかに立ち上がり内弯しながら伸び、口縁端部がやや外反し、削り出し高台を持つもの。

以上のように、ＳＸ2293とＳＥ2291出土の須恵器坏類について分類を試みた。

全体を見ると、器種については、底部回転糸切が底部回転ヘラ切りを凌駕している。底径指数は最大でも60程で８世紀後半の坏に比して底部が縮小傾向を示していることがわかる。また、高径指数は最大で40程を測り器高が高くなる傾向を示している。個別に見ると、ＳＸ2293出土須恵器坏は底部回転ヘラ切りと底部回転糸切ともに、底径がやや大きく器高が低い傾向を示し、ＳＥ2291出土須恵器坏は底径が小さく器高が高い傾向を示し、体部に残るロクロ痕の凸凹や切り離し部の無調整化や、粗砂が入りざらつく胎土など、粗雑で歪みも大きい印象を強く受ける。

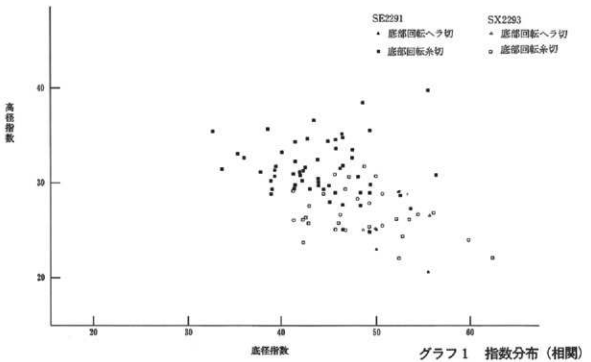
底径指数と高径指数を基に指数分布(グラフ１)を作成し、互いの相関をみた。縦軸が高径指数、横軸が底径指数である。相関グラフは、ドットの集中度が高いほど相関が強いとされる。つまり、類似の集団であることを示し、ドットが散らばっていれば相関が弱く、多様な集団であることを示すのである。グラフを見ると、全体としてはやや散漫な分布状態であることがわかる。つまり、２つの遺構から出土した遺物は相関が弱いことを示している。しかし、遺構毎に見てみると２つの集団に分けられることがわかる。黒塗りはＳＥ2291出土を、白抜きはＳＸ

2293出土を示し、それぞれが集団を形成しているのである。つまり、出土遺構毎に相関が強いことがわかるのである。これは、ＳＸ2293とＳＥ2291との時期差を示すと考えられる。前述したように、底径が大きく器高が低い坏が主体となるＳＸ2293が、底径が小さく器高が高い坏が主体となるＳＥ2291より先行すると考えられるのである。これは、前出岩見・船木両氏の論考(文献15)や置賜地域の須恵器及び須恵器窯跡編年(手塚孝氏御教示による)などの９世紀前半代の須恵器坏類のプロフィールの時期的変遷と同様の傾向を示すことが確かめられた。また、底径指数と高径指数との相関による、プロフィール(器形)のグラフ化による比較は、他の遺構や遺跡間においても時期差や組成の比較を検討する上で有効であると考えられる。

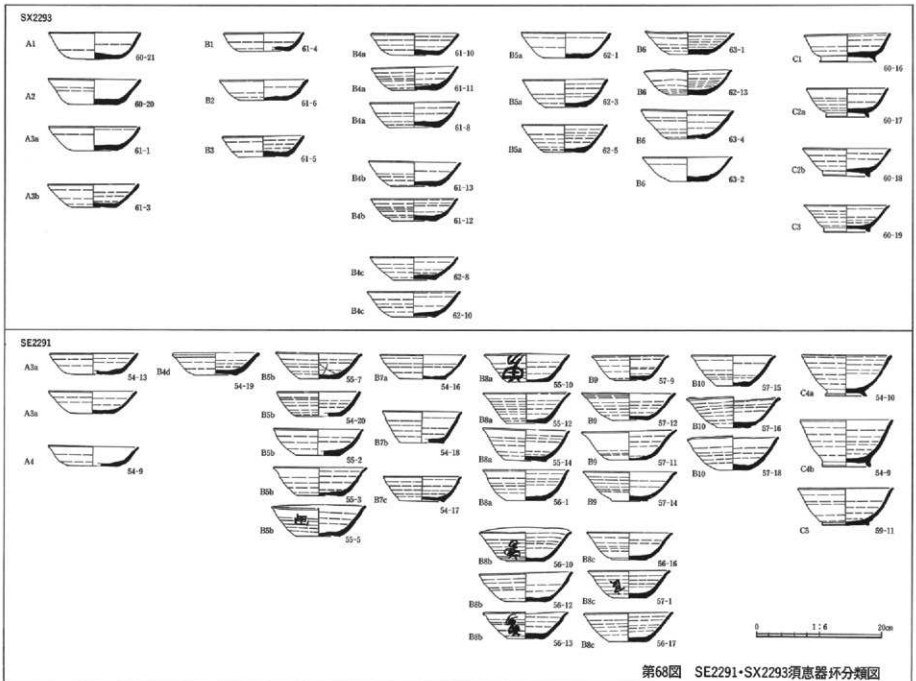
２つの遺構の土器組成には明瞭な差異が見られる。土器組成図(第70図)で見ると、ＳＸ2293は坏・蓋の供膳形態が主体となり、貯蔵形態の須恵器壷・甕類が無く煮沸形態の土師器甕が若干見られる。ＳＥ2291は供膳形態、貯蔵形態、煮沸形態ともに数量的に豊富に見られ、特に煮沸形態の土師器甕類の器形は多様であり、底部形態では、回転糸切痕を明瞭に残すものをはじめ、木葉痕が残るものや網代痕が残るものがみられる。口縁部形態では、外反するものが主体となり玉縁状を呈するものや外反の後、端部が直立するものも含まれる。体部は、ロクロ痕を明瞭に残すもと非ロクロで外面縦位、内面横位にハケメ調整されるものがある。また、蓋が見られないことも特徴となる。

さらに、大きな違いは墨書土器の出土にある。ＳＸ2293からは墨書土器の出土は皆無であるのに対し、ＳＥ2291からは21点の出土があり、出土した墨書土器の87.5％に当たる。

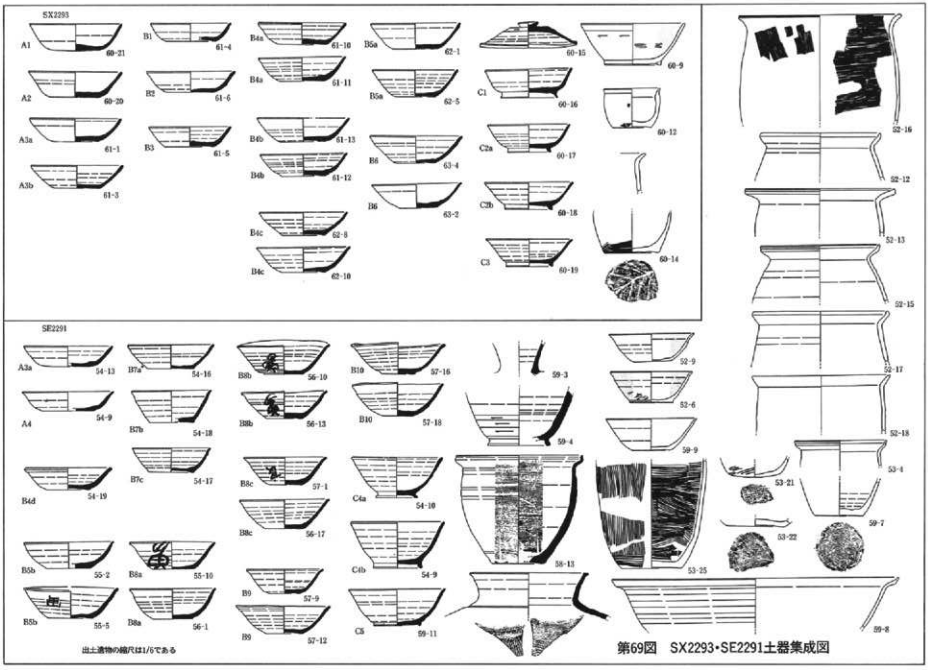
墨書土器の詳細に関しては後述する。



グラフ１　指数分布（相関）



第68図　SE2291・SX2293須恵器坏分類図



第69図　SX2293・SE2291土器集成図

植木場一遺跡出土文字資料について

植木場一遺跡からは、墨書土器を中心に文字資料が総計26点出土した。内訳は、墨書土器が24点、刻書土器1点、刻書石製品1点である。出土総数は多くないものの、井戸跡から集中して出土するなど特徴的な事柄が幾つか存在する。そこで、植木場一遺跡で出土した文字資料について、器種・出土地点・字種・墨書部位等について分析を試みることにより、文字資料の持つ意味、文字を記した後、特定遺構に廃棄する意味等を考察する。

（1）出土文字資料の概要

2次にわたる植木場一遺跡の発掘調査において出土した文字資料は、前述したように調査区全域で26点を数える。主体を成すものは墨書土器であり、字種が確認できず墨痕のみを認めたものを含め総数は24点である。他は、刻書土器1点、刻書石製品1点が出土している。

墨書される土器の器種は、須恵器坏が他を凌駕しており22点を数え、墨書土器の92％を占めている。他は、須恵器高台付坏1点、黒色土器(内面黒色処理)坏1点である。刻書される器種には、須恵器甕1点、石製品1点がある。

出土遺構は、墨書土器ではＳＥ2291から21点を数えるが、他はＳＫ781・ＳＫ484及び3－2グリッドから各1点の計24点である。刻書はＳＧ380から須恵器甕が1点、ＳＥ2033から石製品が1点の計2点出土している。出土遺構の傾向を見ると、井戸跡からの出土が圧倒的に多く、特にＳＥ2291からの墨書土器の出土が突出していることがわかる。文字資料全体では80.1％、墨書土器では87.5％を占めている。

（2）文字種と意味について

植木場一遺跡で出土した墨書及び刻書の字種は、判読できたもので11種を数え、すべて一文字のみの記入である。内訳は、墨書が「曽」・「手」・「持」・「福」・「良」・「本」・「宙」・「丈」・「×」の9種ですべてＳＥ2291から出土している。刻書は「生」・「詣」の2種である。複数確認されているものは、「曽」が4点、「手」が5点となっており、他はすべて1点のみの出土である。

墨書及び刻書された文字が一文字の場合は、人名や地名、使用場所等に由来すると判断される場合を除き単独ではその意味を判断することは困難な場合が多い。今回出土した文字資料の中で一文字のみで何らかの意味を持つ可能性があると考えられるのは、「丈」だけである。北村優季氏は、山形市今塚遺跡で出土した「丈」の墨書土器に関して、『「丈」は東国に多い丈部の姓を略記したものと考えられる』(文献20)としており、本遺跡出土の「丈」も人名の可能性が考えられる。集落遺跡から出土する墨書のあり方については、平川南氏によれば、第一点は一定の祭祀や儀礼行為などの際に、土器になかば記号として意識された文字を記す、いいかえれば祭祀形態に付随し、一定の字形が記載される事例、第二点は、集団の表示記号として、かなり特定の文字を長期間継続的に使用している事例もある、とされる(文献21)。それによると、植木場一遺跡出土文字資料は前者に該当する可能性が高いと判断される。出土文字資料の中では、「福」・「良」は文字通り吉祥句と考えられ、「持」も［まもる、たもつ、もちこたえる、たすける］などの意味が、また、「曽」は［ますます、かさなる、たかい、あがる］などの意味があり

(文献31)、吉祥句の可能性が考えられる。さらに、「手」には［たすけ、ちから］の意味があり(同前)、同様に吉祥句の可能性がある。「宙」や「本」にも、［天］や［みなもと、正しい］の意味が見られ、吉祥句的な内容を持つと考えられる。また、石製品に刻まれた「譖」も［かなう、調和する、やわらぐ］の意味を持ち、吉祥句的な文字とすることが可能である。しかし、焼成前にヘラ描きされた文字については、窯印や使用者・場所などを表す略号の可能性が高いと考えられる。

（3）墨書位置について

墨書(刻書)される部位については、底部17点、体部外面6点、体部内面1点、頸部1点、石製品研磨面1点である。内訳自体は、体部外面がやや多いものの他の遺跡と大きな違いは見られない。しかしながら、特定文字種と墨書部位及び坏分類との関わりについて、大きな特徴が見られる。すなわち、「曽」はB8a類・B8b類に分類される坏の体部外面に墨書されており、「手」はB9類・B10類に分類される坏の底部に墨書されている。さらに、その字形は「曽」・「手」ともに二筆の可能性がある。

また、体部外面に墨書される「曽」・「宙」・「良」は、すべて逆位(倒位)で記されていることが大きな特徴となっている。逆位(倒位)で墨書される事例について、前出平川氏は、「さきの「厨」墨書土器を例にあげるならば、杯型土器の場合、ほとんど底部外面に書かれており、それ以外、若干体部外面に記されているものもあるが、その場合も正位に限られる。このことは、「厨」墨書土器は、食器として常態の使用時を想定して記銘したことを示している。それと対象的なのが、祭祀等の行為に伴う墨書土器の部位である。カマド祭祀に伴う倒位の記載(千葉県佐原市馬場遺跡第4号住居跡出土「上」ほか)、後略」(文献21)としており、逆位(倒位)に墨書された土器に関して、祭祀において使用された可能性を指摘している。

（4）「曽」・「手」の墨書土器について

「曽」・「手」の墨書がある土器は、前述したようにそれぞれが特定の坏類に対し文字種が限定されるように記されており、混在することはない。「曽」の器種は、濃い青灰色を呈し、胎土には細かい砂が混入してザラザラしている。また、体部にはロクロ痕が明瞭に残り、口縁端部を横に摘み出している。一方、「手」の器種は、淡い灰白色を呈し、胎土はやや粉っぽい印象を受ける。底部が他の器種に比して小さく、体部にはロクロ痕が明瞭に残る。口縁端部は横に摘み出されている。さらに、いずれも歪みがあるものがみられる。

さらに、井戸跡から出土した「曽」・「手」それぞれの土器には、他には見られない大きな特徴がある。

一つは、人為的に割られたと考えられることである。「曽」の墨書土器3点は、すべて規則的に底部の中央部分から2分割されたと考えられ、2～3片で完全に復元されている。「手」の墨書土器は、意図的に体部を打ち欠いた後に井戸に投棄されたと考えることができ、完形に復元されるものはない。

二つは、「曽」・「手」の墨書土器いずれも使用痕が見られないことである。祭祀に使用するために特別に誂えたものの可能性が高いと考えられる。あるいは祭祀専用として流通したことも

考えることもできるが、今後、他県における類例等との比較検討を要する。

（5）ＳＥ2291井戸跡集中出土について

これまで墨書土器について述べてきた内容は、ほとんどＳＥ2291井戸跡から出土した墨書土器に関することである。このように、１つの遺跡から出土する墨書土器のほとんどが、特定の井戸跡から出土する例は、県内では類例は少なく珍しい。県内での墨書土器出土遺構は、溝跡及び河川跡がほぼ半数を占めており、井戸跡からの出土例は少ない。未報告であるが寒河江市三条遺跡で出土した墨書土器350点も河川跡からの出土であり、遊佐町上高田遺跡や大坪遺跡でも同様である。井戸跡から墨書土器が多く出土した例としては、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡の井戸跡から67点が出土した例があり、遺跡全体の67％を占めている（文献24）。本遺跡の例は、墨書土器の総数は多くないものの井戸跡からの出土が87.5％を超えており、吉祥句と考えられる文字や墨書部位などから、何らかの祭祀に伴うと考えることも可能である。さらに、「曽」が墨書される土器は、土器出土層の最下層域からの出土であることや、体部外面が周囲から炎を受けたように被熱している須恵器甕（58－13）が土器出土層の最下層から投棄されたような状況で出土することも興味深い。井戸祭祀などに関わる可能性も考えられるが、斎串や木簡など直接祭祀を物語る遺物が出土していないため、詳細については不明である。

また、「手」や「福」・「良」などの墨書土器は、「曽」とほぼ同様に土器出土層の下層からの出土であり、ＳＥ2291井戸跡がある一定期間（１・２年といった長いスパンではない。）、集落、あるいは集団の共同祭祀場所として認識されていたことも考えられる。金子裕之氏は、三重県六大Ａ遺跡や島根県八雲村前田遺跡の河川跡内出土遺構と遺物を記紀神話にある「天安河の誓約」に対応するとして、河原は祭場であり、神霊を迎え天空と通じる場であり集会の場でもあったとしている（文献30）。県内でも遊佐町上高田遺跡や大坪遺跡、八幡町儀田遺跡のように河川跡から大量の墨書土器や人面墨描土器、木簡、斎串などが出土する例が多いのはその反映であり、河原を祭祀場所とする習俗が平安期の地方レベルにおいても存続していたことを示している。また、付近に河原などが無い場合は、溝や井戸跡などが手近な水辺（河原に代わるもの）として利用されたことも考えられ、ＳＥ2291井戸跡がそれに該当すると想定できるのではないだろうか。

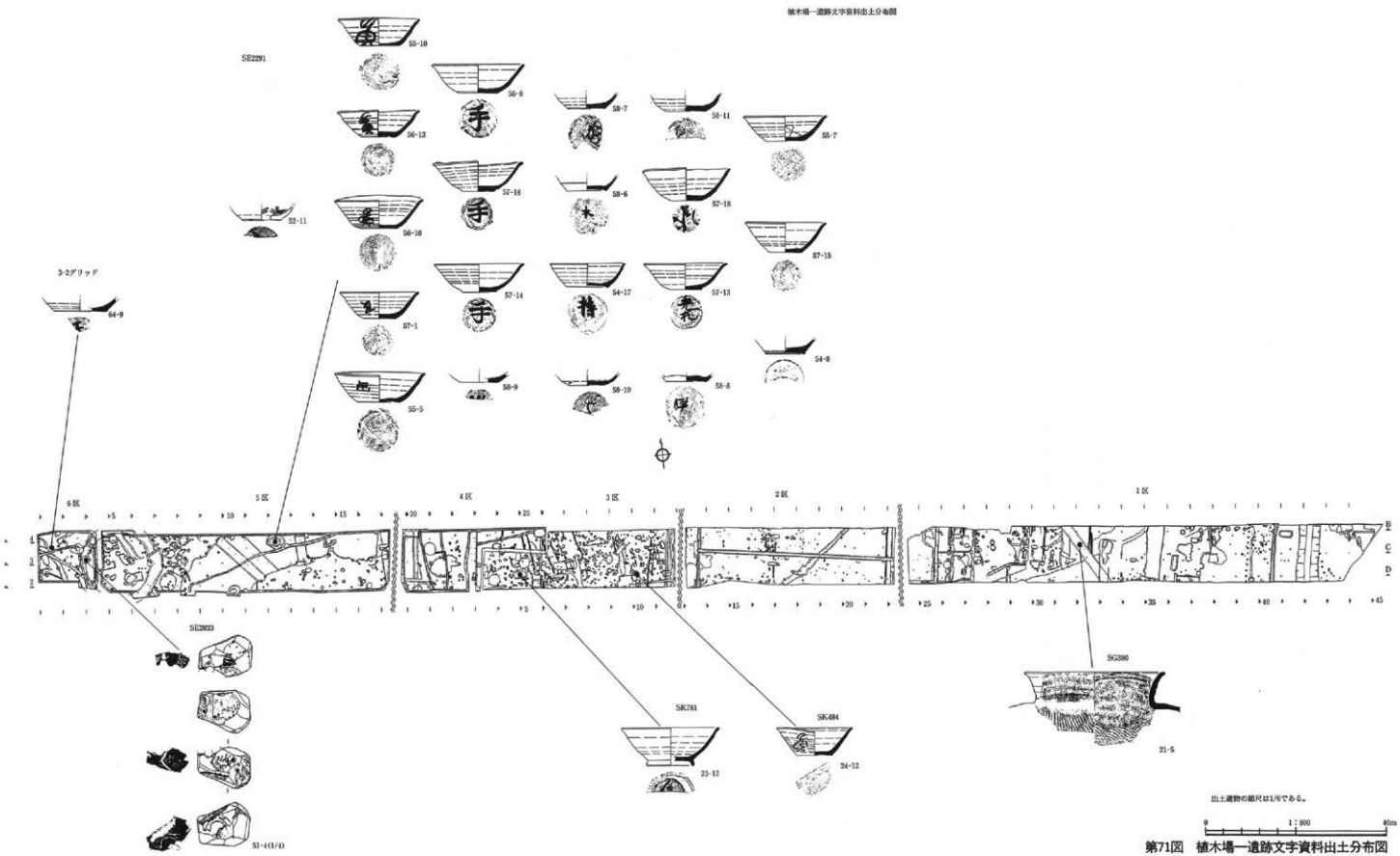
（6）刻書石製品について

ＳＥ2033から出土した刻書石製品は一部欠損しているため全形は不明であるが、吊り紐用の貫通孔があり、身につけたり吊り下げたりしたと考えられる。３面にわたって刻書されており、「諧」の文字の他は、直線が組み合わされた図と曲線を用いて魚あるいは蛇状の図が描かれるものがある。砥石としているが、刻書するために研磨を施して平面を形成している可能性も考えられる。類例としては酒田市上曽根遺跡の土壙から出土した、人面が２面に刻書された砥石がある。何らかの祭祀に使用されたと考えられる。

植木場一遺跡墨書集成

0 1:2 10

第70図　植木場一遺跡墨書集成



第71図　植木場一遺跡文字資料出土分布図

参考文献

1 手塚　孝他　「笹原」『米沢市埋蔵文化財調査報告書第７集』1981

2 手塚　孝他　「大鎧B遺跡」『米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集』1993

3 藤田有宣他　「道伝遺跡」『川西町埋蔵文化財調査報告書第８集』1984

4 須賀井新人他『荒川２遺跡発掘調査報告書』『山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集』1997（以下「山埋文センター」と略す）

5 高橋　敏他　「西町田下遺跡発掘調査報告書」『山埋文センー報第44集』1997

6 渋貴喜悦他　「西谷地遺跡第３次発掘調査報告書」『山埋文センー報第33集』1996

7 斎藤俊一他　「大坪遺跡第２次発掘調査報告書」『山埋文センー報第23集』1995

8 阿部明彦他　「上高田遺跡発掘調査報告書」『山埋文センー報第25集』1995

9 水戸弘美他　『三条遺跡第３次発掘調査説明資料』1996

10 斎藤　健他　『上高田遺跡第３次発掘調査説明資料』1997

11 佐藤鎮雄他　『南陽市史－考古編－』南陽市教育委員会1987

12 田辺昭三　「須恵器大成」角川書店1986

13 辻　秀人　「東北南部における古墳出現期の土器編年その２」『東北学院大学論集－歴史学・地理学－第27号』

14 石野博信他　「６土師器と須恵器」『古墳時代の研究』1993

15 岩見誠夫・鮎木義勝　「山形県の須恵器および須恵器窯の編年」『山形考古第４巻第２号』1988

16 小松正夫他　「秋田城跡出土土器と周辺県の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会1997年度秋田大会シンポジウムII・資料集』

17 利部　修　「辺境における出羽北半の須恵器出土須恵器」『同上』

18 佐藤庄一　「山形県の８・９世紀の須恵器」『同上』

19 阿部明彦他　「庄内平野」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム城柵と地域社会の変容　資料集』1998

20 北村優季　「律令国家と出羽国」『山形考古学会第25回講演要旨』1997

21 平川　南　「土器に記された文字」『月間文化財』1993

22 平川　南　「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』1991

23 水戸弘美　「土器に墨書する意味を探る」『さあべい第15号』1998

24 飯田純友他　「神奈川県の墨書土器について」『神奈川の考古学の諸問題（II）』1995

25 松村恵司　「墨書土器」『古代史研究最前線（別冊歴史読本）新人物往来社』1998

26 佐野五十三　「墨書土器概説論」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』1995

27 「井戸のまつり」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立七周年記念企画展図録』1990

28 西郷嘉章　「北陸の長村御印」『古代から中世へ－古代史復元10－講談社』1990

29 南出俊彦他　「古人のいのり」『秘密展図録　京都市考古資料館』1992

30 金子裕之　「祭りとまじない」『古代史研究最前線（別冊歴史読本）新人物往来社』1998

31 『新撰和辞典』大修館1982

32 斎藤主税　「上皆新遺跡第２次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書第147集』山形県教育委員会1989

33 「神郷村史」

報告書抄録

ふりがな	うえきばいちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	植木場一遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第59集
編集者名	高橋敏・小関真司・高桑登・渡辺薫
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL023-672-5301
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
うえきばいちい 植木場一	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざみやざき 大字宮崎 あざうえきばいち 字植木場一 他	6213	平成2年 度新規登 録	38度 1分 48秒	140度 7分 17秒	19960902 ～ 19961129 19970507 ～ 19970710	4,200	一般県道 南陽川西線 道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植木場一	墳墓	古墳時代	円墳　1	古式土師器(高坏、壷) 須恵器(甕、樽型瓶)	最上川とその支流の上無川の中間の微高地に立地。
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　2 掘立柱建物跡　4 河川跡　2 井戸跡　4 火葬墓　1	土師器(坏、甕) 須恵器(坏、高台付坏、 甕、稜埦、壷)	5世紀中頃の円墳1基を検出。周溝から須恵器甕が出土した。 9世紀中頃の井戸跡1基から大量の土器が出土。
	館跡	中・近世	堀跡　1 土塁跡　2	かわらけ 擂鉢 陶磁器 66箱	墨書土器も集中しており、何らかの祭祀を想起させる。 15～16世紀頃の堀跡とそれに対応する土塁を検出。

図　　版

図版 1

１区全景　空中写真（上が北）

２・３区全景　空中写真（上が北）

図版2

3区重機による表土除去作業(西から)

鋼管埋設作業(南西から)

遺構精査(西から)

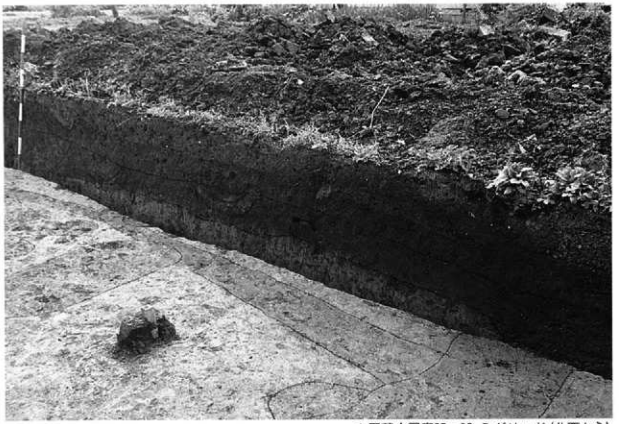
ジョレンによる面整理(東から)

SD205堀跡重機による掘り下げ(南から)

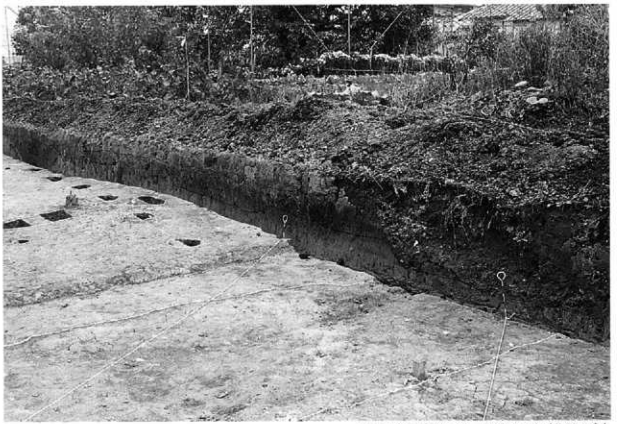
SG380調査状況(北から)

SD205堀跡調査状況(北から)

調査説明会(南から)

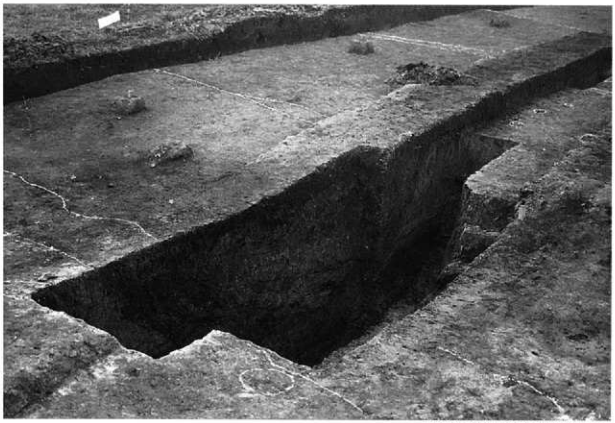


1区基本層序25・26-Dグリッド(北西から)



1区基本層序33・34-Dグリッド(北西から)

図版４



ＳＤ205堰跡土層断面（北東から）

ＳＤ207土層断面（北から）

ＳＤ205完掘状況（南から）

ＳＦ208土層断面（北東から）

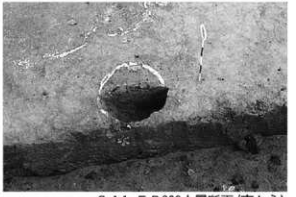
ＳＤ109調査状況（南から）

ＳＡ2検出状況（南から）

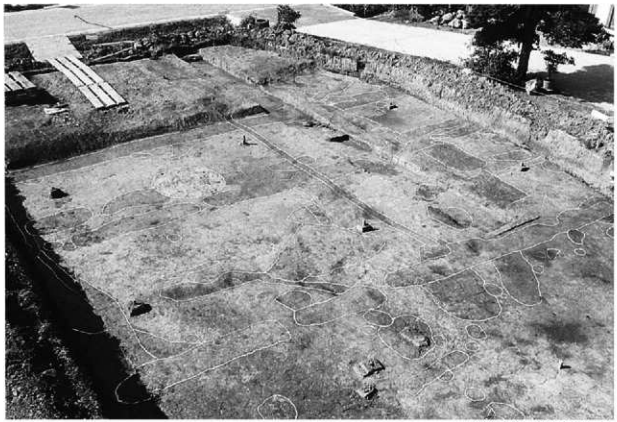
ＳＡ1断面計測作業（西から）

ＳＡ2-ＥＰ893土層断面（西から）

ＳＡ1-ＥＰ281土層断面（南から）


ＳＡ1-ＥＰ300土層断面（南から）

図版6



地業跡検出状況（南から）

地業跡調査状況（南から）

ＳＤ136・137土層断面（南から）

ＳＤ148・ＳＫ147土層断面（南西から）

ＳＤ173土層断面（南から）

ＳＤ294土層断面（北から）

ＳＤ294土層断面（北から）

ＳＤ294土層断面（南から）

ＲＰ104（ＳＤ294）出土状況（西から）

ＳＸ242整地層土層断面（南西から）

ＳＸ242整地層土層断面（南西から）

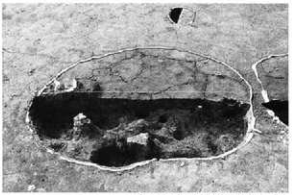
ＳＸ244土層断面（南から）

ＳＤ226土層断面（南から）

図版8

ＳＸ168・ＳＰ169土層断面（南から）

ＲＰ20（ＳＫ168）出土状況（南から）



ＳＫ177土層断面（東から）

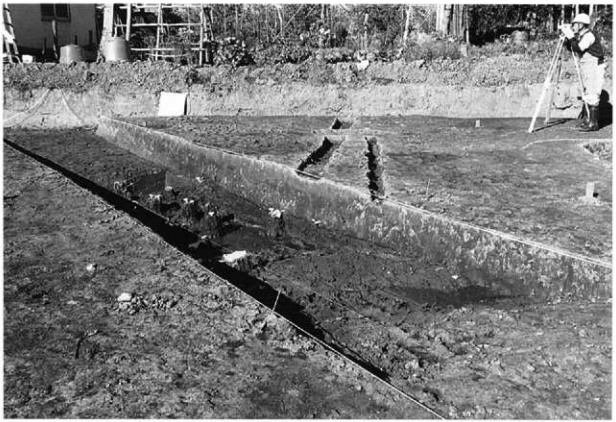
ＳＫ176土層断面（東から）

ＳＫ122・ＳＸ123土層断面（南から）

ＳＫ891土層断面（西から）

板碑出土状況（東から）

ＲＰ1分布状況（南から）



SG380土層断面（南から）

SG380土層断面（南から）

SG380土層断面（南から）

SG380遺物出土状況（北から）

SG380遺物出土状況（北から）

図版10

SD106検出状況（南から）

SD106土層断面（北から）

SD80調査状況（南西から）

SD80土層断面（北東から）

SD4土層断面（南から）

SD4土層断面（南から）

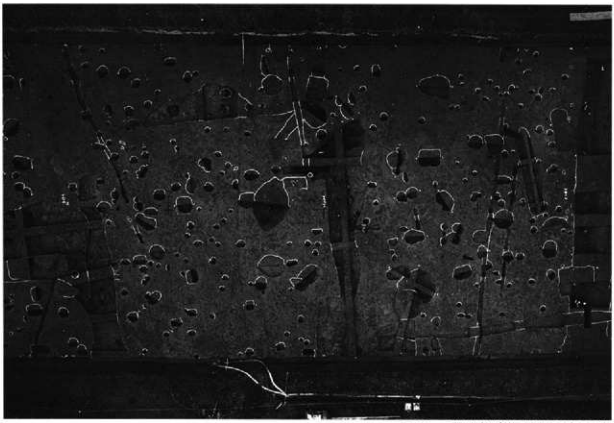
SK101土層断面（北西から）

2区基本層序（北東から）

3区遺構検出状況（東から）

3区遺構完掘状況（東から）

図版12



SB1・2掘立柱建物跡（上空南より）

SB1-EB465土層断面（南東から）

SB1-EB408土層断面（南から）

SB2-EB562土層断面（南から）

SB2-EB592土層断面（南から）

ＳＤ382調査状況（南から）

ＳＤ382調査状況（東から）

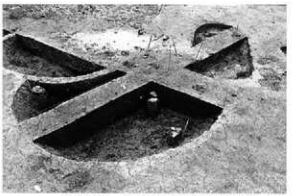
ＳＤ382杭列検出状況（北から）

ＳＤ382土層断面（南から）

ＳＤ382土層断面（南から）

図版14

SK575・SP576土層断面（南から）



SK484・485東西土層断面（北東から）

SK486・SX487・488土層断面（東から）

SK484遺物出土状況（東から）

SK781東西土層断面（南から）

SK781南北土層断面（東から）

SX779南北土層断面（東から）

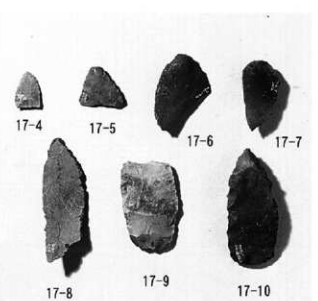
SK793土層断面（西から）

17-1
17-2
17-3

17-11

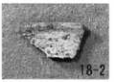
17-1
17-2
17-3

17-4
17-5
17-6
17-7
17-8
17-9
17-10


17-4
17-5
17-6
17-7
17-8
17-9
17-10

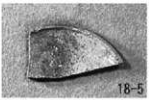
図版16

18-1

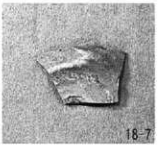

18-2

18-3

18-4


18-5

18-6


18-7

19-1

19-2

19-3

19-5

19-4

19-6

19-7

19-8

19-9

19-10

19-11

19-12

19-13

19-14

19-15

19-16

19-17

19-18

19-19

20-1

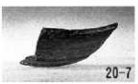
20-2

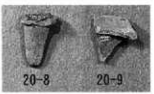
20-3

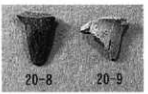
20-4

20-5

20-6


20-7


20-8 20-9

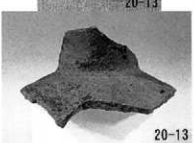

20-8 20-9

20-10

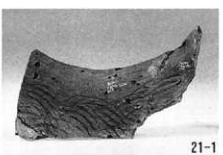
20-11

20-12

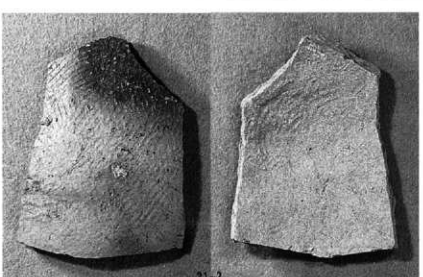
20-13


20-13

21-1


21-1

20-14

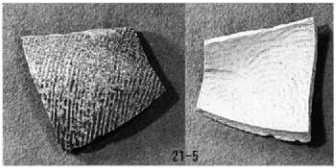

21-3

図版18

21-2

21-4

21-6


21-5

21-7

21-8

21-9

21-10

22-1

22-4

22-3

22-2

22-5

22-7

22-6

22-8

22-9

22-10

22-11

23-1

22-12

23-2

23-3

23-4

23-5

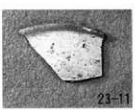
23-6

23-7

23-8

23-10

23-9


23-11

23-12

23-15

23-16

23-13

23-14

24-1

24-2

24-3

図版20

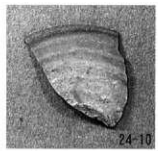
24-4

24-5

24-7

24-6

24-8

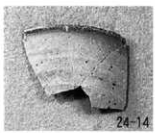

24-10

24-9

24-11

24-12

24-13


24-14

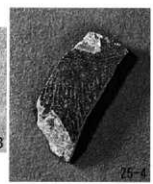
24-15

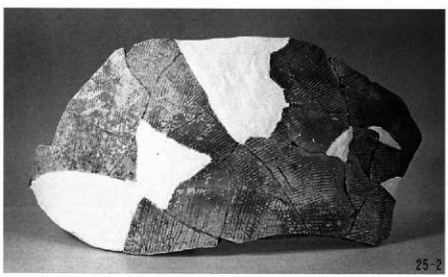
24-16

24-17

25-1

25-3


25-4


25-2

25-5

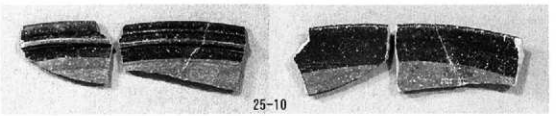
25-6

25-7

25-8

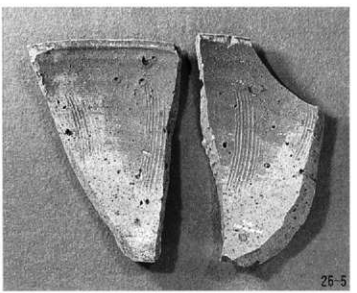
25-9

27-15 25-1 27-15 26-1


25-10

26-2

26-3


26-5

26-4

26-6

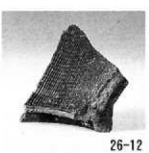
26-7

26-8

26-9

26-11

26-10


26-12

26-13

27-8

27-9

図版22

27-1

27-2

27-10

27-11

27-5 27-3 27-7 27-6 27-4

27-12

27-13

27-14

27-16

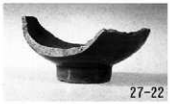
27-17

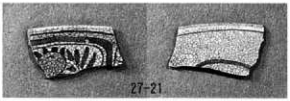
27-18

27-19

27-23

27-20


27-22


27-21

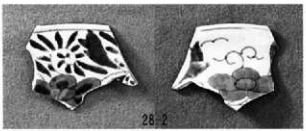
28-1

28-2

28-4

28-5

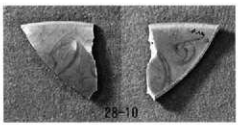
28-6

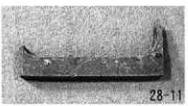

28-2

28-7

28-8

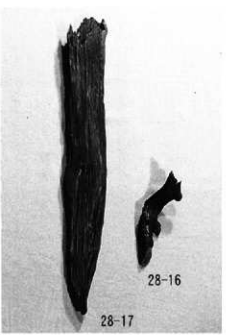
28-9


28-10

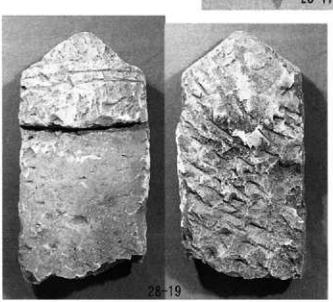

28-11

28-12

28-13


28-16
28-17

28-14
28-15
28-18


28-19

図版24

第２次遺構検出状況（西から）

調査区空中写真（上が北）

鍬入式状況（北東から）

重機粗掘状況（西から）

遺構精査状況（南西から）

グリッド杭打状況（東から）

記録作業状況（北から）

セクション実測状況（東から）

ラジヘリ空撮状況（北東から）

調査説明会状況（東から）

図版26

ＳＨ2077完掘状況（上が北）

ＳＨ2077検出状況（西から）

ＳＨ2077精査状況（北から）

ＳＨ2077セクション（北から）

ＳＨ2077礎出土状況（北から）

ＳＴ2099完掘状況（上が北）

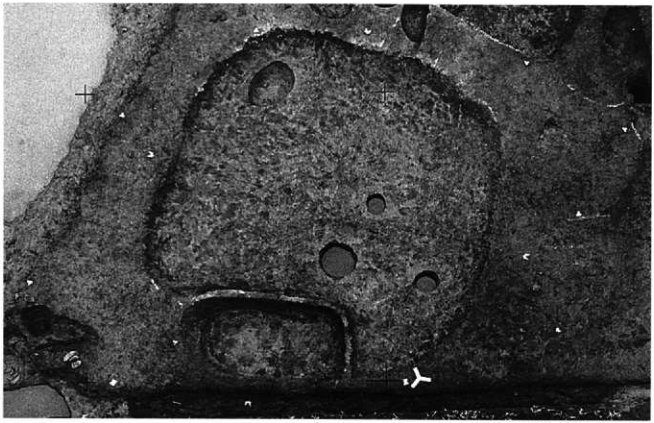
ＳＴ2099セクション（北西から）

ＳＴ2099セクション（南西から）

ＳＴ2099ＥＰ1・2セクション（南から）

ＳＴ2099ＥＰ5セクション（北東から）

図版28



ＳＴ2100完掘状況（上が北）

ＳＴ2100セクション（東から）

ＳＴ2100セクション（南から）

ＳＴ2099、ＳＴ2100検出状況（北から）

ＳＸ2065セクション（南から）

ＳＧ2155、ＳＤ2180完掘状況（上が北）

ＳＤ2180遺物出土状況（西から）

ＳＤ2180セクション（西から）

ＳＧ2155精査状況（北から）

ＳＧ2155セクション（西から）

図版30

ＳＤ2011、ＳＰ2023セクション（南から）

ＳＤ2013セクション（南から）

ＳＤ2021セクション（南東から）

ＳＤ2014セクション（東から）

ＳＨ2077、ＳＤ2021、ＳＤ2014セクション（南から）

ＳＤ2300、2301セクション（南から）

ＳＤ2303セクション（西から）

ＳＤ2296セクション（北から）

ＳＫ2028遺物出土状況（南東から）

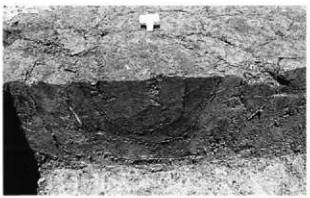
ＳＫ2028セクション（南東から）

ＳＫ2032セクション（西から）

ＳＫ2302セクション（東から）

ＳＫ2302セクション（南から）

ＳＫ2190遺物出土状況（北から）


ＳＫ2190セクション（北から）

ＳＫ2190完掘状況（北から）

図版32

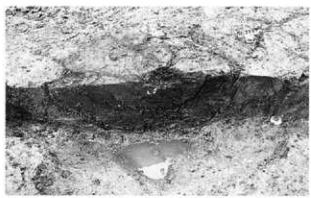
ＳＫ2069セクション（北から）

ＳＫ2060、2063セクション（西から）

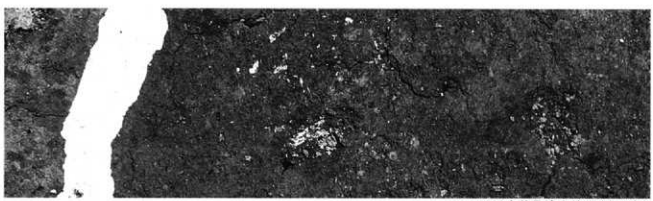
ＳＫ2237セクション（南から）

ＳＫ2238セクション（北から）

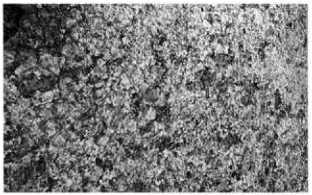
ＳＫ2239火葬骨検出状況（南から）

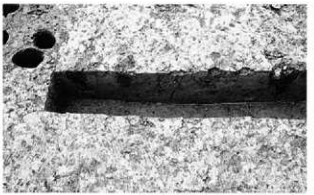


ＳＫ2239セクション（北から）



ＳＫ2239火葬骨検出状況（南から）


SA2357検出状況（南から）


SA2357セクション（東から）

SE2291遺物出土状況（南から）

SE2291遺物出土状況（北西から）

SE2291セクション（北から）

SE2292検出状況（北から）

SE2292セクション（北から）

SE2292完掘状況（南東から）

図版34

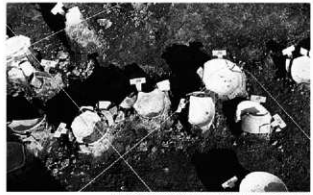
ＳＥ2033遺物出土状況（南から）

ＳＥ2033セクション（南から）

ＳＥ2033刻書石製品出土状況（南から）

刻書石製品拡大（南から）

ＳＸ2293遺物出土状況（北西から）



ＳＸ2293遺物出土状況（北西から）

ＳＸ2297セクション（南から）

北側基本層序（南から）

48-1

48-6

48-7

48-14

48-18

48-3

48-4

48-2

48-5

48-8

48-10

48-9

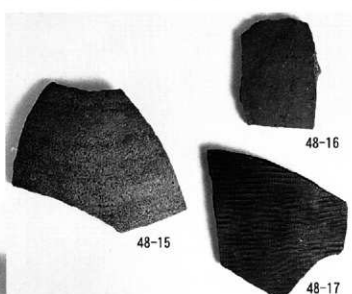
48-11

48-12

48-20

51-5

59-11


48-15

48-16

48-17

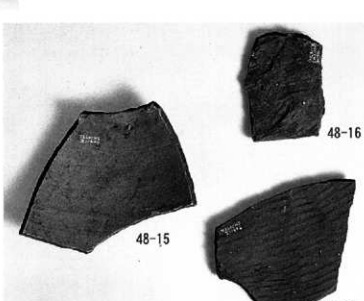
48-13

48-19

49-7

49-11

49-24

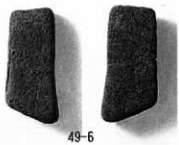

48-15

48-16

48-17

図版36

49-1


49-6

49-12

49-14

49-13

49-3

49-2

49-9

49-17

49-5

49-4

49-16

49-19

49-10

49-8

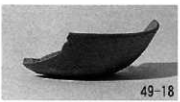
49-22

49-26

49-20

49-21

49-15


49-18

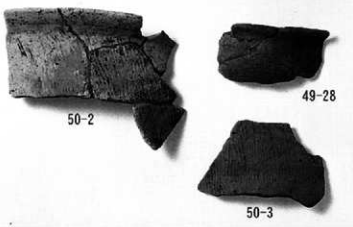
49-25

60-2

49-27

49-23

50-10


50-2
49-28
50-3

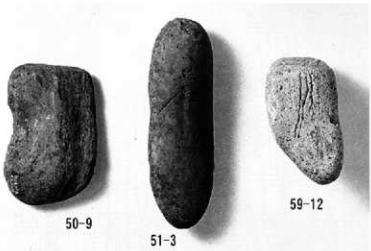
50-1

50-5

50-4

50-6

50-12


50-9
51-3
59-12

50-13

50-15
63-18

50-16
50-17
50-22

50-7
50-8

50-23
50-21

図版38

50-11

50-14

51-6

51-13

50-18

50-20

50-19

51-1

51-2

51-10

51-11

51-1

52-2

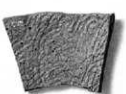
52-3

51-7

51-14

51-9

51-12


52-2

52-3

51-15

52-1

52-4

52-7

51-8

52-14

52-5

52-6

52-15

52-8

52-9

52-17

52-10

53-20

53-4

53-21

52-18

52-16

53-2

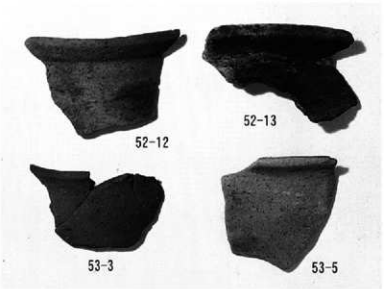
53-1

53-22

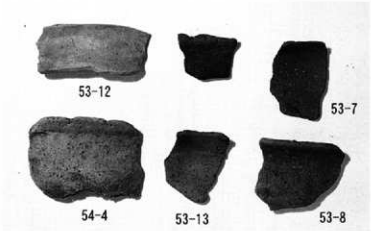
53-23

53-26

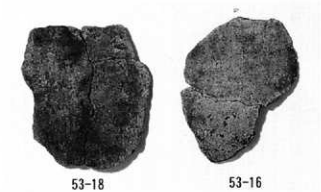
図版40

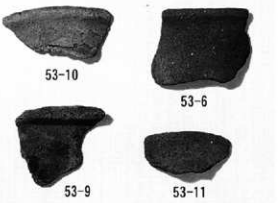

52-12
52-13
53-3
53-5

53-25


53-12
53-7
54-4
53-13
53-8

53-14


53-18
53-16


53-10
53-6
53-9
53-11

53-24

53-27

53-29

53-15

53-17

53-19

53-28

54-2

54-3

54-1

54-7

54-6

54-8

54-11

54-13

54-9

54-10

54-14

54-5

54-12

54-15

54-20

55-1

54-16

54-18

55-3

54-17

54-19

55-4

図版42

55-2

55-5

55-7

55-6

55-9

55-10

55-11

55-14

55-12

55-8

55-13

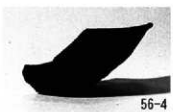
55-15

56-1

56-2

56-3

56-8


56-4

56-6

56-9

56-5

56-10

56-11

56-7

56-12

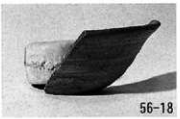
56-13

56-14

56-15

56-16

56-17


56-18

57-1

57-2

57-3

57-4

57-10

57-5

57-6

57-7

57-8

57-9

57-11

57-12

57-13

57-17

57-14

57-15

57-16

57-18

58-1

58-4

図版44

58-2

58-3

58-6

58-7

58-8

58-5

59-6

58-11

58-10

58-9

59-4

58-13

58-12

58-12

59-7

59-3

59-9

58-14

58-15

59-10

59-5

59-2

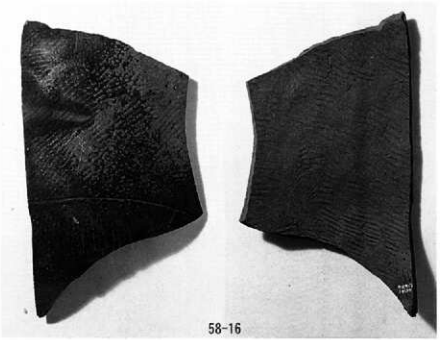
60-1

60-3

60-5

60-10

60-13

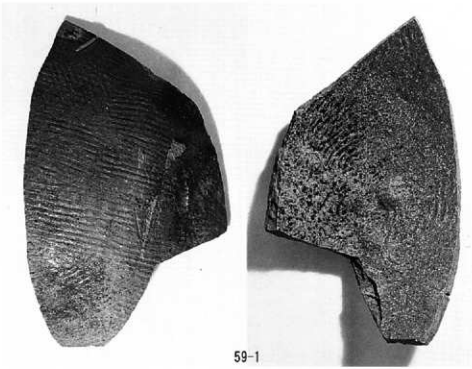

58-16

60-4

60-6

60-8

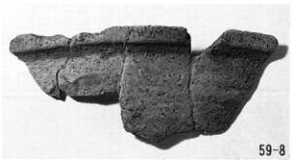
60-11


59-1

60-12

61-7

63-16


59-8

63-5

63-9

63-13

63-11

図版46

60-7

60-15

63-10

60-9

60-14

60-16

60-17

60-18

60-19

60-20

60-21

61-1

61-2

61-3

61-4

61-5

61-6

61-8

61-9

61-10

61-11

61-12

61-13

61-15

61-14

62-1

62-2

62-3

62-4

62-5

62-6

62-7

62-8

62-9

62-10

62-11

62-12

62-13

62-15

62-14

63-2

63-3

63-1

63-4

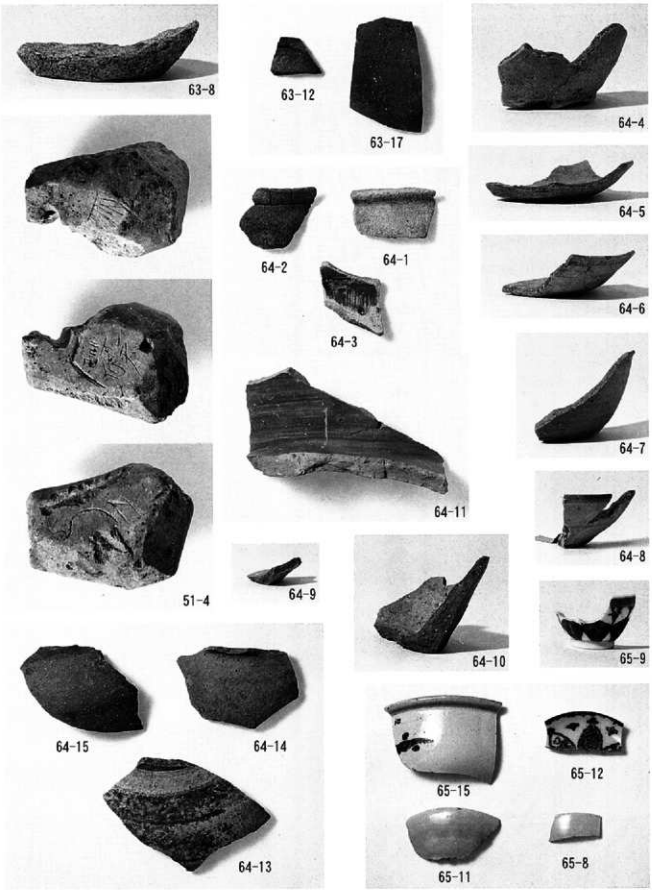
63-15

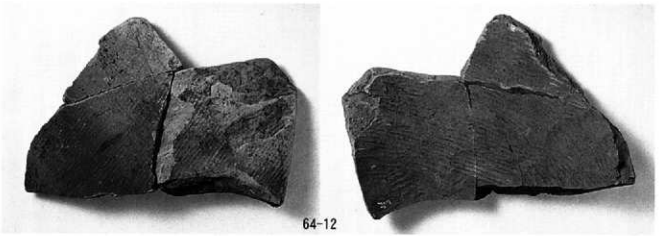
63-6

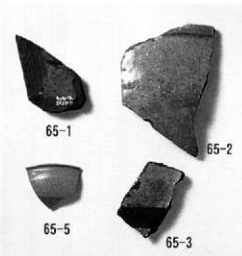
63-7

63-14

図版48


63-8
63-12
63-17
64-4
64-5
64-2
64-1
64-6
64-3
64-7
64-11
64-8
51-4
64-9
64-10
65-9
64-15
64-14
65-15
65-12
64-13
65-11
65-8


64-12


65-1
65-2
65-5
65-3

65-4

65-6

65-7

65-10
65-10

65-16 (上下)

65-16 (上)

65-16 (中)

65-16 (下)

66-6

66-15

66-16

66-17

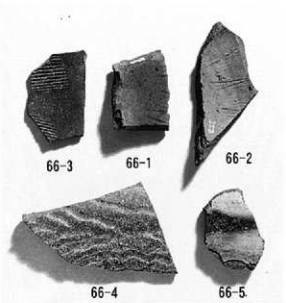
65-14

65-13

65-14

65-13

図版50


66-3
66-1
66-2
66-4
66-5

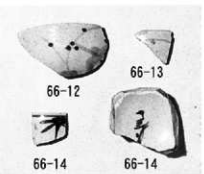
66-7

66-8

66-9

66-10

66-11


66-12
66-13
66-14
66-14

66-18

67-3

67-7
67-6
67-5
67-4

67-7
67-6
67-5
67-4

65-17
67-1
67-2

67-8

67-9

付　　編

植木場一遺跡のリン酸・カルシウム分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

植木場一遺跡は、最上川とその支流である上無川に挟まれた微高地上に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代～近世までの複合遺跡であることが判明している。

今回の発掘調査では、奈良・平安時代および中世の遺構で骨片が出土したり、土師器の埋納が確認されたため、墓壙の可能性が指摘されている。また、5世紀中葉の周溝を有する円墳では、墳丘部の中央部付近に主体部の可能性がある土壙が認められた。そこで、これらの遺構への遺体の埋納の可能性を検証するために、動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量を測定することとした。リン酸は人骨に多量に含まれる成分であり、分解した遺体のリン酸成分が土壌中に含まれるアルミや鉄と結合し、難溶性のリン酸化合物を形成するために、濃集の有無が確認しやすい。また、人骨に多量に含まれるカルシウムについても分析を行う。

1．試料

調査対象は、ＳＫ2239、ＳＰ2190、ＳＫ2067の3基である。ＳＫ2239は、平安時代あるいは中世と考えられる円形の土壙である。土壙覆土は2層に区分され、第1層に焼骨とみられる白色物が認められ、火葬骨を埋納したものと考えられている。試料として、土壙覆土の第1層より土壌1点が採取された。

ＳＰ2190は、奈良・平安時代と考えられる円形の土壙である。土壙覆土は3層に区分され、第1層に土師器坏および焼土を含む土壌、第2層と第3層に土師器甕破片が検出された。これは、第1層と第2層の土壌を入れた土師器甕を埋納したような状況とのことである。また第3層は、埋め戻し土と考えられている。試料として、土壙覆土の第1・2・3層および地山の土壌が、各1点計4点採取された。

ＳＫ2067は、円墳ＳＨ2077のほぼ中央部に位置する土壙である。土壌内には灰白色の部分がみられ、この遺構が円墳の主体部の可能性があると考えられたが、発掘調査時に用いたマーキング用の消石灰が混入した可能性も指摘されている。試料は、白色部を含む土壌より2点が採取された。送付された2点に特別な区別がなかったため、便宜的に試料(A)と試料(B)とした。

2．分析方法

分析では、土壌標準分析・測定法委員会編(1986)、土壌養分測定法委員会編(1981)、京都大学農学部農芸化学教室編(1957)、農林水産省技術会議事務局監修(1967)、ペドロジスト懇談会(1984)などを参考にした。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料1.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO_3) 5㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)10㎖を加えて再

び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸(P_2O_5)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

3．結果

結果を、表1に示す。

表1　リン・カルシウム分析結果

試料名		土性	土色		P205(mg/g)	CaO(mg/g)	備考
SP2190	F1	HC	10YR3/4	暗褐	1.84	2.93	
	F2	HC	10YR2/3	黒褐	1.82	2.58	
	F3	HC	10YR4/3	にぶい黄褐	1.60	3.02	
	F4	HC	10YR4/4	褐	1.08	3.83	地山
SK2239	F	HC	10YR1.7/1	黒	14.72	14.21	焼けた骨片が混入
SK2067	(A)	HC	10YR2/1	黒	1.97	12.84	骨片(消石灰？)
	(B)	HC	10YR3/2	黒褐	2.04	13.51	が混入

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修，1967)による。
土性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編，1984)の野外土性による。
HC：重埴土(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

分析時の土性判定により、各遺構試料の土性は重埴土であり、重粘質であることが判った。

S P2190では、リン酸含量は1.08～1.84P_2O_5mg/gと幅があるもの、低い値である。カルシウム含量も同様に2.58～3.83CaOmg/gと低い値となっている。

S K2239の試料Fは、リン酸含量とカルシウム含量がともに14.72P_2O_5mg/g、14.21CaOmg/gと高濃度である。

S K2067では、試料(A)・(B)ともにリン酸含量が2.00P_2O_5mg/g程度と低い値であるにも関わらず、カルシウム含量は13.00CaOmg/g前後と高い値である。

4．考察

各遺構覆土の土性は重埴土と判定され、粘質であった。土壌中の粘土分は理化学成分を保持しやすいことから、各遺構ではリン酸成分やカルシウム成分などの化学成分が残留しやすかったと推定される。

ところで、リン酸の土壌中に普通に含まれる量、つまり天然賦存量は約3.0P_2O_5mg/g程度とされる(Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか，1991;天野ほか,1991)。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は、5.5P_2O_5mg/gとの報告もある(川崎ほか,1991)。すなわち、この値を著しく越える土壌では、外的要因(おそらく人為的影響によるもの)によるリン酸の富化が指摘

できる。また、カルシウム含量は一般的に土壌中に1～50CaO㎎/g(藤貫, 1979)といわれ、天然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きいために、土壌本来の含量と外的要因で富化された含量の区別をすることは難しい。しかし、遺体の痕跡が残留していれば、リン酸含量とともに高いことが予想される。

この点を考慮して、今回の調査結果を検討すると、S K2239の試料Fでリン酸・カルシウム含量ともに著しく高い。また、S P2190の試料F4(地山)と比較しても、4倍程度の含量差が認められた。さらに、本遺構では焼けた骨片の混入が認められている。これから、S K2239は骨片の混入により、リン酸・カルシウム成分が富化したと判断される。

また、S P2190の試料F1・F2では、試料F3・F4と比較してやや高いリン酸含量であるものの、天然賦存量の範囲内であり、またS K2239と比較しても低い。さらに、カルシウム含量も低い。これらより、壁内に人骨などの痕跡は認められず、遺体埋納の可能性は低い。なお、試料F1・F2では土色が暗褐色あるいは黒褐色であり、腐植の混入がうかがえる。腐植は主に植物遺体により供給され、それとともに植物由来のリン酸も富化する。そのため、試料F1・F2でのリン酸には植物由来のものも含まれると考えられる。今後、腐植の影響を評価するために腐植含量も測定し、濃集の有無をさらに明確にすることが有効であろう。

S K2067の試料(A)・(B)では、カルシウム含量が著しく高い。しかし、リン酸含量は天然賦存量の範囲にあり、S K2239と比較しても低い。このため、カルシウム成分は人骨などの動物遺体に由来するとは考えにくい。混入の可能性が指摘されているマーキング用の消石灰(主成分は、水酸化カルシウム)がリン酸を大量に含まないことを考慮すれば、ここでのカルシウム成分の富化は消石灰によるものと考えるのが妥当と考えられる。なお、S K2067は円墳S H2077のほぼ中央部に位置し、周囲のS K2069など4基の土壌よりも古いことがうかがえることから、主体部であった可能性がある。今後は、平面的・垂直的に試料採取を行い、残留成分の分布状況を空間的に把握したい。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.

Bowen.H.J.M.(1983)環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳,297p.,博友社［H.J.M.Bowen(1979)*Environmental Cemistry of Elements*］.

Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.(1980)土壌の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳.309p.,学会出版センター［H.G.B_{OLT} and M.G.M.$B_{RUGGENWERT}$(1976)*SOIL CHEMISTRY*］, p.235-236.

土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析・測定法. 354p.,博友社.

土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法. 440p.,養賢堂.

藤貫　正(1979)カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52：57-61, 地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149p.：p.23-27.
京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書　第1巻．411p.，産業図書．
農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖．
ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，156p.：p.39-40.

植木場一遺跡の古植生と遺物の素材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

植木場一遺跡で検出された堀ＳＤ205は、中世の宮崎館の堀と考えられており中世後半のものと考えられている。堀の埋積層には、種実が集中して検出される部分が存在した。ここでは、その種実の種類を知り、当時の堀内および周辺の植生環境について検討する。また、同じ埋積層断面より出土した土器片について、林質の特徴すなわち胎土を把握することにより、それが須恵器かあるいは珠洲焼かを検討する。

１．種子分析

１．試料

試料は、ＳＤ205の種実遺体集中部(17層壁面付近)から採取された土壌試料１点である。

２．方法

試料を、水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5㎜の篩を通して残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出・同定を行う。

３．結果

検出された種類ならびに個体数は、ヒメビシが59個、ヒシモドキが２個、カタバミ属、イネ科、アカザ科ーヒユ科がそれぞれ１個であった。ヒメビシが圧倒的に多く、発掘調査時に肉眼で認識されたものの多くはヒメビシであるとみられる。以下に形態的特徴を示す。

・ヒメビシ(*Trapa incisa Sieb.* et Zuee.)ヒシ科ヒシ属

果実が検出された。大きさは、棘の端から端までが２㎝程度。逆三角形で、４棘ある。棘の先端には、逆棘がみられる。果皮は比較的薄くて堅く、やや光沢がある。全体的に小さくて、本体と比較して棘が長く、かつ４棘があることからヒメビシとした。

・ヒシモドキ(*Trapella Sinensis* Oliver)ヒシモドキ科ヒシモドキ属

果実が検出された。黒色で、針状。果実本体の大きさは1.5㎝程度。側面には縦目状の翼が発達する。基部は急に細くなり、１㎝程度の突起が糸状になる。先端部からは、５本の長い針状突起がのび、その長さは３㎝程度である。

・イネ科(*Gramineae* sp.)イネ科

穎の破片が検出された。淡褐色、半球状で大きさ２㎜程度。表面には縦長の細胞が密に配列する。柔らかくて弾力があり、薄い。

・アカザ科ーヒユ科(Chenopodiaceae－Amaranthaceae sp.)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは１㎜程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・カタバミ属(*Oxalis* sp.)カタバミ科

種子が検出された。黒色、楕円形で大きさは約1.5㎜。表面には横軸方向に平行に溝が数本走っている。

4．考察

今回検出された種実遺体で特筆すべきは、ヒメビシとヒシモドキの存在である。両者とも池沼に多い種類であることから、堀はある程度の水深をもっており、これらは堀内に生育していたものと推定される。現在のヒメビシやヒシモドキの分布は、開発等によって分布域が狭められ、限られた場所にしか存在しない(角野、1994)。ヒメビシは、寿能泥炭層遺跡(邑田、1982)などで報告があるが、同属のヒシやオニビシに比べて検出例が少ない。また、ヒシモドキも、Miki (1961)等に報告されているが、検出例はまれである。古い時代には現在よりも分布域は広かったのであろうが、植物地理学的な見地から、今回の成果は重要な成果であるといえる。また、他の種実は、周囲に生育していた草本類に由来すると思われ、これらが近くに生育していたものと考えられる。

Ⅱ．胎土分析

1．試料

試料は、S D205の底に近い31層と32層にまたがって出土した土器(須恵器)片または陶器片1点(S D205 R P14)である。

2．方法

試料の材質とこれまでの分析例を考慮して、薄片観察による胎土分析を行った。薄片は試料の一部を切断し、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。薄片は、偏光顕微鏡下で構成鉱物やその組織を観察した。ここでは、鉱物片・岩石片・基質という視点で記載し、また観察される鉱物の加熱変化から焼成温度を推定した。

3．結果

(1) 鉱物片

石英：少量含まれ、粒径0.5～0.02㎜の破片粒状を呈する。高温焼成を受け、特有の割れ目を生じ、縁辺部の一部および割れ目に沿って微溶融が認められる。

カリ長石：微量存在し、最大粒径1.2㎜の破片粒状を呈する正長石で、中心部に残晶が認められるが、周縁部は溶化しガラス化している(図版4の右上のKf)。

斜長石：少量存在し、最大粒径0.45㎜の他形粒状を呈する。一部は中心部に残晶が認められ、集片双晶を示すが(図版2)、大部分はムライト化し斜長石の仮像を示すに過ぎない(図版2)。残存する斜長石は曹長石質である。

雲母鉱物：きわめて微量存在し、粒径0.15㎜の葉片状を呈する。加水雲母が加熱された生成物で劈開間が遊離している。

ジルコン：きわめて微量存在し、粒径0.05㎜の半自形柱状を呈する。

不透明鉱物：微量存在し、最大粒径0.11㎜の他形粒状を示す黒色鉱物である。

(2) 岩石片

シルト岩：微量存在し、粒径2.0㎜の亜円礫状を呈する。加熱焼成され、岩片中に存在する石英細片および石英細脈を除いて非晶質化し、多数の溶化ガラス粒が生成されている(図版4)。

砂岩：微量存在し、最大粒径0.5㎜の亜角礫状を呈する石英質アレナイトである。

チャート：微量存在し、粒径0.65㎜の亜角礫状破片の形態を示す。やや片状を呈する細粒石英粒の集合体で形成される。

凝灰岩：微量存在し、最大粒径5.5㎜の亜円礫～亜角礫状を呈する(図版2)。大部分は非晶質であるが、一部は弱い珪化作用を受けている。

珪化岩：微量存在し、最大粒径0.72㎜の亜角礫状を呈する。細粒石英粒の集合体で、原岩は不明であるが一部はチャート源と考えられ、また、一部に安山岩の組織を残留するものがある。

（3）基質

多量存在し、鏡下では暗褐色の色調を呈する。粒径0.02㎜以下の石英細片を少量含むほかはいわゆる粘土で構成されるが、高温加熱により非晶質化し、一部は溶化している。粘土鉱物は残留していない。

（4）高温鉱物の生成

ムライト：斜長石(曹長石質)は高温焼成を受けてムライト代し、長さ0.03㎜程度針状ムラウトが密に生成している(図版2，3)。

4．考察

（1）焼成温度の推定

一般に粘土を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物が晶出したり、溶融・非晶質化などの現象がみられる。当該陶磁器試料の顕微鏡下での加熱変化は曹長石(斜長石)のムライト化、カリ長石の溶融、石英の高温加熱によるクラック(割れ目)の生成と微溶化、粘土鉱物の非晶質化と溶化である。焼成温度の推定についてはこれらの現象について検討し、下項を指針として適用した。

1）曹長石は1,118℃で溶化する。曹長石の加熱変化は単純ではなく、縁辺部の非晶質化→褐色変色→針状ムライト晶出(疎～密)→中心部にムライトの二段晶出→全面的な針状ムライトの成長の順で、途中段階では中心部に曹長石の残晶が認められる。この加熱変化の非晶質化～褐色変化の段階は、1,120～1,150℃に相当するものと考えられる。

2）カリ長石の溶化温度は約1,150℃である。石英に高温焼成クラックおよび部分的な溶融組織がみられ、カリ長石に顕著な溶融組織が認められるが、ムライトが生成していない試料の焼成温度は1,150℃＋と推定される。

3）カオリンが存在する場合、1,100℃付近からSi02と反応して一次ムライトが生成し始めるが、針状ムライトの生成が顕微鏡下で確認される試料の焼成温度は、1,200℃±と推定される。この状態ではカリ長石は完全溶融していることが多い。

4）針状ムライトが密に生成されている試料は、1,200～1,250℃の焼成温度と推定される。

以上に挙げた現象のうち当該試料は4）の段階に相当し、1,200～1,250℃の焼成温度と推定される。

（2）土器の産地について

本試料に含まれる砕屑片のうち、鉱物片となるカリ長石(正長石)・斜長石(曹長石質)・雲母鉱物・ジルコンはその産状から花崗岩類に起源すると考えられる。また、岩石片となる砂岩、チャートは古期岩層(中－古生層)起源、シルト岩・凝灰岩・珪化岩は新第三系起源と考えられる。したがって、粘土採取地あるいは水系上流域には花崗岩・古期岩層が分布し、低地では新第三系がこれを覆っていると想像される。本試料はこのような環境で生成した粘土および砂を原料としているといえる。

南陽市西北部の山地には花崗岩体が広く分布し、北東部地区には新第三系が発達している。さらに最上川支流の小樽川の上流の飯豊山地東部には、砂岩、頁岩・チャートからなる中－古生層が分布している。以上のことから、少なくとも米沢盆地における表層の粘土や砂は、今回の胎土分析から得られる地質条件を満たしているといえる。すなわち、米沢盆地という範囲で捉えれば、今回の試料は在地の粘土および砂を用いている可能性が高いと考えられる。したがって、今回の試料は、比較的高温で焼かれた須恵器であると考えられる。

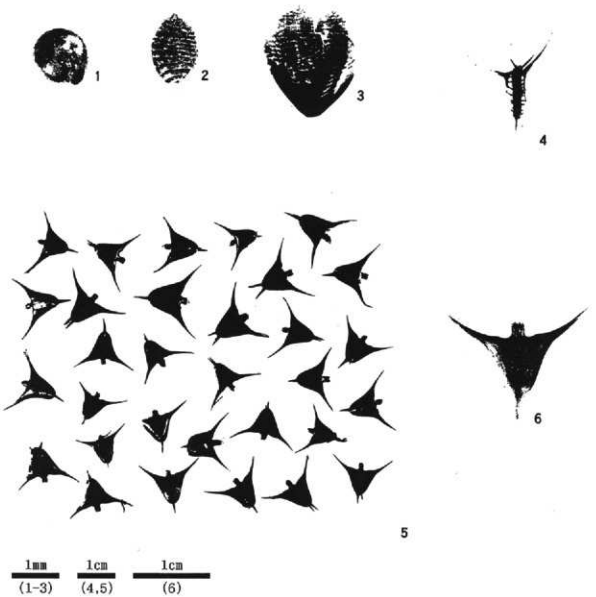
〈引用文献〉

角野康郎(1994)日本水草図鑑．179P.,文一総合出版．

邑田　仁(1882)種子．「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書　－自然遺物編－」,p.287-298,　埼玉県教育委員会.

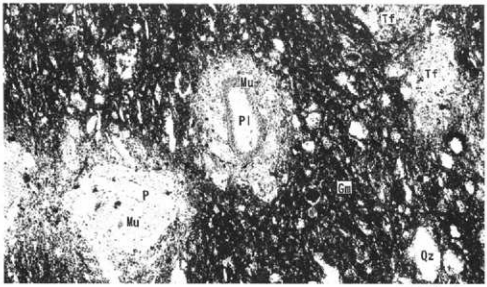
MiKi Shigeru(1961)Aquatic Floral Remains in Japan.Journal of Biology, Osaka City University,12,p.91-121.

図版1　種実遺体

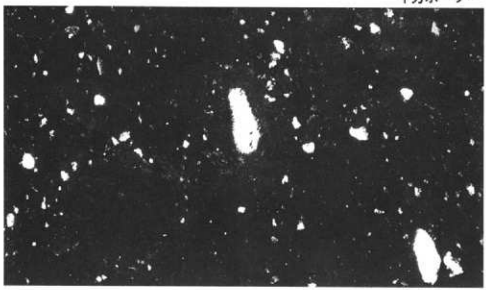


1．アカザ科－ヒユ科(SD205　堀)
2．カタバミ属(SD205　堀)
3．イネ科(SD205　堀)
4．ヒシモドキ(SD205　堀)
5．ヒメビシ(SD205　堀)
6．ヒメビシ(SD205　堀)

図版2　胎土薄片（1）

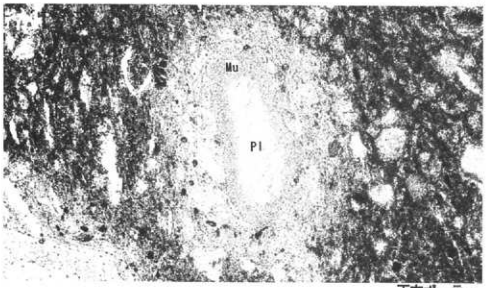


下方ポーラー



直交ポーラー

0　0．2mm



下方ポーラー

0　0．1mm

試料番号　SD205　RP14

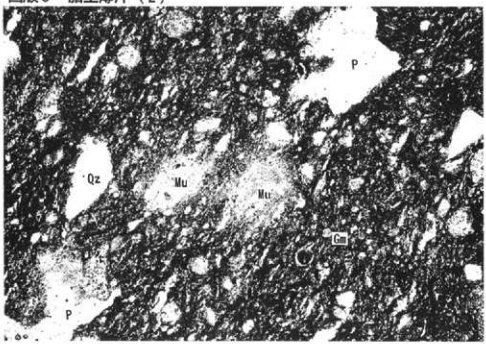
胎土薄片図版説明

図版番号	内容	写真倍率	ニコル
2	ムライト化した斜長石(曹長石)、石英と凝灰岩	×100	−
2	同上	×100	+
2	針状ムライトと斜長石残晶の拡大写真	×200	−
3	斜長石を完全に交代した針状ムライト	×100	−
3	同上の拡大写真	×200	−
4	石英細脈を有するシルト岩と溶化したカリ長石(僅かにカリ長石の残晶が認められる)	×50	−
4	同上	×50	+

鉱物・岩片等略号

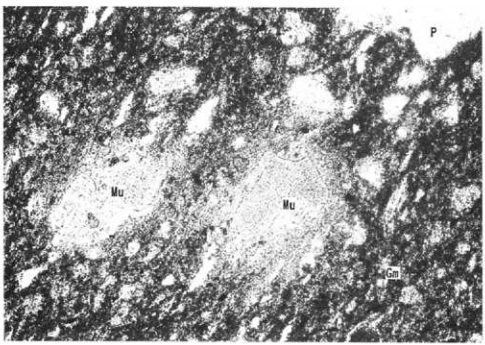
Qz：石英
Kf：カリ長石(正長石)
Pl：斜長石(曹長石質)
Mu：針状ムライト
Si：シルト岩
Tf：凝灰岩
P：空隙
Gm：基質
Q-v：石英細脈

図版3　胎土薄片（2）



下方ポーラー

0　　0．2mm

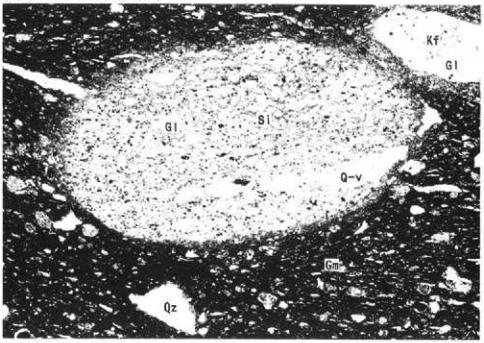


下方ポーラー

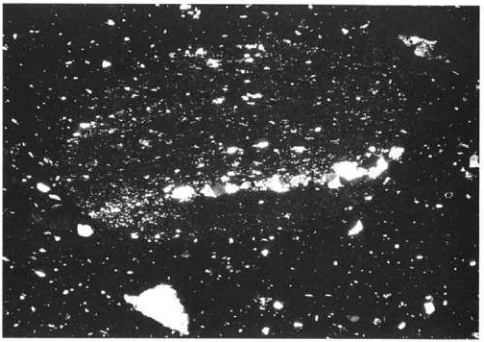
0　　0．1mm

試料番号　SD205　RP14

図版4　胎土薄版（3）



下方ポーラー



直交ポーラー

0　　0.5mm

試料番号　SD205　RP14

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集

植木場(うえきば)一遺跡発掘調査報告書

1998年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　藤庄印刷株式会社